
バイナリー・ハート

山岡屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイナリー・ハート

【Nコード】

N6050P

【作者名】

山岡屋

【あらすじ】

幸せな結婚生活を送る科学者の元に、二年前に失踪したかつての助手が現れた。

彼は失踪前、恨み言を残していた。

「オレの大切なものを奪ったあなたに復讐してやる」

彼の言う復讐とは？ 真意はどこに？

「克蘭ベールに行ってきます」の二年後から始まる続編ですが、単品でも読めるように加筆修正しました。

異世界が舞台ですが、ファンタジー要素はほとんどありません。

Setup

胃袋と脳を刺激する甘い香りに誘われて、ロイドは毎朝目を覚ます。ユイの作るお菓子の香りだ。

彼女は毎朝暗いうちに起きて、店に並べるお菓子を作る。ロイドが仕事で出かけている間、暇をもてあますので、玄関ホールを改装して半年前からお菓子売る店を始めたのだ。

午前十一時に開店して、午後の四時には閉店する。一人で作っているのに、そんなに数は多くないが、毎日きれいに完売しているようだ。

店を始める前に、売れ残ったら全部食べていいと言われていたのに、甘いものの好きのロイドとしては完全に当てが外れた。

以前は独り占めしていたユイのお菓子が、今では口に出来る機会が格段に減っている。それが結婚して唯一不満に思う事だった。

ロイドとユイが結婚して一年が過ぎた。出会ってからだと二年になる。

長い黒髪と黒い瞳のユイは、ニッポンという異世界からやって来た。

二年前、行方不明になった王子殿下を探すため、ロイドは国王陛下の勅命により、搜索責任者となっていた。

王宮内の研究室で臨床試験中だった自作マシン、広域人物搜索装置を使用した時、マシンの中に現れたのが、殿下にそっくりな容姿をしたユイだった。

広域人物搜索装置は入力した検索条件に基づき、人物に限定して検索結果を返すマシンだ。オプション機能として、限定されたターゲットを装置の中に転送することも出来る。

名前が長すぎると言って、ユイはこの装置のことを人探しマシン

と呼んだ。

当時は原因不明の誤動作によって、ユイが転送されたと思っていた。

殿下の行方は分からないまま、誤動作の原因を探っていくうちに、ユイはロイドにとってかけがえのない存在となっていた。

結局ユイが転送されたのは、マシンの誤動作が原因ではないことが判明し、殿下も無事に発見された。

ユイがニッポンと行き来するためにマシンは改造され、今では座標さえ分かれば異世界からの転送も、逆に送り出すことも出来るようになっていた。

いつでも会うことが可能になったユイとロイドは順調に愛を育み、一年ほど前に結婚して、今は克蘭ベール王国の首都ラフルールにあるロイドの家で一緒に暮らしている。

毎朝、甘い香りに包まれてゴロゴロしていると、階下からユイが朝食が出来た事を知らせてくる。その声を合図に、ロイドはベッドから這い出して階下へ向かう。

食事は基本的にユイが作る。最初の頃は手つきがおぼつかない上に、手際が悪いので、通常の三倍は時間がかかっていた。見かねて手伝おうとすると、頑固なユイは自分でやると言って聞かない。

ニッポンから大量に持ち込んだ本を見ながら作っているせいか、味が酷いものを作った事はないが、毎日夕食にありつけるのは、九時や十時を回っていた。

さすがに一年経つと手慣れてきて、余裕も出てきたせいか、時々ロイドが作ると喜ぶようになった。

ユイの作る朝食はいつもワシヨク（和食）だ。ニッポン独自の食材で作られたミソシル（味噌汁）と深めの器に入ったライスがおいしい。小さな四角いフライパンを使って、クルクル巻いて作る甘い卵焼きもロイドは気に入っていた。

克蘭ベールにはないニッポン独自の食材は、ユイが実家から送ってもらった。

最初はユイが直接取りに行っていたが、広域人物搜索装置が科学技術局内に移されてからは、一般人のユイは頻繁に出入りが出来ない。

科学技術局は克蘭ベール王国の国家機関だ。国の最先端科学を駆使して行われる研究開発は、当然ながら国家機密も多く含まれる。部外者の立ち入りやマシンの使用には、面倒な手続きが必要なのだ。そのためロイドが物品専用の小さな時空移動装置を自宅用につくった。

朝食を終えて身支度を調べると、ロイドは玄関へ向かう。以前の玄関は店になってしまったので、今はリビング横に新たな玄関が作られている。

今日は副局長が休みなので、よほどの大事件でもない限り確実に定時で帰れる。

「今日は早く帰るから、オレが夕食を作ろう。魚と肉とどっちがいい？」

尋ねるとユイは嬉しそうに笑った。

「お魚。あなたの料理久しぶりだから楽しみ。じゃあ、私はデザートを用意して待ってるね」

「ああ。行ってくる」

挨拶のキスをして、ロイドは家を出ると、科学技術局へ向かった。

夕方、予定通り定時に職場を出たロイドは、買い物をして真っ直ぐ家に帰る。玄関を入ると、甘い香りと共にユイが出迎えた。

「おかえり」

「ただいま」

結婚して、一番幸せを感じるのはこの瞬間だ。

孤児のロイドは子供の頃から、家に帰って「ただいま」を言った事が数えるほどしかない。学校に通う頃から、育ての親である考古

学者のブラーヌはクランベールに点在する遺跡を点々としていて、ほとんど家にいなかったからだ。

家に帰った時、必ず出迎えてくれる人がいるというのは、とても幸せな事だと初めて知った。

「今出来たとこな。あなたが好きなクレームブリュレよ」

笑顔のユイが指し示すテーブルの上には、白くて丸い容器がズラリと並んでいた。表面のサクサクして焦げた砂糖の部分が、ロイドのお気に入りだ。

以前大きな器で作ってもらったら、表面だけ先に食べてしまつて後が寂しくなつたので、それ以来、あえて小さな器でたくさん作つてもらふ事になっている。

すぐにでも食べてみたかったが、食後の楽しみに取っておこう。

ロイドは買ってきた食材をキッチンに運び、猫の額ほどの小さな庭に出た。植えた覚えもないが、以前から生えていたハーブの芽を少し摘んでくる。

以前は伸び放題の雑草に覆われて、見分けが付かなくなっていたが、ユイが手入れをして、少しは庭らしくなっている。今はお菓子里に使うミントや木イチゴ類が、新たに植えられていた。

キッチンに戻ったロイドは、ユイのリクエストに応じて、買ってきた魚を調理する。

しばらくしてロイドの作った夕食が食卓に並び、二人で食事を始めた。

お互いの一日の出来事を話しながら、楽しそうに食事をしていたユイが、ふと浮かない表情を見せた。

「どうした？ 口に合わなかったか？」

ロイドが問いかけると、ユイは慌てて笑顔を作る。

「うっん。ごはんはすごくおいしい。ただ、ちよつと気になる事があつて、それを思い出したの」

「なんだ？」

ユイが言つには、ここ十日ばかり、毎日お菓子を買いに来ていた

少年が、昨日から来なくなったらしい。病気で寝ている彼の祖母が、ユイのお菓子を気に入っていたので、元気づけるために買いに来ていたという。

病人にユイのお菓子は向かないんじゃないかと言うと、食べられなくても、見て、食べられるようになるうと思ってももらえればいいと笑っていたらしい。

「それにね。おばあちゃんが食べなくても、自分が食べるから無駄にはしないよって気を遣ってくれたの。いい子でしょ？」

「ああ。でも、来なくなっただって事は、ばあさんが元気になったんじゃないのか？」

ロイドの問いかけに、ユイは再び表情を曇らせる。

「うん……。そうかもしれないけど、なんか急にパタッと来なくなっただけだから、気になって……」

ロイドはテーブルの上にひじについて身を乗り出すと、ユイの顔を覗き込んだ。

「おまえ、その子を見て子供が欲しくなったのか？」

「え？」

ユイは一瞬目をしばたいた後、クスクス笑い始めた。

「ああ。確かに、できたら子供は欲しいけど、その子そんなに小さい子じゃないわよ。王子様と同じくらいじゃないかな」

「じゃあ、充分大人じゃないか」

「そうね。でも笑った顔があどけなくって、かわいいの。きれいなプラチナブロンズにブルーグレイの瞳だね。色白ですごく華奢だから、最初女の子かと思っちゃった。背は私と同じくらいんだけど」

ユイの告げた容姿に酷似した人物をロイドは知っている。

「そいつの名前は？」

「ベルよ。ベル＝グラウヴ。カードの名前はそうだったわ」

克蘭ベール国民の証、識別カードは店で買い物をする時、認証装置にかざして決済を行う。同時にカードの持ち主が手の平をかざす事で、カードに記録された生体情報と照合を行うので、他人の力

イドは使えないのだ。

偽造が困難な上に、本人にしか使えないカードで、認証エラーが出なかったという事は、ユイの店に来ていた少年は、ベルグラーヴという人物なのだろう。ロイドの知っている人物ではない。

「知ってる人？」

ユイが不思議そうに首を傾げた。

「いや、知っている奴に、見てくれが似ていただけだ」

二年前からいつも心に引っかかっていた人物、ランシユ「バージユは元気だった頃、その少年によく似ていた。

二年前、遺伝子の宿命によって命の終焉を迎えていた彼は、見る影もなく老化して別人のように変わり果てていた。

病床の彼は、ロイドを睨んで宣告した。

——オレの大切なものを奪ったあなたに、復讐してやる——

ランシユが元気になって戻ってくるなら、復讐でも何でも受けてやるとロイドは答えた。

ユイの話を聞いて、本当に元気になって戻って来たのかと思ったが、どうやら人違いのようだ。

遺伝子に刻まれた宿命から、逃れようはない。元々ランシユが元気になる見込みは、限りなくゼロに近かった。

ロイドが彼に会ったのは、それが最後だ。その一ヶ月後に、ランシユは入院中の病院から失踪した。一度、科学技術局に姿を現した事は分かっているが、その後の消息は分からない。

動く事もままならない状態だったランシユが、今も生きている可能性は低いが、遺体が見つかったという話も聞いていない。消息が分からないので、ずっと心に引っかかっていたのだ。

食事と片付けを終え、風呂から上がると、ユイが明日の仕込みをちよつと終えたところだった。

ユイが風呂に入っている間、リビングのソファに腰掛けて、ロイ

ドは再びランシュの事を考えた。

もしも今も生きているなら、ランシュは今年二十歳になる。元気になったとしても少しは大人びているだろう。ユイの店に来ていた少年がランシュだとしたら、どうやって生き延びる事が出来たのかも気になる。

明日、識別カードの持ち主、ベルググラーヴについて、調べてみる事にしよう。

そんな事を考えていると、ユイが風呂から上がってきた。

ロイドは立ち上がり、一階の灯りを消すと、ユイを引っ張って二階へ向かう。

「今日はさっさと寝るぞ」

「え？ まだ九時だけど、明日早いのか？」

相変わらずとぼけた事を訊くユイの顔を叩く。

「毎朝早いのはおまえの方だろう。この半年、オレがどれだけ我慢してると思ってるんだ。早く帰った時ぐらい、わがまま言わせろ」

「いいけど。せっかく早く帰ったのに、さっさと寝ちゃうのか？」

キョトンと首を傾げるユイに、思わず全身の力が抜ける。この鈍さは何年経っても変わらない。

気を取り直して、ロイドはユイを抱き上げた。呆氣にとられたように見つめるユイに、顔を近付けてニヤリと笑う。

「ただ寝るだけなわけないだろう。おまえ、子供が欲しいんだろう？」

「……え……」

ようやく理解したユイを抱えて、ロイドは笑いながら寝室に入った。

翌日ロイドは科学技術局で、仕事の合間にベルググラーヴなる人物について調べてみた。ラフルールの住民管理課にいる知人に問い

合わせたところ、すぐに正体は分かった。

ベルⅡグラヴ 九十二歳 女。ラフルールでひとり暮らし。おまけに三日前に死亡している。

ユイの店に通っていた少年は、他人のカードを使用していたのだ。彼の言っていた祖母が、ベルⅡグラヴだったのだろう。

だが、認証装置がエラーを起こしていない。

どうやって他人のカードを使う事が出来たのかを考えると、少年はもしかしたら本当に、元気になったランシュかもしれないと思えた。

機械工学の天才児とまで言われたランシュなら、カードに何らかの細工を施すくらい出来そうな気がする。

途端に胸騒ぎがして、ロイドは席を立った。

白衣を脱いで部屋を出ようとした時、やってきた副局長とぶつかりそうになった。

驚いて見上げる副局長に、ロイドは短く告げる。

「家に忘れ物をした。ちょっと帰ってくる」

そして早足で、科学技術局を後にした。

家にたどり着いたロイドは、真っ直ぐユイの店に向かう。

半分開け放たれた扉の奥に、ショーケースの向こうで笑っているユイの顔が見えた。閉じられた方の扉の影にいる客と話しているようだ。

ロイドの姿に気付いたユイは、驚いたようにこちらを向いた。

「ロイド。どうしたの？」

ロイドは閉じられた方の扉に手をかけ、中を覗いて愕然とする。扉の影にプラチナブロンドの人影を目にした途端、まるで時の流れが遅くなったような錯覚に陥った。

ユイの声とロイドの気配に、ゆっくりとこちらを向いたそいつは、

紛れもなく二年前に失踪した、ランシュ＝バージュ本人だった。

Run (1)

ロイドの姿を認めたランシュは、フワリと微笑んだ。その笑顔はユイが言っていた通り、あどけない少年のものだ。記憶にある、急速に老化が進む前のランシュの姿だ。

言葉をなくして見つめるロイドに、ランシュは笑顔のまま口を開いた。

「お久しぶりです、ロイド」ヒューパック先生。二年ぶりですね」
動揺を隠せないまま、ロイドはやっこの思いで言葉を絞り出す。

「おまえ……ランシュ、なのか？」

「ええ」

ランシュは一層目を細めて頷いた。

「ロイド、ベルの事、やっぱり知ってる人だったの？」

ロイドがハツとして首を巡らせると、ユイが不思議そうにランシュとロイドを見つめていた。

「こいつはベルじゃない。ランシュ」バージュだ」

「え？ だって、カード……」

ユイの瞳が困惑に揺れる。他人のカードが使えない事は、異世界人のユイも知っているからだ。

ランシュは全く悪びれた様子もなく、平然とユイに笑顔を向ける。

「ごめんね、ユイ。あれ、おばあちゃんのカードなんだ。騙すつもりはなかったんだけど、オレのカード使えないからさ」

「余計な事は、しゃべるな！」

ロイドが厳しく制すると、ランシュは口をつぐみ、おどけたように肩をすくめて見せた。

「奥で話そう」

ロイドはランシュの腕を掴み、店の奥へ向かう。奥の扉を開けて

家の中に入ろうとすると、後ろからユイがついてきた。

「じゃあ、お茶淹れるわね」

振り返ったロイドは、それを冷たく拒絶する。

「いい。かまうな。というより、悪いが席を外してくれ」

ユイは立ち止まる。笑顔が消えて、表情を硬くした。

「局の話？」

「ああ」

ロイドが短く答えると、ユイは淡く微笑んだ。

「じゃあ、私は店にいるから、終わったら声かけてね。私もあなたに話があるの」

「わかった。すまない」

ロイドはランシュと共に家に入ると、扉を閉じた。

機密だらけの科学技術局内の事を外部に漏らせば、守秘義務違反で罪に問われる。ユイもそれは承知していた。

ロイドは科学技術局の局長という立場にある。とはいえ局内の事が全件ロイドに一任されているわけではない。重要な決定事項はロイドを含めた数名の幹部局員が、協議の上で決定する事になっていた。

ロイドはリビングのソファにランシュを座らせ、自分もその斜め前に座る。

訊きたい事は山ほどある。何から訊いたらいいのか迷って、ロイドが黙っていると、ランシュがクスクス笑い始めた。

「ユイって、あなたの奥さんですよ？ 奥さんにも局の事は秘密

なんですね。さすが局長。守秘義務も徹底していらっしゃる。じゃあ、オレの事も話してないんだ」

「当たり前だろう」

ランシュは存在自体が、科学技術局のトップシークレットだ。

二十年前、科学技術局の人工子宮から、ランシュは生まれた。

当時、科学技術局のバイオ科学者だった彼の母親クロワゼ「バーシュ」が、自らの卵母細胞と事故死した夫の体細胞から、助手を欺き、

法に背いてランシュを作った。

それが発覚したのは、ランシュが産声を上げた後だった。ヒトクローンの作成は前陛下の勅命により、二十二年前から法律で禁止されている。

さすがに生まれたものを殺すわけにはいかないので、ランシュは生まれた時から科学技術局の監視下に置かれ、局内で生活していた。ランシュの母は今も服役中で、一生牢から出られない。科学者が科学に関する法を犯すと、一般人よりも遙かに罪が重いのだ。

当時のロイドはまだ子供だったので、事件には関与していないが、国の科学のトップ機関での不祥事が、世間を騒がせたのは覚えてい

る。対外的にランシュは、生後間もなく死亡した事になっている。ランシュが生きている事が知られれば、彼がいつまでも好奇の目に晒されるばかりか、科学技術局の不祥事がいつまでも人の記憶から薄れる事がないからだ。

分別のない子供を外に出して、自身の事や局内の事を外部に漏らされては困るので、ランシュは子供の頃、科学技術局の外へ出る事を禁じられていた。

外出と、外部と接触する可能性のある見学コース、面会エリア、各研究室への出入りは制限されていたが、それ以外の局内は自由に動けた。

もつとも、各研究室の出入りは、局員たちもそれぞれ制限されているので、ランシュだけ特別というわけではない。本人も生まれた時からその環境になれているせいか、特に疑問にも思っていなかったようだ。

外出禁止のランシュは、学校にも行っていない。局員が交替で勉強を見ていた。

入局して間もない頃、ロイドもランシュの教育担当になったことがある。機械工学に興味を持ったランシュは、ロイドになついていた。

その頃の名残で、ランシュは今でもロイドを”先生”と呼ぶ。

ランシュは知能が高く、知識欲も旺盛で、十六歳の時その天才的な頭脳が認められ、ロイドの助手として科学技術局の局員となった。局員となる事で責任と守秘義務が課せられ、外出も認められるようになったが、常に監視はついていた。

二年前に入院中のランシュの監視は緩かったようだが、どうやって監視の目を逃れて失踪できたのかは謎だ。

病院を抜け出したランシュは、科学技術局に戻っている。局内随所に設置された、監視カメラに映像が残っていた。

そこまでは足取りが掴めているが、その後局から出て行った経緯が不明だ。

動くのもままならない状態だったランシュが、いつ、どうやって局から抜け出したのかわからない。

それも気になるが、今、目の前にいるランシュの姿の方が、ロイドには驚異だった。

老人のようにやつれていた面影が、全く見られないどころか、すっかり若返っている。

二十年前の未完成なクローン技術のせいで、ランシュの身体は十代半ばから老化を始めていた。そして二年前には、わずか数ヶ月で急速に老化が進み、動くのもままならない状態だったのだ。

「どうやって老化を止めたんだ？」

ロイドが尋ねると、ランシュはしれつとして答えた。

「身体を入れ替えたんですよ。細胞のひとつひとつ、全部ね」

「ふざけるな。そんな事……」

「出来るわけないって？」

ロイドの言葉を遮って、ランシュは小馬鹿にしたように笑う。

「あなたがそんな事言っんですか。科学者が最初から出来るわけないって考えるなって言ったのは、あなたですよね」

ロイドは言葉を飲み込み、ランシュを睨む。

全身の細胞に遺伝子治療を行う事が出来る科学者や医者がある事

を、ロイドは把握していない。

ランシュは表情を緩め、イタズラっぽく笑った。

「詳しくは、ナイショです」

もしも可能だとしても、公開されていない技術で行ったとなれば、それを行った者は罪に問われるだろう。ランシュが恩人のそいつを売るわけがない。

ロイドは軽く息を吐き、質問を変えた。

「ここへは何しに来た？」

「え？」

ランシュは意外そうに目を見張る。

「十日ばかり通っていたそうじゃないか」

「お菓子を買いに来ていただけですよ。ベルおばあちゃんがユイのお菓子を気に入っていたから」

「カードに細工してまでか？」

「だって、オレのカードを使ったら居場所がばれて、局に連れ戻されるでしょう？ もう彼女に返しましたけどね」

「そのカードを調べれば、細工の跡はわかる。そこからおまえにたどり着くだろう」

ロイドがそう言つと、ランシュは不敵な笑みを浮かべた。

「わかりませんよ。そんなヘマはしない」

自信満々で断言するランシュに、ロイドは再び絶句する。少ししてロイドは口を開いた。

「……オレに復讐しに来たのか？」

「復讐？」

ランシュはキョトンと首を傾げた。

二年前、ロイドを睨んでいた、怒りに満ちた目を思い出す。

「オレに復讐してやると言っただろう」

二年前、ランシュが最後に行った開発が元で、彼は科学技術局の局員を免職された。

ロイドの制止を振り切り強行しようとした開発は、法に抵触する

ものだったのだ。それが副局長の目に留まり、ロイドは局長として、やむなくランシュを免職にするしかなかった。

結果的にランシュが心血注いでいた夢を、ロイドは途中で奪ってしまった事になるのだ。

ランシュは少し遠くを見るような目で考えた後、静かにつぶやいた。

「復讐か……。そうですね。そんな感情、この二年間ですっかり忘れていました」

ロイドを見つめてニコリ微笑んだ後、ランシュの表情は一変する。その瞳には、二年前と同じ憎悪がみなぎっていた。

「思い出させてくれて、ありがとうございます」

Run (2)

息を飲んで見つめるロイドに、ランシュは表情を緩めると、無邪気な笑顔を向けた。

「とりあえずは様子見という事で、しばらく厄介になります」

「はあ？」

思いも寄らないランシュの言葉に、ロイドは思い切り間の抜けた声を漏らす。

ランシュは気にも留めず、ニコニコ笑いながら言葉を続ける。

「おばあちゃんが亡くなったから、オレ、居場所がなくなっただけすよね。それを話したらユイが、しばらくここにいたらどうかって」

ロイドはすかさず拒否した。

「オレは承知していない！ おまえは局に戻れ！」

意味ありげな薄笑いを浮かべて、ランシュはロイドを見つめる。

「免職になったオレが局に戻ったって、監禁されるだけでしょう？ 無理矢理戻したって、また抜け出しますよ。オレを野放しにするより、手元に置いた方が、あなたにとっても都合がいいんじゃないですか？」

「オレがいない昼の間、復讐を企てるおまえとユイを二人きりにできるか」

そう言っただけでロイドが睨むと、ランシュはおもしろそうに声を上げて笑った。

「まだ企んでませんよ。それにしても、あなたにとってユイは相当大切な存在なんですね。いい事聞いちゃったかな」

「ユイを傷つけたら、ただじゃおかない」

ロイドがすごんで見せても、ランシュは益々クスクス笑う。

「そんな事はしません。オレもユイは気に入ってるんですよ。人妻だって聞いた時には、ちょっとショックだったくらいにはね。まさ

か、あなたの妻だとは思ってもみませんでしたけど」

ランシュの言う事を鵜呑みにはできない。だが、彼が生きている事を知ったからには、局長としてロイドは、科学技術局に知らせる義務がある。

そうしたら、おそらくランシュの言う通り、彼は局内に半ば監禁状態になるだろう。瀕死の状態でさえ抜け出したランシュは、今度は容易に局を抜け出すに違いない。

局に知らせて心証を悪くした分、ユイへの危害が及ぶ可能性は高くなる。ユイが危険に晒されるくらいなら、彼を手元に置いた方が得策かもしれない。しかし――。

ランシュを睨んだまま、ロイドがそんな事を考えていると、それを見透かしたようにランシュが釘を刺した。

「オレの事、局に知らせたら、ユイの身の安全は保証しませんよ」

ロイドは眉間にしわを寄せ、ランシュに念を押す。

「……ユイに危害を加えないと誓えるか？」

「ええ。それは誓えます。あなたに関しては、この限りではありませんが」

ひとまずホツと息をついて、ロイドは顔を背けた。

「オレの事はいい。おまえに恨まれている事はわかってるからな」
「それはどうも」

ランシュはこの二年間、復讐の事を忘れていたようだ。時が経てば、復讐など馬鹿げていると気付いて諦めるかもしれない。

折を見て科学技術局に報告しなければならぬが、しばらくはロイド自身も様子を見る事にした。

改めてランシュの姿を見つめ、ロイドは不思議に思う。二年前と全く変わらない姿をしているのに、どうして誰にも見つからなかったのだろう。変装でもしていたのだろうか。

それが気になったので尋ねると、ランシュは笑いながら答えた。

「病院と科学技術局には絶対に近付かないようにしてたし、あまり外出もしませんでしたしね。この辺りは局からは離れてるし、オレ

は運がいいんですよ」

「うちにいる間は変装しろ。おまえがここにいる事がバレたら、オレも困る」

「そうですね。髪の色を変える事にします」

とても復讐を企んでいるとは思えないような屈託のない笑顔に、ロイドはひと息ついて席を立った。

「ユイを呼んでくる。わかっているだろうが、余計な事は話すなよ」
「わかってますよ」

ランシュをリビングに残して、ロイドは店への扉を開いた。見るとユイは、外に出していた看板を片付けたり、店じまいを始めている。

ロイドが呼ぶと、ユイはこちらを向いて笑顔を見せた。

「話、終わったの？　ちよっと待ってね。店、閉めるから」

「もう閉めるのか？　まだ二時だぞ」

「だって売り切れちゃったから」

「は？　いつもこんなに早く売り切れるのか？」

これでは売れ残りが自分の口に入る事は永遠にないと、ロイドは愕然とする。

するとユイは苦笑しながら説明した。

「いつもってわけじゃないの。今日はたまたま予約分があったから」
基本的には予約は受け付けない事になっているらしい。ひとりで作れる量には限界があるので、誕生日や記念日など、どうしても必要と
いう場合に限り、一日につき先着一名様ワンホールまでで受け付けているという。

予約が入るとその分店に出す物が減るので、早めに売り切れてしまっらしい。

店を閉めたユイを伴って、ロイドはリビングに戻った。ランシュは二人の姿を見ると、席を立ててこちらにやってきた。

ロイドはユイにランシュを紹介する。

「こいつはランシュ＝バージュ。昔、オレの助手をしていた奴だ。」

しばらくうちにいる事になった。おまえの話はそれだったんだろう？」

ロイドが尋ねると、ユイは頷いて思い出したように目を見開いた。「ああ！ ランシュ「バー」ジュって、前に入院してるって言った人？」

そういえばユイを初めてラフルールに連れだした時、科学技術局の前でそんな話をしたような気がする。

「そうだ、そのランシュだ」

ロイドがそう言うと、ユイはランシュを見つめて柔らかく微笑んだ。

「じゃあ、元気になったのね」

「ええ、すっかり」

ランシュも答えて、ニツコリ笑う。

「そういうわけだから、オレが留守の間、何か機械の調子が悪くなったら、こいつに直してもらえ」

「本当？ 私、機械苦手だから助かるわ。よろしくね、ランシュ」

「はい」

ユイの差し出した手を、ランシュが握ろうとする。ロイドはさりげなく間に入ってそれを阻止しながら、言葉を続けた。

「理由は話せないが、ランシュは身を隠さなければならない。店を手伝ってもらうのはかまわないが、あまり表には出すな。これから少しばかり変装してもらうが、夕方以降の外出は禁止だ。いいな」

「うん」

「はい」

ユイとランシュは、同時に笑顔で返事をする。素直に返事はしたものの、この二人はどちらもロイドのいう事を聞かない。

本当に言う通りにするかどうかは怪しいが、とりあえず信用するしかない。

ロイドはひとつ嘆息して、ユイに頼んだ。

「オレは局に戻らなければならない。ランシュの髪を染めてやって

くれ。色白で目がブルーだから、濃いめの金髪が無難だろう。街で染料を買ってこい」

ロイドの言葉にユイは嬉しそうに笑った。

「あなたとお揃いね」

「う……」

言われてみれば、そうだ。

ロイドは絶句して、少し顔をしかめる。隣でランシュがクスクス笑った。

「……じゃあ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

ユイの肩を軽く叩いて出口に向かう時、ふとユイを見つめるランシュの視線が気になった。ユイの事を気に入っていると聞いた、ランシュの言葉が脳裏に浮かぶ。

ロイドはおもむろにユイを抱き寄せメガネを外すと、いつもの挨拶とは違う深い口づけをその唇に刻む。

驚いたユイが突き放そうとするのと同時に身体を離し、メガネをかけて背を向けた。

「何考えてんのよ!」

ユイの怒声とランシュの笑い声を背に、ロイドは玄関の扉を閉めて、家を後にした。

Run (3)

「さっきはビックリしたでしょう？ ごめんね。ロイドって、いつもは冷静で大人なんだけど、時々子供っぽいのよ」

リビングの一角にダイニングの椅子を一つ持ち出してランシュを座らせ、結衣は彼の髪を染めながら語りかけた。ランシュはクスリと笑う。

「ビックリっていうより、意外だった。先生って社交的で誰とでもすぐに打ち解ける人だけど、特定の人に執着する事ってあまりないから」

「執着？」

「だって、あれってユイは自分のものだって、オレに見せつけたかったんだと思うよ」

ランシュの言葉に結衣は苦笑する。やはりロイドは少し子供っぽい。

わざわざ見せつけなくても、結衣はロイドの妻だとランシュは知っている。その事実が物語っている事なのに。

「無用の心配よね」

同意を求めるように、結衣は笑いながらランシュの顔を覗き込む。彼は横目で見上げながら、口の端で少し笑った。

「それでもないよ。オレ、ユイが気に入ってるって言っちゃったし。先生としては心穏やかではいらなかったんじゃないかな」

結衣は思わず吹き出した。

「ホント、ヤキモチ焼きね」

ロイドの友人である王子や王宮医師のローザンから色々聞かされて、ロイドがヤキモチ焼きだとは知っていた。結婚してからは、それも落ち着いたと思っていたのに、相変わらずのようだ。

染髪が終わり、ランシュは洗面所に髪を洗いに行った。

結衣はダイニングテーブルの隅に置いていた、黄色い小鳥ロボットの電源を入れる。

いつも店に出ている間は、電源を切っておく。ロボットとはいえ、食べ物を扱っている店に動物がいては、不快に思う人がいるかもしれないからだ。

リビングのソファに座って小鳥の頭を撫でていると、ランシュが戻って来た。結衣の手の平にいる小鳥を見つめて問いかける。

「それ、ロボット？」

「うん。二年前にロイドがくれたの。よくわかったわね」

「なんとなくね。鳥かごが見当たらないし、先生ってそういう小さい機械、得意だし。隣、座っていい？」

結衣が了承し横によけると、ランシュは隣に腰掛けた。

「そうね。調理機械とか携帯用パワードスーツとか、役に立つものも作ってるけど、微妙なものも多いのよね。ナノマシンの変声機とか。ランシュも機械の研究してたんでしょ？　どういうもの作ってたの？」

何気なく尋ねた後で、ハタと気付いた。もしかしたら、研究内容は訊いてはいけない事だったかもしれない。しかしランシュは、あつさり教えてくれた。

「オレはロボット専門。そういう愛玩用から、専門作業用まで色々ヒューマノイド・ロボットも設計したよ」

「ああ、人間そっくりなロボット？」

「うん」

以前ロイドと一緒に街に出た時、本屋で買った雑誌に載っていたロボットだ。写真でしか見た事ないが、とてもロボットとは思えないほど人間にそっくりだった。

「ロイドがヒューマノイド・ロボットはおもしろくないから作らないって言ってたけど、ランシュの方が上手に作れるからおもしろくないのかしら？」

結衣が首を傾げると、ランシユはクスリと笑った。

「そんな事はないと思うよ。先生も作ろうと思えば作れるよ」

「じゃあ、何がおもしろくないのか分かる？」

ランシユは視線を逸らし少し考えて、再び結衣に視線を戻した。

「多分、思い描く通りのものが作れないからだと思う。理論も確立してて作り方も分かっているのに作れないんだ」

「どうして？」

「法律が邪魔するから。オレもそれに邪魔されて、先生に止められた」

結衣の胸の中が、途端にざわついた。

悔しそうに目を伏せたランシユの表情が、これ以上訊いてはいけないと警告しているような気がする。心に反して、言葉がポロリと口について出た。

「どんな法律？」

「絶対命令」

小鳥ロボットも搭載している、人を傷つけてはいけないとか人の命令を聞かなければならないとかいう、最優先の命令だ。

人工知能搭載のロボットは、必ずインプットする事が法律で義務づけられているとロイドから聞いた。ヒューマノイド・ロボットも、当然ながら義務づけられるだろう。

だが、どうしてそれが邪魔になるのかわからない。

首をひねる結衣に、ランシユが静かに問いかけた。

「人間には、そういうもの、ないよね？」

ロイドの思い描くヒューマノイド・ロボットが、なんとなく分かった。見た目だけでなく、人間とそっくり同じロボットだ。

人の命令に従って行動するだけでなく、自分で考え、動き、感情を持ったロボット。

雑誌に載っていたロボットには、感情がないと言っていた。

確かに人とそっくり同じにしようと思えば、絶対命令は足かせになるだろう。

人を傷つけたり法に反する事でなければ、無条件で命令に従う。
そんな人はいない。

自分で考え行動すると、時には人の命令に背く事になるだろう。
同じ事をランシュも考えて作ろうとしたが、ロイドに止められた
のだ。

どうやらやはり訊いてはならない事を、訊いてしまったような気が
する。少し後ろめたい気分になっていると、ランシュがニツコリ
笑って唇に一本指をあてがった。

「ちよっとしゃべり過ぎちゃった。今の話、聞かなかった事にして
ね」

「うん。ごめんね。私が余計な事訊いたから」

結衣は苦笑しながら小鳥の電源を切り、テーブルに置いて席を立
った。

ダイニングの椅子にひっかけておいた買い物袋を取り、結衣はラ
ンシュに尋ねる。

「夕飯の買い物に行ってくるから、留守番頼んでいい？」

ランシュは席を立て、こちらにやってきた。

「オレも一緒に行くよ。荷物持つか」

「え？ でもロイドが夕方からは外出禁止だって……」

壁の時計に目をやると、四時になろうとしていた。夕方と言えば
夕方だが、いったい何時までなら外出していいのかよくわからない。

「お役所の定時、五時まではいいと思うよ。変装もしたし、オレ、
誰にも見つからない自信あるから」

そういつてランシュは、染めたばかりの金髪をつまんで笑って見
せた。

「じゃあ、さっさと行って帰ろうか。留守番も退屈だろうし。ラン
シュ、何が食べたい？ あなたの歓迎会になるから、好きなもの言
って」

ちよっと見栄を張って大きく出たが、自分の料理の腕前は、まだ
まだロイドに遠く及ばない。できるものを言ってくれる事を祈りつ

つ、ランシュの答を待つ。

ランシュは微笑んで答えた。

「何でもいいよ。オレ、好き嫌いないし。お菓子以外のユイの料理、なんでも食べてみたいな」

「何でもって言われると……」

ランシュの答にホツとしつつも、範囲が広すぎてかえって困る。

結衣が口ごもっていると、ランシュが提案した。

「そうだ。先生は何が好きなの？」

「オムライス」

「オムライス？」

「うん。私の国の料理なの」

初めて作った時、ロイドも珍しそうな顔をした。クランベールにはないものだという。

結衣のオムライスは、ケチャップ味のチキンライスを薄く焼いた卵焼きで包み、ラグビーボールのような形に整えてケチャップをかけたものだ。

お店のオムライスのように、フライパンの中で卵にライスを包むという高等技術ができない、結衣の苦肉の策である。

本物とはちよつと違うけど、ロイドは結構気に入っているようで、時々リクエストする。

「じゃあ、それ。オレも食べてみたい」

メニューが決まり頭の中で買い物リストを作ると、結衣はランシュと共に商店街に向かった。

さつさと買い物を終え、ランシュに荷物を持ってもらい家路につく。並んで歩きながら、ランシュが結衣に問いかけた。

「ねえ、オレたちどんな風に見えるかな」

「うーん。親子にしては年が近いし、髪も目の色も全く違うし、姉弟にも見えないわね。不思議な取り合わせに見えるかもね」

結衣が答えると、ランシュは少し間を置いて、再びポツリと問いかけた。

「恋人同士……には見えないかな」

「そう見えてたら、またロイドがヤキモチ焼くわね」
想像するとおかしくて、結衣はクスクス笑った。

Run (4)

すでに日は落ちて随分経っていた。オレンジ色のやわらかな街灯の光に包まれたラフルールの街を、ロイドは足早に家路を辿る。

ユイに危害を加えないと誓ったが、復讐を企んでいるランシュと二人きりで家にいる、ユイの事が気がかりだった。

科学技術局を出る前に、今から帰ると連絡したら、ユイは少し驚いたような声を上げた。定時よりは十分遅いが、いつもよりは十分早いからだ。

少し驚いたものの、すぐにユイは嬉しそうに告げた。ランシュの歓迎会をするから丁度よかったと。

ロイドとしてはあまり歓迎したくはないが、ユイの楽しそうな声に少しホッとした。

家に着き玄関の扉を開けると、仲良く楽しそうに夕食の支度をするランシュとユイの姿が目に入った。

ランシュが店に通っていた頃から面識はあったとしても、かなり打ち解けた様子だ。

ユイの無事な姿に安心したものの、なんとなくおもしろくない。不機嫌さそのままに低い声で「ただいま」を言うと、ユイはいつもよりハイテンションで「おかえり」を返した。続いてランシュも笑顔で挨拶をする。

金髪に染めて以前より幾分明るく見えるその無邪気な笑顔が、返って禍々しく思えてならない。

ロイドは一旦二階に上がり、自室に荷物を置いてダイニングに戻ってきた。テーブルの上にはロイドお気に入りのニッポン料理、オムライスが乗っていた。

ロイドが席に着くと、ユイは白ぶどう酒の入ったグラスをそれぞれに配る。そして自分のグラスを持ち上げ、ニッコリ笑った。

「じゃあ、ランシュを歓迎して、乾杯！」

ユイの音頭で全員がグラスを掲げ、ぶどう酒を一口飲む。乾杯の後料理に手をつけ始めると、ユイとランシュは他愛もない話をしながら、楽しそうに笑った。

ロイドは無表情のまま、時々振られる話に短い相槌を打ちながら、黙々と食事を続ける。

やがて食事が終わり、食卓を片付けたユイは、デザートの皿を持つてやって来た。

「今日は苺のロールケーキよ。ランシュのおばあちゃんが気に入ってたんだって。あなたも好きよね？」

そう言つてユイは、丸ごと一本のロールケーキをロイドの前に置く。もう一本のロールケーキをランシュと自分に切り分け、残りもロイドの前に差し出した。

そして茶を配りながら、不思議そうにランシュに問いかける。

「驚かないのね。知ってた？」

「ああ、先生が甘党だって事？ 大量に甘いもの食べてるとこ何度か見たよ」

ランシュがクスリと笑うと、ユイはガツカリしたように肩を落として、ロールケーキにフォークを突き立てた。

「なあんだ。でも、そうよね。助手なら知ってるわよね」

その後も二人は楽しそうに話し続けた。

家に帰ってからずっと、二人が親しげにしているほど、ロイドは疎外感を覚えた。

二人の会話が耳障りでしょうがない。

せっかくの好物も、ろくに味が分からないほど苛ついたロイドは、ロールケーキを食べ終わつたと同時に席を立つた。

「悪いが、オレは持ち帰りの仕事がある。後は二人で楽しんでくれ」
ユイは少し驚いたように目を見張った後、残念そうにロイドを見つめて返事をする。

「あ、うん……」

ランシュは口の端を少し上げ、上目遣いにロイドを見上げた。

「オレ、何かお手伝いしましょうか？」

仕事を自宅に持ち帰ってはならない事をランシュは知っている。この場を立ち去るための口実である事を分かっているが、神経を逆なでするランシュの言葉に、ロイドは苛立ちを通り越して怒りすら覚えた。

その気持ちのままランシュを睨むと、つい声を荒げた。

「おまえはもうオレの助手じゃないんだ。かまうな」

不安そうなユイの眼差しに少し胸が痛んだが、ロイドは黙って背を向け二階へ上がった。

自室に入り乱暴に扉を閉じると、机に向かいコンピュータを立ち上げる。

いくつもの設計図を、意味もなく開いたり閉じたり繰り返した。苛々は収まるどころか、益々募る。そんな自分に一番苛ついた。

「くそっ！」

ロイドは両手の拳で机をひとつ叩き、メガネを外して机に突っ伏した。

ランシュが何を企んでいるのか全く読めない。

ユイと仲良くしているのを見て、ロイドが苛ついているのを楽しんでいる節は見受けられるが、復讐と言うにはあまりに稚拙だ。だが、それに翻弄されている自分は、もっとお粗末すぎる。

漠然とした不安が、胸中を支配する。

ランシュに気を許すなど、ユイに忠告したい。けれどそうすると、ランシュが復讐を企んでいる事や、なぜ復讐しようとしているのかを話さなければならない。

あれだけ仲良くしているランシュを、理由もなく警戒しろと言ったところで、ユイがおとなしくいう事を聞くとは思えない。守秘義務をこれほど恨めしく思った事はなかった。

ロイドは机に突っ伏したまま、片手で頭を抱えた。しばらくそうして、堂々巡りを繰り返していると、扉がノックされユイが声をか

けた。

ロイドは身体を起こし、返事をしながらメガネをかける。扉が開き、トレーに乗せた茶を持って、ユイが入ってきた。トレーを机の上に置いて、ユイは少し笑みを浮かべ申し訳なさそうに言う。

「ごめんね」

意外な言葉に、ロイドは少し目を見開いた。

「なぜ、謝る？」

「だって、あなた忙しいのにランシュが心配だから、無理して早く帰ってきたんでしょう？　なのに私、はしゃいじゃって……」

心配していたのは、ランシュよりユイの方だ。自分の態度がユイに無用な気を遣わせてしまったようだ。ロイドはひとつ息をついて頂垂れた。

「いや、おまえに非はない。少し苛ついてて、オレの方こそ大人げなかった」

ふとランシュが気になって、ロイドは顔を上げて問いかけた。

「あいつは？」

「もう休んだわ。ここの向かいの部屋を使ってもらった事にしたの。よかった？」

「ああ。かまわない」

「じゃあ、私、明日も早いから、先に寝るわね。おやすみ。仕事、頑張ってるね」

「おやすみ」

ユイは微笑んで、そのまま部屋を出て行った。

ユイが出て行った後すぐに、ロイドは茶を飲み干し、コンピュータを落として部屋を出た。

元々仕事をしていたわけではない。そのまま風呂に入り、寝室に向かった。

部屋に入ると灯りは消えていて、ユイはベッドに入っていた。起こさないように、そっと隣に潜り込むと、ユイがこちらを向い

た。目が開いている。

「悪い。起こしたか？」

「うん。早かったのね。もう終わったの？」

「ああ」

曖昧に答えて、ロイドはユイを抱き寄せた。視線がぶつかり、ユイは嬉しそうに目を細める。

「ユイ、愛してる」

静かに囁いて、ロイドは口づけた。少しして唇を離すと、ユイがクスリと笑った。

「なんか久しぶりに聞いた気がする。あなたの”愛してる”」
言われて初めて気が付いた。

結婚して、いつもユイがいる幸せに慣らされ、いつの間にか言わなくなっていた。言わなくてもロイドの気持ちに変わりはないし、ユイもそれは分かっている。

唇と身体を重ねる事で、言葉の代わりにしていたようだ。
けれどロイドは知っている。

愛してると言った時、ほんの一瞬見せる、ユイのはにかんだような嬉しそうな表情を。

それを見るのが好きで言っていた事すら、幸せに有頂天になって忘れていた。

ロイドはユイの胸に顔を埋め、強く抱きしめた。

「ユイ、愛してる」

もう一度言っと、ユイは両腕でロイドの頭を抱え、髪を優しく撫で始めた。

「うん。知ってる。私も愛してるから」

「愛してる」

益々しがみつくとロイドをあやすように、ユイは髪を撫で続ける。

「大丈夫よ。あなたなら、きっと乗り越えられるから」

言葉にできない、ロイドの漠然とした不安を、ユイは察しているのだろう。

「愛してる」

壊れた機械のように何度も繰り返すロイドに、ユイは優しく相槌を打ちながら髪を撫で続けた。

Run (5)

翌朝、ロイドはいつもと変わりなく、朝食を済ませると、挨拶のキスをして仕事に出かけた。

朝食の後片付けと一階の掃除はランシュがしてくれるというので、結衣は開店までにケーキを作る事にした。

いつもはこの時間に、後片付けと掃除洗濯をするので、そんな余裕はないのだが、ランシュが手伝ってくれると余裕ができる。

結衣は二階に上がり、洗濯機をセットして掃除を始めた。掃除をしながら、ゆうべのロイドを思い浮かべる。

ロイドは結衣にしがみついて、しばらくの間「愛してる」を繰り返して、やがてそのまま眠りについた。

あんな風にロイドが結衣に縋るのは、結婚してからは初めてだ。

思い返せば、王子が異世界に飛ばされたかもしれないと分かった時や、王子が見つかった結衣が日本に帰る前日など、いずれも心に大きな不安を抱えている時、ロイドは結衣に縋った。

今回も何か不安を抱えているのだろう。けれど、結衣には話さない。

ランシュが来るまで、ロイドは何も変わりなかった。結衣に話せないという事は、ランシュに関係する、科学技術局がらみの事かもしれない。

不安や悩みは、誰かに話せば、たとえ解決しなくても、少しは気が楽になる。

自分がその誰かになれない事が、もどかしかった。

ロイドは局長なので、部下に愚痴を聞かせるわけにはいかないだろう。きっと科学技術局内にも、そういう事を話せる相手がいはいないはずだ。

ひとりで抱え込まなければならぬロイドを思うと、胸が痛んだ。掃除が終わると、少しして洗濯機が終了のアラームを鳴らした。

結衣は洗濯物を持ってバルコニーへ出た。

洗濯機には乾燥機能も付いている。日本のものよりも、衣類を傷めず短時間で乾くのだが、やはり天気の良い日は天日干ししたい。

それに、ロイドに抱きしめられた時、シャツにこもったお日様の匂いに包まれると、なんだか温かくて、ほんわりと幸せな気分になる。それが結衣の密かな楽しみのひとつだった。

洗濯物を干し終えて階段を下りようとした時、丁度やってきたランシュが階下から呼んだ。

「ユイ、誰か来たよ」

「あ、多分、配達の人だ」

ケーキの材料となる小麦粉や卵、牛乳、フルーツなど、重いものはまとめて配達してもらおう事にしてある。

結衣は慌てて、階段を駆け下りた。

丁度三分の二ほど下りた時、あまりに慌てていたせいか、足を踏み外してしまった。

「きゃっ！」

「あぶない！」

結衣の身体が宙に浮き、尻餅をつきそうになった瞬間、ランシュの腕の中に抱き止められていた。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう」

結衣が礼を述べると、ランシュは耳元でため息を吐き出すように、安堵の声を漏らした。

「よかった」

（あれ……？）

ふと違和感を覚えた。だが、なんだか分からない。

ランシュに抱き起こされ、残りの数段を下りる。ランシュは安心したようににっこり笑った。

「ユイにケガさせたら、先生に恨まれるからね」

違和感がなんなのかは、やはり分からない。

結衣は曖昧に笑みを返して、店先で待っている配達員のところへ向かった。

配達された荷物をランシュにキッチンへ運んでもらい、結衣は早速追加分のケーキを作り始めた。

ランシュは入口に立って、その様子を興味深そうに眺めている。追加分は比較的短時間で作れる、シフォンケーキにした。ロイドなら軽く三個は一度に食べてしまう。

卵白を泡立ててメレンゲを作りながら、結衣はランシュに問いかけた。

「ランシュも甘いものは好きなの？」

「先生ほど極端じゃないけど、割と好きだよ」

医学博士の称号を持つ王宮医師のローザンも、結構甘いもの好きだ。

「学者さんって甘いもの好きが多いのかな？」

「どうして？」

「ロイドが」オレの超優秀な頭脳は人並み以上に糖分を必要とするんだ”って言ってたの」

結衣がそう言うのと、ランシュはおもしろそうにクスクス笑った。

「確かに。うんと頭を使ったら、甘いもの欲しくなるけどね。でも副局長は苦手だって言ってたよ。女性にしては珍しいよね」

「え？ 副局長って女の人だったの？」

結衣が思わず手を止めて尋ねると、ランシュは意外そうに目を見開いた。

「知らなかった？」

「うん。ロイドがよく怒られたとか、苦手だとか言ってるから、て

つきり年配の男の人かと思ってた。だってロイド、女好きだって言ってたし」

「ふーん」

ランシュは少し目を細め、探るように結衣を見つめた。

「気になる？」

「え……別に……」

言い淀む結衣に、ランシュは少し意地悪な笑みを浮かべて言う。

「副局長って、スタイル抜群の美女だよ。見た目だけなら、モロ先生の好み」

「……え……」

反応を伺うように、ランシュは結衣を真っ直ぐ見つめる。気にならないと言えば嘘になるが、どう反応していいか分からず、結衣はメレンゲをガシガシ泡立てながら、唐突に話題を変えた。

「あ、そうだ、ランシュ。お願いがあるの」

「お願い？」

「うん。ロイドの相談に乗ってあげて欲しいの。何か悩んでるみたいんだけど、私には話せないみたいで……。仕事の事かもしれないから、ランシュなら助手だし、局の事も話せるんじゃないかと思うて」

上手く話を逸らせたと思ったのに、ランシュは笑いながら答えた。

「仕事の事なら、下っ端のオレより、副局長に話すんじゃないかな。苦手だって言ってるけど、先生って局内じゃ副局長を一番信頼してるし」

「そう……」

結衣は力なく俯いた。自然に泡立て器を握る手が止まる。

ロイドの浮気を、心配しているわけじゃない。ロイドに愛されている事は、充分に分かっている。

けれどロイドのそばには、彼の仕事を理解し、悩みを分かち合える才色兼備のひとがいる。ロイドの妻には、そういう人の方が、自分よりふさわしいのではないだろうかと思う。

本来なら妻である自分が、共に悩みを分かち合い、支えになるべきなのに、それができない。

王子失踪事件の時も、機械の事も克蘭ベールの文字も分からず、ロイドの手助けになるような事が、結衣には何も出来なかった。

今では克蘭ベールの習慣も文字も覚えただけで、相変わらず何の力にもなれない自分が情けなくなつた。

少し泣きそうな気分になっていると、ランシュがそつと頬に手を触れた。

「ユイ、そんな顔しないで。ごめんね。ちょっと意地悪し過ぎちゃったね。大丈夫。先生は確かに女好きだけど、オレの知ってる限りじゃ、局内の女性に手をつけた事は一度もないよ」

それはそれで、結構意外だ。初対面の結衣に、出会ったその日のうちに強引にキスしたエロ学者なのに。

結衣は顔を上げて、ランシュを見つめた。

「そうなの？」

「うん。オレ、子供の頃から先生と付き合いがあるから間違いないよ。黙ってりゃモテルんだけど、エロい事言うから、女性に敬遠されるみたい」

結衣は思わずクスリと笑う。

「どっちにしろ、オレも今は部外者だし、あまり力にはなれないよ。先生の好きなお菓子を作つてユイが励ましてあげたら？ ユイのお菓子は見るだけでも幸せな気分になるって、おばあちゃんも言うてたし」

ランシュは頬に当てた手を下ろし、結衣の肩をポンと叩いて微笑んだ。

結衣も微笑み返す。

「うん。そうする」

結局自分には、それしかないようだ。

再びメレンゲを泡立て始めた結衣を見つめて、ランシュがポツリと言う。

「ユイは、優しいね」

「そう？」

「ユイのそういうところ、オレも好きだな」

「ありがとう」

気落ちした結衣を、自分が落ち込ませたと思って、ランシュはなんとか慰めようとしているのだろう。

結衣がロイドのために何もできないのは、ランシュのせいではないし、それを再認識して落ち込んでいるのも、結衣の勝手だ。

ランシュの気遣いに礼を述べて、結衣は笑顔を向ける。

するとランシュは、結衣の耳元で一言囁いた。

「今の言葉、先生には内緒ね」

（あ……まただ……）

再び襲われた違和感の正体を、結衣は悟る。

耳元で囁かれた時、ロイドとランシュでは感覚が違うのだ。ロイドの時は背筋がゾクゾクするのに、ランシュの時はそれがない。

相手に対する自分の気持ちが違うから？ そうじゃない。ローゼンの時もゾクゾクした。

違いが何なのか考えて、ふと思い至った。

ランシュを見つめたまま、またしても動きの止まった結衣を、ランシュは不思議そうに見つめ返す。

「どうかした？」

「うつん。なんでもない」

自分で出した結論に、自分で首を振る。そんな事はある得ない。

馬鹿げた結論を頭の隅に追いやって、結衣は一心不乱にメレンゲをかき混ぜた。

Run (6)

夜になり、夕食と風呂を済ませると、ランシュは二階に引き上げた。

すでに十時半を過ぎていたが、ロイドはまだ帰ってこない。昨日早めに帰ったしわ寄せが来たのかもしれない。

明日は店の定休日なので、結衣も早く寝る必要はない。とはいえ、毎朝早起きをしているので、そんなに遅くまでは起きていられない。可能な限りロイドの帰りを待っていようと思い、後片付けと風呂を済ませた後、本を取りに二階へ上がった。

階段を上がつて廊下に出ると、バルコニーへ通じる扉が開いているのに気付いた。

洗濯物を取り込んだ時、閉め忘れたのかと思い近付くと、ランシュの姿が見えた。

バルコニーの真ん中で、ひざをかかえて座り込み、ぼんやりと夜空を眺めている。

結衣が声をかけると、ランシュは少し振り返って見ただけで、再び夜空に視線を戻した。

結衣は隣に行つて座る。ランシュは気にも留めず、空を眺め続けていた。

「今日は星がきれいね」

「うん」

「何してるの？ 考え事？」

「……おばあちゃん、お孫さんに会えたのかなあって考えてた」

「お孫さんがいたの？」

「うん。随分前に事故で亡くなったんだって。オレと同年くらいだったらしい」

「そう……」

ランシュを保護していたベル・グラヴは、ランシュに亡くなった孫の姿を重ねていたのかもしれない。

「最後に、やっと孫に会えるって言ってたから、会えたならいいなあって……」

空を見つめたまま、ランシュは少し寂しげに微笑む。

死後の魂の交流など、誰も確認した者はいない。最先端科学の間近にいたランシュが、そんな夢物語のような事を口にするのが意外だった。

「ランシュって、あんまり学者さんっぽくないわね」

つい口に出して言うと、ランシュはやっとこちらを向いた。

「そう？」

「うん。学者さんって死後の世界なんか、夢のような事ってバカにしそうじゃない？」

結衣の言葉に、ランシュはおもしろそうにクスクス笑う。

「一般の方が、よっぽど現実主義だと思うよ。だって科学者は夢のような事ばかり考えてるもの」

キョトンと首を傾げる結衣に、ランシュは言葉を続ける。

「遠くの街に住む人とリアルタイムで話をしたり、空を飛んだりって、ずっと昔には夢のような事だったよね？ 今の世界に当たり前のように存在するいろんな物は、昔の科学者が見ていた夢の結晶なんだよ」

言われてみれば、その通りかもしれない。一般の人は「夢のような事」と切り捨ててしまふけれど、そこで終わらせないのが科学者なのだろう。

何につけても「おもしろい」が基準になっているロイドのマシンは、まさに夢の結晶そのもののような気がする。

そう思うと、自然に顔がほころんだ。

「確かに、ロイドのマシンってそんな感じ。ランシュはおもしろい物って作った事ある？」

「考えてる間って、自分では全部おもしろいんだけどね。そうだなあ……」

そう言って宙を見つめ考え込んだランシュは、これまで見た事がないほどワクワクしている子供のようだ。

「脳のないロボットって、おもしろいと思わない？」

不意に目を輝かせて、ランシュが話を振ってきた。おもしろいかどうかより、結衣にはそれがどういう物なのかピンと来ない。

「脳って、人工知能の事？」

「そこまで精巧じゃなくても、プログラムを記憶したり制御したりするプロセッサを内蔵していないロボットだよ」

「え？ それで、どうやって動くの？」

待つてましたとばかりに、ランシュはニツコリ笑って、得意げに説明を始める。こんなところは我が子自慢をする時のロイドにそっくりだ。師弟は似てしまうものらしい。

「人間で言くと、脊髓反射みたいなものだよ」

「熱いポットをうつかり触って、アチツってやつ？」

「そう。あれって脳の指令を介さず身体が動いてるよね。つまりセンサと伝達回路だけで動かす事は可能なんだ。プログラムを介さないから判断も動きも速いしね。けど、プログラムを介さないから、必ずしもこちらの都合よく動いてはくれないんだけど。そこがまた、おもしろいんだよね。昔は色々作ったなあ」

昔といっても、ほんの数年前だろう。彼の人生はこれからの方が長いのだから。

それでも懐かしそうに遠い目をするランシュの横顔には、人生の終わりを迎えた人が楽しかった過去を振り返っているような趣があった。

「最近は何やってないの？」

結衣が問いかけると、ランシュは視線を逸らし、再びひざをかかえて身体を縮めた。

「うん。科学技術局を辞めて二年以上、何も。おばあちゃんと一緒

にいた頃は、色々家事を手伝ったりしてたから、あまりヒマもなかったのはあるけど。局にいた頃は、明日命が尽きても後悔しないように、思い付いた事は今の内にやっておかなくちゃって必死になつてた。やりたい事いっぱいあったはずなのに、一番やりたい事を途中で奪われて絶望してたはずなのに、おばあちゃんといると、そんな事すっかり忘れてたよ。おばあちゃんが亡くなって初めて分かった。オレが本当に一番やりたかった事」

ランシュは生まれた時からひとりだったと本人が言っていた。どいう事情でそうなのかは知らない。けれどベル・グラヴとの生活は、彼が初めて感じた家族の温もりだったのだろう。

結衣は何も言えず、ひざの上に置いた自分の手に視線を落とす。するとランシュが、

「ごめん、少しだけ……」

そう言つて、結衣に抱きついてきた。

「時々、怖くてたまらない。目が覚めたら全部夢で、オレはベッドの上で死にかけているんじゃないかって。身体を全部入れ替えて生き長らえたけど、今のオレの気持ち、オレの心は、本当にオレのものなのか分からなくなる。オレの心はどこにあるのか教えてよ、ユイ」

縋るように抱きしめて肩の上で不安を吐露するランシュを、結衣は突き放す事ができなかった。

二年前に入院中のランシュは動ける状態ではなかったと、ロイドの会話から漏れ聞いた。どんな重病だったのかは知らないが、きつと眠るたびに怖かったに違いない。

何らかの方法で元気な身体を手に入れ、今、ランシュは生きている。

そしてその方法は、今朝結衣が、バカバカしいと首を振った結論に、どうやら間違いなさそうだ。

こうして身体を密着させて抱きしめられているのに、ロイドの時には感じるものをランシュの時には感じない。

多分それは違法だから、ランシュは身を隠さなくてはならなくて、それでロイドは結衣に何も言えないのだろう。

結衣は少し微笑んで、ランシュの胸に手を当てる。

「ランシュの心は、ここにあるでしょ？ 夢を見るのは科学者の本能かもしれないけど、私を夢の住人にしないでよ」

「うん。そうだね。ありがとう、ユイ」

そう言ってランシュは、安心したようにクスリと笑った。

すっかり夜も更けた頃、ロイドは自宅へ戻った。玄関に入ると灯りは点いているものの、ユイの姿はなかった。

食事はいらないと連絡したが、ダイニングテーブルの上には、山盛りのシュークリームがフードをかぶせて置いてあった。

灯りを点けたまま寝たわけではないと思うので、二階で何かしているのだろう。ロイドは荷物を置きに二階へ上がった。

階段を上がり廊下に出ると、バルコニーへ続く扉が開いているのに気付いた。

ユイは外で何をしているのかと、不思議に思いながら扉へ向かう。数歩歩いた時人影が見え、ギクリとして足を止めた。

バルコニーの真ん中で、座ったユイをランシュが抱きしめている。ユイの肩越しに目が合うと、ランシュはニヤリと笑った。

カッとなったロイドは、急いで歩み寄ろうとする。それを制するようにランシュは冷たい笑みを浮かべたまま背中を回した手で、どこから取り出したのか、鈍く光る刃をユイのうなじにあてがって見せた。

ロイドは息を飲んで、その場に立ち止まる。

すると気配を感じたのか、ユイが振り返った。

「ロイド？ 帰ったの？」

それと共にランシュは、何食わぬ顔でユイから離れる。ユイは立

ち上がって、こちらにやって来た。

「おかえり。お疲れさま」

「ああ。だだいま」

ユイの笑顔にホツとしながら、ランシュを睨む。ランシュは余裕の笑みを浮かべ、

「おかえりなさい、先生。オレ、先に休みますね」

と言って、横をすり抜けて行った。

ランシュが部屋に入るのを見届けて、ロイドは自室に荷物を置き、風呂へ向かった。

風呂を出て一階を覗くと、灯りが消えている。ユイも寝室に引き上げたのだろう。

寝室に入ると、ユイが満面の笑顔で目の前に大きな皿を突き出した。皿の上には先ほど一階で見た、山盛りシュークリームが乗っている。

「寝る前に、こんなには食えないぞ」

「だったらひとつだけでも食べて。きつと元気になるから」

ゆうべロイドが不安を抱えていた事を、ユイは気遣っているのだろう。だが、先ほどのランシュの事に、心が動揺していて、そんな気分ではなかった。

「悪いが、今はいい。明日にする」

「そう……」

ユイはガツカリしたように肩を落とした。とぼとぼと隅のテーブルに向かい、皿を置いて俯く。あまりに気落ちした様子に罪悪感を覚えて、ロイドはユイに歩み寄った。

「ユイ」

肩に手をかけようとした時、ユイが俯いたままつぶやいた。

「じゃあ、抱いて」

「何？」

驚いて思わず、手も足もその場で止まる。ユイの方から求めてきたのは、初めてだったからだ。

ユイはハツとしたように顔を上げて、こちらを向いた。目が合うと、一気に頬を赤らめて、途端に焦りだす。

「あ、あの、私、今……」

「確かに聞いたぞ」

直前の思い詰めた様子は気がかりだが、今はただ、ユイの要求が嬉しくて、ロイドはユイをきつく抱きしめた。

「違うの、私……」

「今さら訂正は聞かない。おまえにはお仕置きが必要だしな」

「何のお仕置き？」

抵抗していたユイが、ピタリと暴れるのを止めて不思議そうに見つめる。相変わらず無自覚の鈍さに、本気でお仕置きしてやりたくなかった。

ロイドはムツとして、額を叩く。

「オレ以外の男に抱きしめられたりするな」

「見てたの？」

「ああ。心臓が止まるかと思った」

あの刃物を見た時には、本気でそう思った。なのにユイは呑気に笑う。

「大げさね。ランシュは私の事、お母さんのように思ってるだけよ」

「そうだとしても、あいつは男だ」

「それって、ヤキモチ？」

「う……」

からかうように見上げるユイを見て、名案を思い付いた。

緊張感に欠けるし、格好悪いが、ヤキモチなら堂々とユイに忠告ができる。堂々と二人の邪魔ができる。

ロイドは開き直って、ユイに忠告した。

「ああ、ヤキモチだ。あいつに気を許しすぎるな」

「はいはい」

案の定、ユイは緊張感のない返事をする。それでも全く無防備でいるよりはマシだろう。

気を取り直して、ロイドはユイを抱き上げた。

「よし、早速お仕置きだ。おまえ、明日は休みだったな」

「あなたは仕事でしょう？」

自分から求めておきながら、尚も悪あがきをするユイに、ロイドはニヤリと笑う。

「そんな事は問題にならない。おまえが要求したんだ。気絶するまで可愛がってやるから覚悟しろよ」

「……え……」

そのままユイをベッドに横たえ、ロイドは覆い被さるようにして口づけた。

ひとまずユイに忠告を与える事はできたが、不安が全て拭い去れたわけではない。

そんな自分のせいで、ユイも何か思い詰めているらしい事はわかる。

だが今は、ユイの求めるままに、ユイに溺れて、それを忘れていたかった。

Run (7)

珍しくユイが朝寝坊をしている。少し前に目を覚ましたロイドは、傍らに横たわるその穏やかな寝顔に目を細めた。

結婚してから、ロイドが目を覚ました時、隣にユイがいた事は数えるほどしかない。今頃の時間はいつも、階下で朝食の支度をしているのだ。

ロイドはユイの髪をそつと撫でた。

(ゆうべは、ちょっと無理をさせすぎたな)

いつもならユイは、とつくに眠っているはずの時間だった。

元々ユイの言葉が引き金になったとはいえ、際限なしに求めてしまったのだ。気絶したわけではないが、気が付くとユイは力尽きたように、ロイドの腕の中で眠っていた。

そしてロイドも、そのままユイを抱いて眠りについた。

しばらく髪を撫でていると、ユイが目を開いてこちらを向いた。

「おはよう」

ロイドが挨拶をすると、ユイは返事を返した後、慌てて身体を起こした。

「今、何時?! あ……っ!」

そして、わめいた直後、慌ててまた布団に潜り込む。

ユイは真っ赤になった顔だけ出して、気恥ずかしそうにロイドを見つめた。

「どうして裸なの? もしかして私……」

「気絶したわけじゃない。いつの間にか眠ってたんだ」

ユイはキョトンと首を傾げる。

「それって違うの?」

「全然、違うだろう」

未だ不思議そうに見つめるユイに、ロイドはニヤリと笑って顔を

近付けた。

「またの機会に、分かせてやる」

「……え……エロ学者」

ロイドはすかさず額を叩く。

「ゆづべのおまえの方が、よっぽどエロかった」

途端にユイは、真っ赤になってうるたえた。

「だって、それはあなたが……」

そして少しの間絶句した後、ロイドを軽く睨んでつぶやいた。

「……バカ」

ユイはふくれっ面のまま、ロイドを指差す。

「服を着るから、向こうを向いてて」

「今さら照れる事ないだろう。どうせオレも全裸だ」

そう言っ布団をめくってみせると、ユイは慌てて布団を元に戻した。

「わざわざ見せなくていいわよ！ あなたもさっさと何か着て！」

「ったく」

仕方なくユイに背中を向け、ロイドは寝転んだまま下着を着けた。

しばらくそのまま、背後にあるユイの気配を探る。

少しして、衣擦れの音が止んだので、声をかけた。

「もういいか？」

「うん」

ロイドは振り返り身体を起こす。ユイはベッドの縁に腰掛けて、時計を眺めた。

「今から、ご飯作ってたら、あなた遅刻するわね。寝坊してごめん」

「気にするな。昨日のシュークリームがあるから、それでいい」

「うん。ありがとう」

ユイは少し微笑んだ後、真顔でじつとロイドを見つめる。

「どうした？」

問いかけると、意を決したように口を開いた。

「ねえ、ロイド。局の事を部外者に話したらいけない事は分かって

るわ。でも、ひとりで悩んで辛いなら、私に話して。決して他の誰にも、聞いた事を話さないから」

やはりユイは、ロイドを気遣って思い詰めていたらしい。

ユイの気遣いは、素直に嬉しい。いつそ全てを話してしまえたら、お互い、どれだけ救われるだろう。けれど、甘えてしまうわけにはいかないのだ。

ロイドは静かに微笑んで、ユイの頬に手を添えた。

「おまえは、誰も見ていなくて、誰にもばれない確証があったら、他人のものを盗んだりするのか？」

「しないわよ、そんな事！」

ユイはムツとして、即座に言い返す。ロイドは一層目を細めて続けた。

「それと同じだ。おまえが誰にも話さないと言うなら、誰にもばれない事は分かっている。けれど、だからといって、オレが話すわけにはいかないんだ。おまえの気持ちだけ、ありがたく頂戴しておく」
「……うん」

ロイドが頭を撫でると、ユイは目を伏せて力なく頷いた。

不意にユイは顔を上げて、わざとらしいほどの明るい笑顔を見せた。

「無理な事言ってごめんね。ご飯はないけど、お茶を淹れるから。

私、下で待ってるわね」

そう言つと、シークリムの乗った皿を持って、寝室を出て行った。

ロイドもすぐに寝室を出て身支度を調べ、荷物を持って自室を出た。その時、廊下でばったりランシュに出くわした。

平然と挨拶をして通り過ぎようとするランシュに、ロイドは壁に手をついて行く手を塞いだ。

ランシュは無表情のまま、ロイドを見上げる。

ロイドは睨みつけながら、努めて静かに非難した。

「ゆづべのあれは何のつもりだ。ユイに危害を加えないと、おまえ

は誓っただろう」

表情を変えることなく、ランシュはしれつとして答える。

「危害は加えてないでしょう？ あれはあなたへの牽制です。あの時のあなたは冷静さを失っていた。ユイの目の前でオレとの陰悪な関係を暴露したくはないでしょう？」

ぐうの音も出ない。

確かに、ランシュに抱きしめられているユイを見ただけで、心臓が脈打った。だが、そんなロイドを挑発するように笑って、冷静さを失わせたのはランシュだ。

まんまと乗せられた自分に非があるとはいえ、ユイに知られたくないなら、なぜそんな事をするのか、ランシュの真意が未だ掴めない。

黙って睨むロイドをからかうように、ランシュは首を傾げて顔を覗き込んだ。

「それとも、ユイが何か言いましたか？ オレに危害を加えられたとか、オレに怖い目に遭わされたとか」

「いや……」

ユイはランシュを怪しんではない。抱きしめられても不快に思っていないという事は、ランシュを男としてさえ、警戒していないという事だろう。

その辺はユイの鈍さが原因だと思われる。

答えるわけではないと思いつつも、ロイドはランシュに尋ねた。

「何を企んでいる？」

ランシュは笑いながら答えた。

「それをあなたに話すわけないでしょう。今のところは、まだ様子見ですよ」

そして、意味ありげな笑みを浮かべ、ロイドを見据える。

「でも、方向性は見えてきたかな？」

しばらく無言のまま、二人で睨み合っていると、階下からユイの呼ぶ声がした。

「ロイドーッ。そろそろ下りてこないと遅刻するわよーッ」

ロイドは壁についた手を離す。

ランシュはフツと笑って目を逸らすと、横をすり抜け階下へ姿を消した。

ロイドの弱点がユイである事を、ランシュには知られているだろう。

今はまだ、ユイに危害を加えてはいないが、その内ユイが安心しきった頃に、何らかの行動を起こす可能性は充分考えられる。

そうなる前に、なんとかユイを守る手立てを講じなければならぬ。

本当は一秒たりともユイの側を離れたくはないが、そんなわけにもいかない。

ロイドは重い足取りで、一階への階段を下りた。

（第1話 完）

Do While (1)

大皿に山盛りになったシュークリームをぺロリと平らげて、ロイドはいつものように仕事に出かけた。

結衣とランシュはいつもより遅い朝食を摂り、それぞれ掃除を始める。今日は店が休みなので、それほど慌てる事もない。結衣はいつもより余裕を持って、二階の掃除と洗濯を片付けた。

作業を終えて一階へ下りると、すでに掃除を終えたランシュが、リビングのソファに座って、ロイドがテーブルに置きっぱなしにしていた機械工学の科学雑誌を読んでいた。

科学技術局を辞めて、機械から遠ざかっていたようだが、今も興味は尽きてはいないようだ。

結衣は少し離れて隣に座り、テーブルの上の小鳥を取って電源を入れた。手の平に乗せた小鳥の頭を撫でながら、ゆうべの事を思い出す。

ランシュの助言に従って、結衣はロイドの好きなお菓子を作った。自分がロイドを元気づける手立ては、それしかないと思ったからだ。ところがロイドは、それを拒絶した。

寝る直前だったからかもしれないが、唯一の手段を拒否され、結衣は目の前が真っ暗になったような気がした。

直接手助けする事も、話を聞く事も出来ない。他に自分がロイドに与える事が出来るものは、もう自分自身しかない。そう思った途端、知らず知らずに口走っていた。

一瞬驚いたけれど、それでもロイドは嬉しそうに笑って応えてくれた。

今朝、目覚めた時、目にした穏やかな表情が、いつものロイドに戻ったような気がして、少し嬉しかった。そう思ったのも束の間、再び拒絶された。

頑固なロイドは、たとえ誰にもばれなくても、決してルールを破

る事はない。だからこそ、国王をはじめとする人々の信頼を得ているのだろう。

分かっていても、自分だけは例外になりたい。

それがロイドの得ている信頼を揺るがす、わがままだとしても、フウとため息をついて、小鳥を肩に留まらせる。横からランシュが、声をかけた。

「どうしたの、ユイ？ 元氣ないね。先生とケンカでもしたの？」

心配そうに見つめるランシュに、結衣は笑顔を作って答える。

「なんでもないの。ちょっと自己嫌悪。ほら、今日寝坊しちゃったし」

「そう。でも気にしないでいいんじゃない？ 毎朝早いんだし、今日は休みだし」

「うん。ありがとう」

会話が途切れ視線を外すと、結衣の頭の中は、再び同じ事にグルグルと囚われ始める。

少ししてランシュが、沈黙を破って立ち上がった。

「出かけよう、ユイ」

結衣は驚いて、ランシュを見上げる。

「え？ どこへ？」

ランシュは笑顔で、結衣の手を取り立ち上がらせた。

「どこでも。ユイの行きたいところ。だって、やっぱり元氣ないもん。気分転換に。ね？」

確かにランシュの言う通り、こうして家でぼんやりしていても、気持ちが沈むばかりだ。

結衣は返事をして、改めてランシュの姿を見つめた。

着の身着のままやって来たランシュは荷物を何も持っておらず、靴以外、全身ロイドの借り物に身を包んでいる。

ロイドより背が低く華奢なランシュは、シャツの袖もズボンの裾も折り曲げて、明らかにサイズが合っていない。

「じゃあ、買い物に行こうか。ランシュの服を買いに行こう」

結衣が笑顔で提案すると、ランシュは困惑した表情を見せた。

「え……いいよ、オレのは。ユイの欲しい物買いなよ」

「私がランシュの服を買いたい。だってロイドの服じゃ大きすぎるでしょ？」

「そうだけど、小さいよりは問題ないし」

「もう、遠慮しないで。いつも色々手伝ってもらってるから、その対価よ。その代わり明日からもしっかり手伝ってもらわね」

ランシュはやっと、遠慮がちに頷いた。

「わかった。しっかり働くよ。力仕事とか、何でも言って」

ランシュに笑顔を返し、結衣は肩の小鳥を手の平に乗せて見つめた。

「ロイド。出かけてくるから少し留守番しててね」

小鳥がピツと返事をするのを待って、電源を切る。

ランシュが不思議そうに問いかけた。

「その小鳥、先生の名前つけたの？」

結衣は苦笑して答える。

「うん。背中に登録用のボタンがあるんだけど、うつかりしてて、ロイドの名前を呼びながら、背中を触っちゃったのよ」

名前の登録は、一回しか出来ないの、訂正出来ないのだ。

テーブルの上に小鳥を置いて二階へ上がり、急いで支度をする。結衣はランシュと一緒にラフルールの商店街に向かった。

男の子の服と一緒に買いに行くのは初めてだ。ロイドは滅多に服を買わない上に、いつの間にか自分で買ってきて来ている。

いつも白衣を羽織っているせいか、普段の服装にはあまり頓着しないらしい。それでも格好良く見えるのは、惚れた欲目だろうか。

男性用のショーツを巡るのも初めてなので、結衣はちょっとワクワクしていた。

ランシュと一緒に二、三の店を回り、彼の服を一通り買いそろえる。

若くてスマートでかわいい容姿をしているので、流行りのおしゃ

れな服を選ぶのかと思ったら、ランシュの好みもロイドと同じで、流行り廃りのないシンプルな物だった。

学者たちは、おしゃれにあまり興味がないのだろうか。

買い物を終えると、正午を少し過ぎていた。今日は外で昼食を摂る事にする。

ランシュが穴場の店を知っているというので、二人で商店街の表通りを外れて裏路地へ入った。

ランシュは身を隠さなければならぬ。飲食店も多く軒を連ねる表通りは、科学技術局から職員たちが昼食に出てくる事もあるからだろう。

ランシュの案内してくれた店は、裏通りの民家の間にあつた。入口にプレートがぶら下げられているだけで、知らなければ見過ごしてしまうほど、周りの民家と同化している。

ランシュもベルグラーヴに教わつたらしい。

扉を開けて中に入ると、意外と明るい店内には、すでに数名の客が入っていた。

席について注文を終えると、結衣はランシュに尋ねた。

「他に何か欲しい物はない？」

ランシュは目を見張って両手を振る。

「いや、もう充分だよ。オレの給料そんなに高くないでしょ？」

「大丈夫よ。服は私のプレゼント。連れ出してくれたお礼よ。おかげで元気になったから」

「でも……」

「心配しないで。私もそれくらいの稼ぎはあるのよ。ね、ランシュは初給料で何を買いたい？」

有無を言わせぬ結衣の口調にランシュは諦めたのか、苦笑してためらいがちに答えた。

「オレもプレゼントしたいな」

結衣の知っている限り、ランシュには身内と呼べる人はいない。ロイドとは、それほど仲良さそうには見えない。師弟以上の関係で

はなさそうだ。

だとしたら、一体誰にプレゼントしたいのか。ランシュの照れくさそうな表情が、結衣の興味をかき立てた。

思わずテーブルにひじをついて、身を乗り出す。

「誰に？」

「え……」

好奇心丸出しで詰め寄る結衣に、ランシュはたじろぎながら背筋を伸ばして身を退く。

「好きな人？」

「あ……うん」

「ラフルールにいるの？」

「うん」

「どんな人？ かわいい？」

「かわいいよ。年上だけど……」

たたみかけるように質問すると、ランシュはポツポツと白状した。告白よりも先にキスをするエロ学者や、大きな胸は男のロマンだとか言う弟や、結衣の周りはエロい男ばかりだ。

はにかんだようなランシュの初々しさが新鮮で、微笑ましくて、自然にテンションが上がる。

「告白したの？」

「いや、それは……」

「間違つても、告白より先にキスしちゃダメよ」

「へ？」

真剣な顔で諭す結衣に、ランシュは目を丸くする。こういう反応もかわいい。

結衣は渋い顔をしながら腕を組んで、本当はロイドしか知らないのに、経験豊富なお姉さんぶって偉そうに言う。

「大人の女は段取りにうるさいの。そういう段取りを間違えるエロ学者がいたのよ」

途端にランシュは吹き出した。

「でもユイは、それでも受け入れたんだよね」

うっかりエロ学者と言ってしまい、ロイドの事だとあっさりばれてしまったようだ。

少しきまりが悪くて、結衣は目を泳がせる。すると今度は、ランシユが尋ねてきた。

「ユイは何が欲しい？ 大人の女の人ってどんな物が欲しいのか、オレ、よく分からないんだ。教えてよ」

「うーん。無難なところだと花束かな？ 花をもらって嫌がる人はいないと思う。でも他の物だと人によって違うわよ。大人でもぬいぐるみや人形が大好きな人もいるし、指輪やネックレスはつけないからいらなくて人もいるし」

「それじゃ参考にならないよ。ユイは何をもらったら嬉しいの？」

結衣は少し困って絶句する。実のところ、ロイドからプレゼントをもらった事がないのだ。

ロイドからもらった物は、結婚指輪と小鳥ロボットだけだ。小鳥ロボットはロイドのマシンが迷惑をかけたお詫びとしてもらった物で、結婚指輪に至っては、日本の儀式「指輪の交換」がなければ、もらえなかったかもしれない。

バレンタインデーには毎年、激甘チョコレートケーキをあげるが、ホワイトデーにお返しがあった事はない。そもそも克蘭ベールに、そんなイベントはないのだから仕方ない。

お返しの催促をするのも浅ましいので黙っている。ロイドはその日のチョコレートケーキの意味すら知らないだろう。

元々結衣としては、バレンタインデーに好きな人に手作りのチョコレートケーキをあげるといって、長年の夢が叶ったので満足しているのだ。

プレゼントをもらった事がないので、ここは想像で答えるしかない。

結衣は悟られないように、余裕っぽい笑顔を浮かべて答えた。

「私は好きな人からのプレゼントなら、何でも嬉しいわよ」

多分、ロイドが何かをくれるなら、本当にそうだろうと思う。なにしろ初プレゼントなのだから。

てつきりまた、参考にならないと言われるかと思ったが、意外にもランシュは、結衣の大雑把な答えに「ふーん」と言っただけだった。

少しして、ランシュが首を傾げながら、イタズラっぽい表情で問いかけた。

「ユイは、オレの事好き？」

「好きよ」

色々手伝ってくれたり、落ち込んでいるのを心配してくれたり、恋愛相談まで受けるほど慕われて、嫌いになれるわけがない。

相談されたというより、自分が無理矢理聞き出した事などすっかり棚に上げて、結衣は機嫌良く即答した。

ランシュは無邪気なかわいい笑顔で、嬉しそうに言う。

「じゃあ、オレのプレゼントは何でも嬉しいんだね」

「そうね」

結衣もつられて、笑顔で頷いた。

Do While (2)

結局ランシュは服の他には何も買わず、結衣と一緒に夕食の買い物を手伝って家に帰った。

買ってきた物を冷蔵庫に入れていて、味噌が残りわずかになっている事に気付いた。

クランベールに味噌はない。

結衣は一通り荷物を片付けた後、欲しい物リストと共に、実家へ手紙を書いた。リビングの隅に置いてある、物品専用の時空移動装置に手紙を入れて実家へ転送する。

時空移動装置ミニは、人捜しマシンをそのまま小さくしたような形をしている。底辺の直径は五十センチくらい、高さは一メートルくらいで、天辺は丸いドーム状になったガラスの筒だ。頭頂部には転送確認の赤いランプもついている。

大きさ的には人間の子供くらいは入れそうだが、人は転送できない。

機械が苦手な結衣でも簡単に操作できるように、機能はかなり限定されている。ボタンひとつで転送できるように、転送できる物も決まっているのだ。

一時間後、母からの返事が届いた。今夜八時に味噌が届く。

味噌の調達が終わり、結衣はケーキを作り始めた。

毎週定休日には、ロイドのためだけにケーキを作る。今日のケーキは、ロイド用にミルクチョコレートを増量した、濃厚ガトーショコラにした。

ランシュは街から帰ると、結衣の薦めで早速買ってきた服に着替え、朝と同じようにソファに座って、時々結衣の様子を眺めながら、雑誌を読んでいた。

結衣がケーキを作り始めると、側に来てそれを眺める。

何がおもしろいのか尋ねたら、どうやってお菓子が出来るのか興味があると言った。

「オレも今度作ってみていい？ 上手くできるようになったら、ユイの手助けにもなるし」

ランシュの提案に、結衣は微笑む。

「うん。ありがとう」

ケーキ作りは案外、腕力を使うのだ。

「ランシュがコツを覚えたら、メレンゲとか全卵のホイップとか頼んじゃおうかな」

「それって、力仕事だよね？」

「あ、バレちゃった？」

二人は顔を見合わせて笑った。

ガトーショコラが焼き上がった頃、ロイドから連絡が入った。今日も帰りが遅くなるので、夕食はいらなという。

結衣はガトーショコラにチラリと視線を送る。

また食べてもらえないのかもしれない。そう思うと、少し気持ちが沈んだ。

明日は店があるので、そんなに遅くまで起きてはいられない。

結局その夜、結衣が起きている内に、ロイドは帰ってこなかった。翌日早朝、食卓の上に置かれたままの、手付かずのガトーショコラを見て、結衣は大きなため息をついた。

甘い香りに鼻腔をくすぐられ、ロイドは目を覚ました。いつもならユイが声をかけるまで、ゴロゴロしているところだが、今日は目的がある。

ロイドはベッドから出て身支度を整えると自室へ向かった。部屋の隅にいくつか置いてある、箱の中身を確認する。

床に広げておいたら掃除が出来ないとユイが文句を言うので、それぞれのマシンごとに箱に入れて積み重ねてある。箱の中にはマシンを構成する部品と、設計図が入っていた。

ほとんど手付かずの箱を選んで、ランシユの部屋へ向かう。

ゆづべ遅くなると連絡をした時、ユイから少し話を聞いた。ランシユの服を買うために、二人で街に出たらしい。

ロイド自身忙しくて、ユイと話をする時間すらろくにないのに、そんな楽しそうな事をさせてたまるかと思う。

なにしろこのところ科学技術局は、複数の研究室から次々に研究成果の完了申請が上がってきている。ロイドはその確認と承認に追われて、自分の研究課題にも手をつけられない状況だった。

おまけに承認された成果物が公表されると、その関連分野の企業や雑誌社、国の関連機関から、取材や問い合わせが殺到し、その対応もしなければならぬ。

取材の対応は副局長に大半はまかせているものの、しばらくは休みも取れそうになかった。

そんな状態なので、家にいてランシユを見張っている事が出来ない。これ以上ユイがランシユと親しくなりすぎないように、ランシユに仕事を与える事にしたのだ。

とはいえ、ユイにも出来る事は、ユイが手伝って、益々仲良くなりかねない。

ユイには出来ないけれど、ランシユには出来る事。つまり機械いじりだ。

今は部外者となったランシユに局の仕事をさせるわけにはいかないので、ロイドが趣味で作ろうとしている物を、代わりに作ってもらう事にした。

部屋の外から声をかけたが返事がない。中を覗くと、ランシユの姿はなかった。すでに一階に下りているようだ。ロイドは箱と鞆を持って、一階へ下りた。

リビングにもダイニングにも、ランシユの姿は見えない。トイレ

にでも行つたのかと思つていると、奥のキッチンからユイとランシユの声が聞こえてきた。

怪訝に思い覗くと、朝食の支度をするユイの側で、ランシユが泡立て器でボウルの中身をかき混ぜていた。どうやらお菓子作りを手伝っているようだ。

ロイドは途端に不愉快になる。まったく油断も隙もあつたもんじやない。さつさと仕事を与えてしまおう。

ユイがランシユの持つボウルを覗いた拍子に、ロイドがいる事に気付いた。それに続いてランシユも、こちらに視線を向けた。

ユイは少し驚いたように、目を見張つて声をかける。

「おはよう。今日は早いね。朝ご飯、もう少し待つてくれる？」

「ああ。ランシユ、ちよつと来い」

ランシユはボウルの中をチラリと覗いて、ユイに尋ねた。

「ユイ。これ、どうしよう？」

「また後でいいわ。そこに置いていって」

ユイに言われた通りボウルを置いて、ランシユはキッチンを出てきた。

二人でリビングに行き、ロイドはランシユに持っていた箱を突き出す。

「お菓子はユイに任せて、おまえはこれを作つてろ」

「何ですか？ これ」

箱を受け取り中を覗きながら、ランシユは怪訝な表情で尋ねた。

「オレが作るうとしていたマシンだ。ユイが店に出ている間、おまえヒマだろう。人間、ヒマをもてあましていると、ろくでもない事しか考えないからな」

ロイドが不敵な笑みを浮かべると、ランシユはフツと笑った。

「なるほど。オレの気を紛らわせようという作戦ですか。いいですよ。機械いじりは二年ぶりだから、リハビリがてら、やらせてもらいます。ところで、これ何なんですか？」

「それは出来上がってからの楽しみだ。その方が作りがいがある

だろう。その中に設計図も工具も入っている。おまえの得意な口ボツトだ。ユイの手助けにもなるから張り切って作れ」

ちよつとイヤミと恨みも込めて、ロイドはランシュの背中をバシバシ叩いた。

ちようどそこへ、ユイが出来上がった朝食を食卓に運びながら、二人に声をかけた。

ロイドは食卓について、テーブルの隅にユイの作ったケーキが置いてある事に、初めて気付いた。おそらく、ゆうべ作ったのだろう。定休日にはいつも、何か作ってくれていた。

ランシュの事と仕事の忙しさに手一杯で、ユイの気遣いに気付いてやれなかった事に罪悪感を覚える。

ロイドは食事を摂りながら、何気ない調子で告げた。

「ユイ。それ、包んでくれ。持つて行つて間食にする」

一瞬、何の事が分からない様子で、ユイはキョトンとした。そしてロイドの視線を辿り、ケーキの事だと分かったらしく、嬉しそうに笑つて頷いた。

「うん」

食事を終え、ロイドは鞆を持つて玄関へ向かう。しばらくは毎日帰りが遅くなるので、夕食が必要な時に連絡をする事をユイに告げた。

挨拶のキスをして出かけようとする、ユイが思い出したように手を打った。

「そうだ。ゆうべソータから手紙が来たの。三日後から夏休みになるから、こっちに遊びに来たいんだって。人捜しマシンの申請、お願い」

「わかった」

返事をして玄関を出たと同時に、ロイドの気持ちは一気に高揚する。

（そうか、ソータだ！）

どうやら、こちらに風が向いてきたようだ。

ロイドは少しウキウキした気分で、科学技術局へ向かった。

D o W h i l e (3)

ロイドが出かけた後、いつものように掃除と洗濯を済ませて一階へ下りると、ランシュがリビングのテーブルの上に、ロイドから受け取った箱の中身を広げていた。

結衣がリビングに入ってきた事も気付かずに、設計図と部品を見比べている。

ベルⅡグラーヴと暮らしていた時はすっかり忘れていたと言っていたが、ロイドの側に戻って来て、機械好きの血がまた騒ぎ始めたのだろう。

水を得た魚のように生き生きとした表情に、結衣は思わず目を細めた。

夢中になっているようなので声もかけず、結衣はそのままキッチンへ入った。ランシュが作りかけて置いていたメレンゲを完成させて、シフォンケーキを作り、オーブンに入れた。

リビングに出てくると、ランシュが初めて気付いてこちらを向いた。

「楽しそうね」

笑いながら声をかけると、ランシュはハッとしたように立ち上がった。

「あ、ごめん。オレ、作りかけだった」

「続きは私がやったから大丈夫よ」

ランシュは申し訳なさそうに頭垂れて、上目遣いに見つめる。

「ホント、中途半端でごめん」

「いいのよ、気にしなくて。だってランシュ、そっちの方が楽しそうなもの」

「え……そんな事……」

「別にイヤミじゃないの。ランシュ、この間の夜不安そうにしてた

から、そんな風に楽しそうにしてると私も安心するのよ」

「うん。ありがとう」

ランシュに笑顔が戻り、結衣はテーブルの上を覗き込んだ。

「何作ってるの？」

ランシュは困ったように頭をかく。

「それが、まだ分からないんだ。設計図にも全体図がないし」

「それで作れるの？」

「一応、連結する部分は分かるようになってるから。ユイを手助けするロボットだって」

「へえ、何かしら？ 楽しみね。じゃあ私、店の準備があるから」

結衣がその場を離れると、ランシュは再びソファに座って、謎のマシンに没頭し始めた。

その様子にチラリと目を向け、結衣は開店準備のために店へ向かった。

三日後ランシュは、ロイドに借りたノートパソコンで制御用のプログラムを作成していた。

何が出来たのかは分かっただけ、ロイドから追加でプログラムの仕様書をもらったらしく、

何を作っているのか結衣が再び尋ねたら、イタズラっぽい笑顔で「ヒミツ」と返された。

この三日間ランシュは、掃除と買い物と食事の支度は今まで通り手伝ってくれたが、それ以外の時間は一日中謎のマシンに夢中になっている。

科学技術局を辞めた理由は分からないが、もしも病気が原因で辞めたのなら、本当は辞めたくなかったのではないかと結衣は思った。結衣の推理が正しければ、多分ランシュは違法な事に手を染めている。それを考えると、科学技術局への復職は限りなく無理っぽい。

気もする。

けれど、これだけ夢中になっている姿を見ると、国の機関は無理でも、民間の関連機関とか、何か社会復帰の道はないものか、ロイドに相談してみたかった。

ロイドは相変わらず毎晩帰りが遅く、顔を合わせるのは朝食の時になる。

ランシュの目の前で話すのも気が引けるので、結局話せないままだった。

夜の八時を過ぎた頃、少し渋い顔をする副局長に別れを告げて、ロイドは局長室を後にした。

科学技術局には研究室が並ぶ本館と、成果物が並ぶ別館とがある。本館は局員でさえ厳しく出入りが制限されているが、別館は見学コースにもなっていて、一般人でも事前申請して許可が下りれば、成果物を使用する事も出来る。

臨床試験を終えた広域人物搜索装置は、この別館に並べられていた。

局長室は科学技術局本館の一番奥にある。両脇に研究室の並ぶ長い廊下を、ロイドは別館への渡り廊下に向かって早足で進んだ。

各研究室は、まだ誰かが残っているらしく、ほとんど灯りが点いている。その中にひとつだけ、昼夜を問わず灯りが消えたままの部屋があった。

以前、ランシュが住んでいた部屋だ。

消息が掴めていないので、二年前からそのままの状態で放置されている。

その部屋は元々研究室のひとつだったらしく、出入口には他の研究室と同様に厳しいセキュリティが施され、今では開かずの間と化していた。

灯りの消えたこの部屋が、否が応でも局員たちの記憶にランシュの存在を浮き彫りにする。

失踪から三年経てば、死亡したものととして役所に届ける事が出来るので、来年になればこの部屋も片付けられるのだろう。

だが、実際にランシュは生きている。

今でさえランシュは、身を隠すために誰かに縋らなければ生きていけない。死亡した事になってしまえば、克蘭ベールでの生活は益々困難なものになるだろう。

ランシュが生きていた事、元気になった事は、ロイドにとって素直に、嬉しい事だ。

局にいた頃のランシュには慕われていたし、彼の才能をロイドは高く評価していた。

ランシュが遺伝子に刻まれた宿命の呪縛から解き放たれ、その才能を存分に発揮する様を見てみたいと思っていた。

今、それは可能になっている。ランシュがおとなしく局に戻るなら、時間はかかるかもしれないが、なんとか彼が職場復帰できる道を探りたいと思う。

けれど本人に、局へ戻る意思はないらしい。それどころか、復讐を企んでいる。

ロイド自身に直接向けられる復讐なら、二年前に宣言した通り、何でも受けてやる覚悟はある。だが、ランシュの矛先はユイに向けられている。

現にユイを手なずけようとしている節が見受けられる。

ロイドの弱点がユイであると知られてしまった以上、ロイドにダメージを与えるには、それが一番効果的だという事は明らかだ。自分がランシュだとしても、そうするだろう。

仕事の都合でユイを見守ってやれない代わりに、ランシュの気を逸らすために仕事を与えた。ユイの話では、この三日間、ランシュはほぼ一日中、それに夢中になっているという。

復讐はどうした？ とツツコミを入れたくなった。

ユイにちよつかいを出されるよりは断然いいが、益々ランシュが何を考えているのか分からなくなった。

本館の長い廊下を抜けて、渡り廊下を進み、ロイドは別館へとやって来た。一段高い位置にある一般人の見学用通路の下をくぐり、成果物の展示スペースへ向かう。

警備員と管理係に声をかけ、顔を見れば知れている事だが、規則上身分証を提示して、広域人物搜索装置へ案内してもらった。

今夜、ユイの弟ソータを、迎えに行く事になっている。三日前ユイに告げられて、ロイドは即行で装置の使用申請を出し、自ら最優先で許可を出した。元々他に使用申請は出ていなかったたので、特に問題はない。

ソータがいれば、ユイとランシュが二人きりになる事はない。ランシュもユイに手出しはしにくいだろう。

それにランシュは局にいた頃、外出許可が下りた後も、ほとんど外出することなく、局内に引きこもっていた。そのため彼の周りは大人ばかりで、同年代の友人はいない。

特殊な環境で規則に縛られて育ったせいか、ランシュは感情の起伏に乏しい少年だった。

彼の激しい感情を見せつけられたのは、二年前に死を目前にした病室で復讐を宣言された時が初めてだった。

再会したランシュは、驚くほど感情が豊かになっていた。

昔からたまに見せる笑顔がかわいいと女性局員たちの間では評判だったが、基本的に無表情だったランシュが、初日にロイドと交渉しているわずかな間にも、めまぐるしく表情を変えた。

局を出て一般人としてベル・グラーヴと暮らしていた二年間が、ランシュの感情を育てたのだろう。

ソータの存在はランシュの復讐を阻むと同時に、同年代の同性との交遊という、ランシュにとってもいい経験になるはずだ。

ソータの滞在期間、十日間の内に、普通の二十歳らしさを取り戻し、復讐など忘れてくれれば、それに超した事はない。

ロイドは広域人物搜索装置にソータの部屋の座標を入力し、ガラスの筒に入った。手にしたリモコンで遠隔操作を行い、時空移動を開始する。

装置が作動し、ロイドを見守っていた管理係の姿が、やがて光の幕に覆い隠された。

Do While (4)

「キヤーツ！ マカロン、外に出ちゃダメーツ！」

ソータを連れて家に帰り玄関を開けた途端、ユイのわめき声が出迎えた。

呆氣にとられたロイドの元に、ユイが駆け寄ってきてしゃがみ込んだ。見ると、足元に円盤状のロボットがいて、目玉のような四つの赤いランプを点滅させていた。

上部についたスイッチを切って、ユイはロボットを抱えて立ち上がった。

そのロボットは、ロイドがランシュに作らせていた、床掃除ロボットだ。

フライパンから柄を取ってひっくり返したような大きさと形状で、底面にはセンサと自在に動く車輪がついている。

狭い隙間にも入れるように、厚みはフライパンの半分くらいと、かなり薄い。センサでキャッチしたゴミや埃を、底面に取り付けられたブラシを回転させてかき集め吸引する。

人工知能を搭載しているので、使用することに部屋の形状やゴミのたまりやすい場所をデータとして蓄積し、以降の作業を効率的に行うようになる。

「もう出来たのか」

ロイドが尋ねると、ユイは苦笑した。

「うん。さっき出来たばかりで、試運転をしてたの」

「マカロンって何だ？」

「この子の名前。マカロンに似てるでしょ？」

言われてみれば、巨大マカロンに見えなくもない。

クリームパイやシュークリームなど、カスタードクリームを作った時、余った卵白でユイが作るマカロンはロイドも気に入っている。

口に入るとフワフワととろける甘さが、ユイの唇を彷彿とさせる。

名前登録機能は仕様になかったはずだが、ランシュがオプションで追加したのだろう。

ロイドは今さらながら、ユイに挨拶をする。

「ただいま」

「おかえり」

キスをしようとする、ユイは気まずそうに顔を背けた。

「何だ？」

「だって、ソータが見てるし」

振り返ると、ソータがニヤニヤしながら、こちらを見ていた。

「いやあ、オレの事はおかまいなく」

ソータの言葉を受けて、ロイドはユイに向き直る。

「ああ言ってる」

「私はかまうの！」

そう吐き捨ててユイは、ロボットを抱えたまま、リビングの奥へ歩いていった。

毎日、ランシュの前では嫌がらないのに、なぜソータの前ではダメなのか、ロイドにはよく分からなかった。

このところ忙しくて挨拶の時しかキスもしていなかった、少し不満に思いつつも、ロイドはユイに続いて、ソータと共に家に入った。

リビングの奥でユイからロボットを受け取ったランシュは、こちらを向いてロイドに挨拶をした。ロイドはランシュとソータにそれぞれを紹介する。二人は笑顔で握手を交わし、揃ってソファに腰を下ろした。

ソータには帰る道すがら、ある程度ランシュの事は話しておいた。初対面で質問するであろうランシュの経歴や出身については、科学技術局の内部事情に関わるため、本人も答える事が出来ない、ので、訊かないように言っている。

ソータはニッポンの学校で、機械工学分野の研究をしているらしい。ランシュが機械工学の天才児だと言われていた事を話すと、興味を示していた。

ロイドの作ったマシンにも興味を示していたが、今はランシュの作ったマカロンが気になるようで、色々と質問を繰り返していた。

元々研究一筋で人付き合いの得意でないランシュは、最初こそ戸惑っていたが、人懐こいソータに自然と打ち解けていった。

なかなかいい傾向じゃないかと、ロイドは密かに悦に入る。

話を聞いていると、マカロンには音声認識機能も追加されているようだ。

元々は人工知能搭載なので、放っておいても、勝手に掃除をしてくれる。だがマカロンは小鳥ロボットと同じように、名前を登録した主の命令を聞くようになっている。

ロイドの仕様では強制的に動かそうと思えば、リモコンを使用する事になっていた。ユイにも分かりやすいように、そんなに複雑なリモコンではない。

しかし音声で命令できる方が、確かにユイにとっては簡単だろう。作るのはそっちの方が面倒なのだが。

茶を運んできたユイがロイドの隣に座り、二人の様子に目を細めた。

「あら、随分仲良くなったのね」

するとソータは、ひやかすような笑みを浮かべて、ユイに言い返した。

「そっちの二人ほどじゃないよ。な？ ランシュ」

「あ、うん」

突然同意を求められて、ランシュは目をパチクリさせる。いつもは落ち着き払っているランシュの、こういう素の表情はロイドにとっては、やけに珍しかった。

「こんなラブラブ夫婦と一緒に住んで、胸焼けしねえ？」

ソータの問いかけに、ランシュは不思議そうに、少し首を傾げる。

「ラブラブ？ 確かに仲良しだけど、普通だと思っよ」

「普通じゃねーだろ。目の前で平気でキスしようとするし」

「キスって、挨拶の、でしょ？」

キョトンとするランシュに、ソータは絶句して大きくため息をついた。

「克蘭ベールって、こういうところ、オウベイ（欧米）かって思っよな」

ランシュはまだ不思議そうな顔で、ソータに尋ねた。

「ソータはユイにキスしないの？」

ソータは大げさにのけぞって答える。

「しねーよ、そんな事！ 想像しただけで鳥肌立った」

「私だって絶対イヤよ」

ユイもすかさず同調する。ユイにまで否定されて、ランシュは益々わけがわからないという表情で、さらに追及する。

「なんで？」

「ニッポンじゃ、挨拶でキスはしないんだよ。たとえ唇じゃなくても、親密な関係にある男女がプライベートな空間でしかないの。

普通、人前ではしないし、自分の親兄弟とキスなんてありえねーし」
「ふーん。そういう習慣なんだ」

ランシュはやっと納得して頷いた。ロイドも胸中で密かに頷く。

ランシュの前ではよくて、ソータの前ではダメな理由がやっと分かった。

人前ではキスをしないという、同じ習慣を持つソータの前でキスをするのは、ユイにとって恥ずかしい事なのだろう。

少しの間四人で雑談をした後、ユイは明日の準備のために席を立った。ユイとランシュは、すでに風呂を済ませたという。ソータに勧めたら、明日も仕事があるロイドが先に入るようにと、譲ってくれた。

ロイドが風呂から出ると、ソータとランシュはまた二人で話し込んでいた。どうやら二人は気が合うようだ。

ユイはすでに寝室に引き上げたらしい。ソータが風呂に向かい、ロイドもランシュもそれぞれ部屋に引き上げる。ソータは滞在中、ユイの部屋に寝泊まりする事になった。

ロイドが寝室に入ると、ユイはいつものように背中を向けて、ベッドに入っていた。

まだ眠ってはいないだろうと思いつつも、そつと隣に潜り込む。すると案の定、ユイはこちらを向いた。ロイドは微笑んでユイを抱き寄せる。

ほんの数日、忙しくて顔を合わせる時間がほとんどなかっただけに、こんな風にユイを抱きしめるのは久しぶりの気がする。

ロイドの腕の中で、ユイは嬉しそうに告げた。

「ランシュがソータと仲良くなつて安心しちゃった」

「ああ、そうだな」

確かにそれも、思いの外うまくいった。このままロイドの思惑通り、復讐など忘れてくれればいいと思う。

久しぶりにユイの温もりを感じながら、先ほど挨拶さえお預けにされたキスを仕切り直したくなった。

ロイドはユイに、グツと顔を近付けて囁いた。

「プライベートな空間でならいいんだろう？」

ユイの返事を待たずに、もう一言囁く。

「ユイ、愛してる」

そして久しぶりに、ユイの唇を存分に堪能した。ユイは明日も早起きをしなければならない。頭では理解しているのだが――。

「ヤバイ。止まらなくなった」

「ええ?!」

ロイドがユイの上に覆い被さったと同時に、部屋の外からソータの大声が響き渡った。

「ねーちゃん。ちょっと来てーっ! シャワーの止め方、わかんねーっ!」

少しの間互いに硬直して見つめ合った後、ロイドは顔をしかめて

ボソリとつぶやいた。

「あいつ、わざとじゃないだろうな」

ユイはクスリと笑い、ロイドの下から這い出す。

「はい。今、行くーっ」

大声で返事をしながら、ユイは寝室を出て行った。

一人残されたロイドは、ゴロリと横になって、寂しく布団を抱きしめながら、闇の中で舌打ちした。

Do While (5)

ロイドが仕事に出かけた後、結衣は洗濯のため二階へ向かった。今日から掃除はマカロンがやってくれる事になっている。とりあえず調整も兼ねて、ランシュの監督の下、一階の掃除をさせる事にした。

蒼太は眠そうな顔で、マカロンの邪魔にならないように、ソファの上に足を上げて、その様子を眺めていた。

洗濯機をセットして一階に戻してみると、マカロンはすでにリビングの掃除を終えて、ダイニングに移動していた。

昨日、試運転をした時にも思ったが、マカロンは案外動きが速い。ランシュは少し離れたところに立って、マカロンの様子を真剣な表情で眺めていた。

一方蒼太は対照的にトロンとした目で、ぼんやりとマカロンの動きを追っている。

「マカロンの調子はどう？」

結衣が尋ねると、ランシュはマカロンを見つめたまま答えた。

「問題ないよ。後で二階もやらせるから、ユイはお菓子を作ってたいいよ」

「うん。ありがとう。でも、この子、階段から落ちたりしない？」

「大丈夫。ちゃんとセンサで自分の動ける場所は感知してるから。それに今日のところは、念のためオレが見てるし」

突然蒼太の大あくびが聞こえ、結衣は眉を寄せてそちらに目を向ける。

「もう。夜更かしするから眠いのよ。何時まで起きてたの？」

「二時前かな？ だって十時に消灯って、小中学生の林間学校じゃあるまいし。そんな時間に眠れねーって」

「ロイドは毎日真夜中に帰っても、朝はきっちり起きるわよ。あん

たの気合いが足りないのよ」

隣でランシュが、マカロンを見つめたままクスクス笑った。

蒼太は少し顔をしかめた後、ふと思いついたように問いかけた。

「そういえば、朝洗面所で鉢合わせした時、ロイドさんに睨まれた気がするんだけど、オレ、何かしたっけ？ 姉ちゃん、聞いてない？」

おそらく、ゆうべ邪魔された事だろうと、結衣はピンと来た。けれどそれを蒼太に言うわけにはいかないので、とぼけておく。

「さあ？ あんたのイビキがうるさかったんじゃない？」

途端に蒼太は焦り出す。結衣が過去に何度も指摘しているので、自分のイビキがうるさい事は蒼太も把握している。

「げ！ そっちの部屋まで聞こえた？」

「私は眠ってたから知らない」

「ランシュは？ 聞こえた？」

「オレは聞いてないよ」

ランシュの部屋は蒼太が寝ている結衣の部屋からは、一番離れている。たとえ起きていても、多分、聞こえないだろう。

結衣たちの寝室は、蒼太の部屋の斜め前だが、ロイドもあれから程なく眠ってしまったので、聞いていないはずだ。

ゆうべ結衣が部屋に戻った時、ロイドは布団の端を抱きしめて、背中を向けていた。

声をかけると「もう寝た」と、ふてくされたような声で返事をする。相変わらず時々子供っぽい。

結衣は布団に潜り込んで、背中からロイドを抱きしめた。

「愛してるから、機嫌を直して」

「……別に、不機嫌じゃない」

その声は、明らかに不機嫌だ。結衣は抱きしめる腕に、少し力を込める。

「ウン」

「ウソじゃない」

ロイドは結衣の腕をほどいて振り向いた。そして、結衣を抱き寄せ頭を撫でる。

「本当だ。邪魔が入ってよかったんだ。おまえは明日も早起きしなければならいんだろ？ もう寝よう」

「うん」

結衣は頷いて目を閉じた。

本当はランシュの事を相談したり、もう少し話がしたかった。けれど、ロイドも毎日遅くまで働いているので、久しぶりにゆっくり休ませてあげたいと思った。

そしてそのまま、二人とも眠ってしまったのだ。蒼太が眠りについた二時以降は、二人とも熟睡していて、イビキなんか聞いているわけがない。

「ロイドさんに謝った方がいいかなあ」

軽い気持ちで言った言葉を、蒼太がやけに気にしているので、結衣はフオローする事にした。

「大丈夫よ。ロイド、このところ毎日遅くまで働いてるから、疲れて熟睡してたはずよ。あの人目が悪いから、睨んでるように見えただけなんじゃないの？」

「そうかな？ だったらいいけど」

蒼太は一応納得したらしく、ホッと息をついた。

それにしても夜中の二時まで、一人で何をしていたのだろうと思う。結衣の部屋にテレビはないし、クランベールではそんな時間には放送自体ないのだ。

ちよつと気になったので訊いてみる。蒼太は平然と答えた。

「ゲーム。ちよつとのめり込んでた」

「ゲーム機持ってきたの？」

「うん。ランシュがいる事知らなかったから、ロイドさんも姉ちゃんも仕事だし、昼間ヒマになると思ってた」

「もっと有意義なヒマ潰しなさいよ」

結衣が呆れたように言うと、てつきり反論すると思った蒼太が頂

垂れた。

「オレも考えが甘かったなって、ちょっと後悔した。バッテリーが切れちゃってさ。充電、無理？」

「無理なんじゃない？ 外国だし。っていうか、異世界だし」
「だよな」

蒼太がガツクリ肩を落としてため息をつくとき、結衣の横から、掃除を終えたマカロンを抱えて、ランシュが興味深そうに尋ねた。

「ゲーム機って何？」

蒼太は顔を上げて、問い返す。

「え？ クランベールにはないの？ コンピュータゲーム専用の機械だよ」

「コンピュータゲームはあるけど、専用の機械はないよ。どんなもの？」

機械と聞いて、ランシュの興味が更に引きつけられたらしい。

「そいつの調整が終わったら見せてやるよ」

そう言った後、蒼太は名案を思い付いたように目を輝かせた。

「そうだ。ランシュにクランベール仕様に改造してもらえばいいんだ」

安易な発想に、結衣は眉をひそめる。

「そんな事したらメーカーの修理保証が受けられなくなるんじゃないの？」

「ACアダプタだけで事足りるから大丈夫だよ」

「まあ、あんたが いいんなら、いいけど」

結衣がため息をつくとき、再び横からランシュが口を挟んだ。

「エーシーアダプタって何？」

アルファベットの略語はランシュにはわからない。どんなものなのか説明すれば、多分分かるのだろうが、結衣には電源プラグとしか答えられない。

炊飯器や掃除機とは違う、あの黒い箱の中には、結衣の知らない機械部品が色々詰まっているような気がする。

結衣が答えられずにいると、蒼太が代わりに軽く答えた。

「電力の変換器だよ。交流から直流に変える」

「ああ」

結衣にはすでに意味が分からないのに、ランシュには分かったらしく、大きく頷いた。

二人は更に意味の分からない話を始めたので、結衣はキッチンに逃げ込んだ。

今日の追加ケーキは、クリームパイに決めていた。

本物のマカロンを知らないというランシュのために、卵白が欲しかったのだ。カスタードクリームを作ると卵白が余るので、クリームパイはちょうどいい。

ゆづべの内に作っておいたパイ生地を型に広げて、オーブンに入れる。その間にカスタードクリームを作った。

クリームを冷ましている間に、洗濯物を干しに二階へと上がる。ランシュもマカロンを連れて上がってきた。

結衣が一階に下りて、出来上がったクリームパイを店に運び戻ってくると、二階から蒼太とランシュが揃って下りてきた。二人でゲーム機改造計画を話している。

結衣は壁の時計に目を向けた。もうすぐ開店時間だ。

マカロンは低温で焼くので、他のケーキやクッキーに比べて時間がかかる。焼くというより水分を飛ばすという感じなのだ。

閉店後に改めて作る事にして、卵白を冷蔵庫に片付けた。

リビングではランシュと蒼太が、額を付き合わせるようにして、ACアダプタを眺め回している。ランシュにとっては、日本の機械は珍しいのだろう。

いつにも増して楽しそうなランシュの様子に目を細めて、結衣は店に向かった。

D o W h i l e (6)

閉店時間になり結衣が店を閉めてリビングに入ると、蒼太とランシュはゲームに熱中していた。

ランシュの持つゲーム機の画面を、蒼太が横から覗き込んで、あれこれ指示を出している。

「どうやらA Cアダプタの改造は、成功したらしい。」

結衣はキッチンに入り、朝冷蔵庫に入れておいた卵白でマカロンを作った。

オープンをセットしてリビングに戻ると、二人は先ほどと変わらずゲームを続けていた。先ほどこから、すでに三十分は経過している。いつから始めたのか知らないが、よく飽きないものだと感じる。結衣は側まで行って、覗き込んだ。

「何のゲームしてるの？」

ゲームに集中しているランシュの代わりに、蒼太が顔を上げて答えた。

「サッカーゲーム」

「あんだ、これを真夜中までやってたの？」

「いや、オレがやってたのはR P G。ランシュに日本語は読めないからさ、持ってきたソフトの中で出来そうなの、これしかなかったんだ」

「ふーん。でも気に入ったみたいね」

ゲーム画面を夢中で見つめるランシュに、結衣は目を細める。

マカロンが焼き上がるまでの間、結衣も蒼太と一緒に、ランシュを挟んでゲーム画面を眺めた。

当然の事ながら、ランシュはサッカー自体を知らない。画面上でオフサイドフラッグが上がったり、イエローカードが出たりするた

び、蒼太がルールの説明をしていた。

しばらくそうしていると、オーブンが焼き上がりのアラームを鳴らした。

結衣は席を立ち、

「キリがいいところで中断してね。お茶にしよう」

と言に残して、キッチンへ向かった。

焼き上がったマカロンを、小さな扇風機の前で冷ましながら、お茶を淹れる。

程よく冷えたものを皿に並べ、お茶と一緒にリビングに運ぶと、二人はゲームを終えて談笑していた。

結衣がテーブルの上に置いた皿を見て、ランシュがおもしろそうに笑う。

「本当だ。マカロンに似てるね」

「でしょ？ でも、マカロンが、似てるのよ。こっちが本物」

「そうだったね」

三人でお茶を飲みながら、マカロンをつまむ。

ランシュは「甘くておいしい」と言いながら笑った。

蒼太は口の中に張り付くのが苦手だと文句を言いながらも、一つ食べ終わると次に手を伸ばす。苦手なんじゃないかと突っ込んだら、苦手だけど張り付く感じがクセになると、屁理屈を捏ねた。

その日もロイドは帰りが遅く、三人だけで夕食を摂り、いつものように十時には、それぞれの部屋に引き上げた。

翌日、結衣は開店と同時に、蒼太とランシュを外へ追い出した。放っておいたら、また一日中ゲームばかりしているような気がしたからだ。

ランシュはＩＤカードを使えないが、実は蒼太が外国人用のＩＤカードを持っているのだ。

以前、クランベールに来た時、ロイドの友人でもある国王が特別に手配してくれた。

国民には出生届と同時に申請が行われ、生体情報と銀行口座の登録後、カードが発行される。

IDカードがなければ、クランベールでは何も出来ない。そのため外国人旅行者は、クランベールに渡航の際、IDカードを作らなければならぬのだ。

通常は渡航前に、自国でその国独自の申請手続きを踏んで発行される。いわばパスポートのようなもので、有効期限がある。国民のカードには期限はない。

他にも外国人用のカードは、口座の登録が出来ないので、自国でクランベールのレートに換算したお金を、あらかじめ入金して登録しておく必要がある。

クランベールには貨幣がないので、蒼太のカードの入金は、結衣が銀行で自分の口座から振り替えで行っている。

IDカードは身分証明書のようなもので、本来なら身分を証明できる書類がなければ、発行される事はないのだが、異世界人の結衣や蒼太には、そんなものはない。

国王が身元保証人になっているからこそ、特別に発行されているのだ。

カードがあれば、行動範囲は随分広くなる。それを見越して、二人分の入金を済ませておいた。

二人は結衣に追い立てられるようにして、街に出て行った。

蒼太がやってきて、あつという間に十日が過ぎた。この十日間で、ランシュと蒼太はかなり打ち解けた。

二人でゲームをしたり、街へ出かけたり、結衣には意味の分からない機械の話で盛り上がりたりしていた。

結衣の定休日には、三人で飛空艇を見に行ったりもした。

結衣はラフルールから出た事がないので、飛空艇に乗った事はない。ランシュも乗った事がないと言った。

時間的には余裕があったので、乗る事は可能だったが、ランシュはカードが使えないので乗れない。飛空艇に乗るには、一人ずつカードの提示が必要なのだ。

今度みんなと一緒に乗ろうと約束した。

蒼太と一緒にいるランシュは、結衣と二人きりでいた時よりも生き生きしている。

本人はそんな素振りを見せないが、結衣という時は気を遣っていたのだろう。

慰めてくれたり、色々手伝ってくれたりしていた事でも、それは窺える。

ランシュの変化をロイドに話したいのに、彼は相変わらず、連日帰りが遅い。

結衣の定休日には、夕食ばかりか、いつも作っているケーキも、食べられないからいらないと断った。

ろくに話も出来ない日が続くと、以前から抱えていた不安が、心の中に広がっていく。

ロイドがただ仕事で忙しいだけなら、こんなに不安にはならないだろう。ロイドは何か、ランシュに関係する問題を抱えている。そしてそれが解決したとは思えないからだ。

日が経つにつれて、ロイドとランシュの関係が、やけに冷めている事に気が付いた。ランシュが蒼太と仲良くなるほど、それが浮き彫りになる。

二人とも互いに、えらく素っ気ないのだ。

二人とも蒼太に対しては、笑顔で穏やかに接するのに、互いに対しては無表情だ。

別にいがみ合っているわけではないし、元々二人は友人関係ではない。とはいえ、蒼太よりも長く付き合ってきた割には、素っ気な

さ過ぎる。

二人の間に、結衣の知らない何かがあるとしか思えない。

ロイドはランシュに対して、ヤキモチを焼いていると言っていたが、そんな単純な事ではないような気がする。第一そうだとすると、ランシュの態度に説明がつかない。

訊いても、多分答えてはくれないだろう。

ランシュに関する事は、局がらみの事ばかりだ。

一緒に住んでいるのだから、できれば仲良くなってもらいたい。けれど仲違いの原因を、知る事が許されない自分には、どうしようもない。

結衣は改めて、自分の無力さを痛感した。

D o W h i l e (7)

「ロイド、起きて」

寢室の扉が開き、ユイの呼ぶ声が聞こえた。いつもは階下から大声で呼ぶのに、どういうわけか今朝は、部屋まで呼びに来たようだ。元々、甘い香りで目を覚まし、目を閉じたまま頭の中に浮かんでくる、とりとめもない事をぼんやりと追いかけながらゴロゴロしていただけた。

ロイドは身体を起こし、枕元に置いてあったメガネをかけて、入口に立つユイを見た。

「おはよう。どうした？ 部屋まで来るなんて」

壁の時計を見ると、いつもより十分は早い。

「おはよう。ちょっと話したい事があって……」

ユイは曖昧な笑みを浮かべて歩み寄り、ベッドの縁に腰掛けた。あまりゆっくり話している時間はない。今朝はソータをニッポンに連れて帰らなければならないのだ。

科学技術局の一般見学時間が来る前に、転送を終了しないと、ある意味見せ物になってしまう。それはソータもイヤだろう。

「すぐに終わる話か？」

「うーん……」

ロイドが尋ねると、ユイは困ったように言葉を濁す。

「悪いが、込み入った話なら今夜じゃダメか？ おまえ明日は休みだろう？ なるべく早く帰るから」

ユイは途端に首を振った。

「うっん。別に急いで話さなきゃならない事でもないから。忙しいなら無理しないで」

言ってる事が矛盾している。すぐにでも話したいから、わざわざ起こしに来たのではないだろうか。

ロイドはユイを抱き寄せ、頭を撫でた。

「オレに遠慮するな」

「遠慮じゃなくて、迷惑になりたくないの。だって私、あなたが忙しくて、悩んでいても、何も力になれないから」

切なげに目を伏せて俯いたユイのこめかみに、ロイドは軽く口づける。

「そんな事はない。おまえほどオレの力になってる奴はいないぞ。

オレは何度となくおまえに救われたんだ」

「何も出来なくても？」

「おまえが笑顔でオレの側にいてくれたら、それだけで充分力になる」

「いるだけでいいなんて、そんなのイヤ」

ユイはプクツと頬を膨らませて顔を背けた。ロイドはその頬に手を添えて、背けた顔をこちらに向かせる。

「そうだな。もっとわがまま言っただけで甘えてくれたら、更に嬉しいけどな」

「え？ わがままが嬉しいの？」

「おまえ、昔からオレに迷惑かけないようにって気を遣いすぎた。もっと貪欲にオレを欲しがれ」

「……え……」

ユイは苦笑に顔を引きつらせた。

「なんか、あなたが言うつとエロく聞こえるんだけど……」

ロイドはニヤリと笑い、ユイを抱きしめる。

「もちろん、そっちの要求も大歓迎だ。やっぱり今夜は早く帰るぞ」

「うん、嬉しい。でも本当に無理しないでね」

「言った端から遠慮するな」

ロイドが額を叩くと、ユイは舌を出してクスリと笑った。

「ごめん。じゃあ、わがまま言うわ。早く帰ってきてね」

「ああ」

ユイのわがままに目を細め、ロイドは静かに口づけた。

ロイドが蒼太を連れて仕事に出かけ、またランシュと二人きりの昼間が戻って来た。

マカロンが掃除をしてくれるようになったので、結衣は今までもり多くのお菓子が作れるようになり、一日に受け付ける予約数も二つまでに増やした。

ランシュも掃除をしなくてよくなった。これまでは蒼太の相手をしてもらっていたが、今日からはヒマになる。お菓子作りを手伝うよりは、機械いじりをしている方が楽しそうなので、ロイドに何かやる事がないか訊いておいた。

とりあえず今日のところは何もないので、ランシュには店の陳列ケースの拭き掃除をお願いした。

久しぶりにロイドが早く帰ってくると思うと、なんだかウキウキそわそわしてしまう。

それが顔に出ていたらしく、ランシュが笑いながら指摘した。

「なんか楽しそうだね、ユイ」

「え？ そう？ そんな風に見える？」

とぼけてみせると、ランシュが吹き出した。

「だって、ずっと顔がニヤけてるもん。バレバレだよ。何かいい事あったの？」

バレバレなら仕方ない。益々笑われるかもしれないが、結衣はおずおずと白状した。

「些細な事なだけだね、今夜はロイドが早く帰ってくるの」

「ふーん。そうなんだ。久しぶりだもんね、先生が早く帰ってくるの」

「うん」

結衣は笑顔で頷く。するとランシュは、結衣を見つめて淡い笑みを浮かべた。

「たったそれだけの事で、ユイはウキウキするほど嬉しいんだね。ソータが言った通り、確かにラブラブ夫婦だよ。オレとしては、ちよっと妬けるな」

「え？」

結衣が不思議そうに見つめ返すと、ランシュはごまかすように笑った。

「オレにはそこまで想ってくれる人いないしね」

「年上の彼女に告白したら？」

結衣の提言に、ランシュは再び意味ありげな笑みを浮かべる。

「本当にそんな事していいの？」

「全然大丈夫よ！　ランシュは見た目もカッコイイし、優しくて親切だし、何より笑顔が素敵なもの」

拳を握って力説する結衣に、ランシュはプツと吹き出した。

「それ、見た目がカッコイイ以外は、全部ユイの事だよ。おばあちゃんかユイの事そう言ってたんだ。」笑顔が素敵な、親切で優しいお嬢さん”だって”

「そんな事、言ってたの？」

特に褒められるような事は何もしていないので、なんとなく照れくさい。

ランシュに尋ねると、ベルが店に来た時、入口の石段を上げるのに必ず手を貸していたからだという。

店は元々玄関だった。あまり手をかけて改装するとお金もかかるので、元々あった石段はそのままにしてあった。

けれどベルがやって来て、その時初めて、お客様の事を考えて改装するべきだったと後悔した。わずか数段の石段も、杖をついたお年寄りには、結構な負担になるのだ。

「最初から毎回、わざわざ店の奥から出てきて手を貸してくれるって、おばあちゃん感心してたよ」

「そんな……。大変そうだったから、当たり前の事だもの」

「当たり前の事でも出来ない人が多いんだから、ちゃんと出来るユ

イはエライよ。オレだったら気になっても見てるだけかもしれない」
「そんな事ないでしょう？ ランシュは優しいもの」
「ありがとう」

ランシュは、はにかむように笑った。

じりじりとゆっくり、時間が過ぎていく。ロイドの帰りを、いかに待ちわびているかを実感する。

ようやく閉店時間になり、結衣は店を閉めて家の中に戻った。

リビングに入った途端、電話が鳴り響く。慌てて駆け寄り、液晶画面に表示された相手先を見てギクリとした。

科学技術局――。

一瞬にして、嫌な予感が胸の中を支配する。結衣はためらいがちに応答ボタンを押した。

画面に映し出されたロイドが、いきなり頭を下げる。

「すまない、ユイ。早く帰れなくなった」

急な来客で接待が入り、帰りはいつになるか分からないという。申し訳なさそうに何度も謝るロイドの少し後ろに、スーツ姿の凛とした金髪の美しい女性が立っているのが見えた。

無表情にロイドの背中を見つめる、理知的なブルーの瞳。彼女がおそらく副局長なのだろう。

ロイドの謝罪を上空に聞きながら、結衣の胸の中にモヤモヤとした感情がこみ上げてくる。

結衣は微笑むと、自分でも驚くほど冷静な声で、ロイドに答えた。
「大丈夫よ。お仕事なんだから、頑張ってね」

「ユイ……」

ロイドは一瞬呆然としたように見つめた後、振り返って後ろの女性に怒鳴った。

「おい、フェティ！ オレは明日休むぞ！」

女性は眉をつり上げて、怒鳴り返す。

「何、勝手な事を言ってるんですか！」

「オレは一月近く休んでないんだ！ 邪魔するなら労働基準局に訴えるぞ！」

「私だって、あなたの補佐で休んでいません！」

ロイドの補佐という事は、彼女はやはり副局長なのだ。

二人の怒鳴り合いが、自分とロイドの距離を、引き離していくように感じた。別に仲良くしているわけでもないのに、これ以上見ていたくない。

そう思った結衣は、思わず大きな声でロイドを制した。

「ロイド！ 本当に気にしないでいいから！ 局長なのに、迷惑かけちゃダメよ」

二人はピタリと怒鳴り合いを止め、同時にこちらを向く。

副局長と思われる女性が、片手でロイドを脇に押しやり、電話の前にやってきた。

画面の前で彼女は、先ほどとは打って変わって、柔和な笑みを浮かべ結衣を見つめる。

「初めまして。副局長のフェティークリネと申します」

「おまえ、何を勝手に……！」

文句を言いながら肩を掴んだロイドの手を、強引に振りほどき、

副局長は言葉を続けた。

「本日は急な用向きで、ご予定を狂わせてしまつて申し訳ありません」

ロイドが最も信頼し、片腕となっただけあつて、その堂々とした様子に、結衣は少したじろぐ。

「いえ、特にどうしてもという用事があつたわけじゃありませんし、いつもロイドが迷惑をかけてすみません。どうかよろしく願います」

結衣がそう言うと、副局長はにっこり微笑んだ。

「いえ、こちらこそ、目の前で旦那様を怒鳴りつけて申し訳ありま

せんでした。奥様が寛大かつ聡明な方で助かります。それでは」

「あつ！　こらっ！」

ロイドが再び副局長の肩を掴んだ時、電話の画面は唐突に消えた。結衣は大きいため息をつきながら、力が抜けたようにソファに座った。テーブルの上の小鳥を取り、電源を入れて頭を撫で始める。

あの二人は、電話を切った後も、しばらく怒鳴り合っているような気がする。

「先生、早く帰れなくなっただね」

隣に座っていたランシュが、心配そうに声をかけてきた。

「うん……」

元々結衣のわがままで、忙しいのに無理して、早く帰ろうとしていたのだ。

予定が狂う事はあらかじめ考えておくべきだったのに、朝から手放しで浮かれていた分、奈落の底にたたき落とされたように落胆は大きい。

初めて目にした、職場でのロイドと副局長の様子が、それに拍車をかける。

自分は何も出来ないのに、彼女は側にいて、常にロイドを支えている。そこに恋愛感情がなくても、たまらなく彼女がうらやましい。こみ上げてくる嫌な感情に胸が詰まりそうになり、必死に堪えていても涙が溢れてきた。

俯いて小鳥を撫でる手の甲に、ポタリと一滴落ちた時、横からランシュにフワリと抱きしめられた。

思わず横を向くと、目の前で切なげに見つめるランシュの瞳と、視線がぶつかった。

「ユイが泣いているの耐えられない。オレ、ユイが好きだから」

「え？」

思いも寄らないランシュの言葉に、涙も、こみ上げていた感情も、一気に停止する。

好きってどういう意味？　ただそれだけの事が聞き返せず、結衣

は固まったまま、ランシユを見つめる事しかできなかった。

D o W h i l e (8)

まるで時が止まったかのように、二人して黙ったまま見つめ合った。

リビングの大きな窓から差し込む、午後の柔らかな日射しが、ランシュの髪をキラキラと眩しく縁取る。まるで天使の後光のようだと、全く関係ない事を結衣は思っていた。

ランシュは結衣が、ロイドの妻だと知っている。好きだと言っても、深い意味はないのかもしれない。

けれどロイドは、ヤキモチを焼いていた。もしかしてロイドは、ランシュの気持ちを知っていたのだろうか。だからランシュに冷たい態度を取り、気を許すなと忠告したのだろうか。

憶測では結論が出ない。ランシュに直接、どういう意味なのか確かめなければ。

「あ、あの……」

結衣が意を決して口を開くと、ランシュはそれを遮るように更に抱き寄せ、耳元で囁いた。

「ずっと好きだったんだ。ユイが結婚してるなんて知らなかったから」

どうやら、軽い意味ではないらしい。

確かにランシュが結衣の結婚を知ったのは、店先でロイドと鉢合わせした、あの日だ。

ベルが亡くなって居場所のなくなったランシュに、結衣はしばらく、うちにいたらどうかと提案した。

最初ランシュは酷くうつらえた。今思えば、結衣を未婚だと思っていたのなら当然だろう。

結衣の方は、単に遠慮しているものと思っていた。

「主人に相談してみないと分からないけど、多分大丈夫よ。あの、面倒見のいい人だから」

結衣がそう告げると、一気にトーンダウンしたランシュの、苦笑にも似た複雑な表情が思い出される。

ランシュが好きな年上の女性とは、自分の事だったのだ。

ランシュは結衣を抱きしめたまま、言葉を続ける。

「おばあちゃんからユイのことを聞いて、会ってみたくなったんだ。ユイはいつも笑顔で迎えてくれて、おばあちゃんの事をちゃんと覚えてて心配してくれたし、おばあちゃんの言った通りの人だった。通ってる内にどんどん好きになってた。おばあちゃんが亡くなった後、家を出てしばらく街をうろついていたけど、ユイに会いたくなつて、気が付いたら、ここに来てた」

どんな気持ちだったんだろう。自分の想いを寄せる人が、すでに他人のものだと知った時。

いつもロイドにニブイと言われていたが、今までそれを、これほど残酷な事だと思った事はなかった。

ランシュの気持ちに気付かず、軽い気持ちで彼を好きだと言ったり、目の前でロイドとキスをしたり、ロイドの事で浮かれたり、知らず知らずに傷つけていた。

行く当てのないランシュは、見ているのが辛くても、出て行く事ができないのに。

そしてまた、彼の気持ちを知った上で、もう一度傷つけなければならぬ。ランシュの想いに応える事はできないから。

「ランシュ……」

結衣がランシュの胸に手を当て、身体を押し戻そうとするが、ランシュはそれを許さなかった。

「ずっと黙っているつもりだった。話したらユイを困らせるし、ユイが幸せに笑っていてくれるなら、それでいいと思ってた。だけど、こんな風に泣いているとたまらなくて……」

抱きしめるランシュの腕に、一層力が加わる。

「オレじゃダメ？」

ドキリとして、身体がピクリと震えた。ランシュにも結衣が受け入れられない事は分かっているだろう。ここまで追い詰めたのは、自分の責任だ。

結衣は静かに口を開いた。

「ごめんね、ランシュ。私、全然気付いてなかった。ランシュの気持ちも知らずに、自分の事に手一杯で、ランシュの優しさに甘えて傷つけてたのね。こんな自分勝手な私を、好きになってくれてありがとう。だけど私、ロイドじゃなきゃダメなの」

ランシュの肩が一瞬、ピクリと震えた。耳元で消え入るような、か細い声がつぶやく。

「どうして……」

次の瞬間、ランシュは結衣をソファに押し倒した。

小さな悲鳴を上げて、結衣はソファに背中を付けた。慌てて起き上がろうとするが、ランシュが両肩を掴んでソファに押さえつけ、身体が起こせない。

ランシュの腕を掴んで外そうとしたが、ビクともしなかった。

ランシュは結衣を見下ろしながら、憤りをぶつけた。

「どうして?! 先生は冷酷な人だよ。オレは二年前、寿命が尽きかけていた。それを知っていながら、オレが残りの命全てをかけて完成させようとしていた開発を途中で奪った。オレを免職にしたのは、あの人なんだ!」

ランシュが命をかけて完成させようとしていた開発。それは以前少し聞いた、究極のヒューマノイド・ロボットだろう。

自分で考え行動し、感情を持ったロボット。そして絶対命令がインプットされていない。

違法となるそれを、科学技術局の局長であるロイドが、許可するわけではない。

ランシュは止められても、開発を止めなかったのだろう。なにしろ命が尽きる前に、夢を実現したかったのだから。

ロイドはランシュを止めるために、免職にしたのだ。

「多分オレじゃなくて、ユイだったとしても、先生は同じ事をするよ」

冷たい瞳で見つめるランシュに、結衣は少し笑って頷いた。

「うん、知ってる。ロイドはそういう人よ。頑固で職務に忠実で、絶対誰にも言わないからって言うても、私には局の事を一切話さないの。私だけ例外にはならないと思う。だから私は、ロイドが局の事で悩んでいても、何の力にもなれない。それが悔しくて、時々落ち込んだり、泣いちゃったりするけど、それはロイドのせいじゃないし、それでもロイドを愛しているの」

ランシュは辛そうに顔を歪めて、絞り出すように言う。

「泣かされてもいいなんて、そんなの分らないよ」

そして結衣の上に覆い被さってきた。

「オレを見てよ、ユイ」

「ダメ！ ランシュ、やめて！」

近付いて来るランシュの顔から、思い切り顔を背け、結衣がギョツと目を閉じた時、ランシュが手を離して声を上げた。

「いたっ！」

結衣が目を開き身体を起こすと、目の前でランシュが頭を抱えるようにしてうずくまっていた。その後頭部で小鳥が羽ばたきながら、ランシュをつついている。

「やめて、ロイド！ ランシュを傷つけないで！」

結衣の命令に、小鳥はピツと返事をして攻撃を止めると、机の上に舞い降りた。

「大丈夫？ ランシュ」

「うん……」

ランシュは小鳥がつついた頭を少し撫でて、その手を眺めた。指先にポツンと赤いものが付着している。

「血が出てるの？ ごめんね。手当てしなきゃ」

結衣が慌ててランシュの頭に手を伸ばすと、ランシュは身を退い

て力なく笑った。

「平気だよ、このくらい。自業自得だし。オレの方こそ、ごめんね。最初からユイがオレに振り向く事はないって、わかってたのに。オレがユイを泣かせるところだった。本当にごめん。全部忘れて」

そう言ってランシュは席を立った。

「少し頭を冷やして、今後の事を考えるよ」

「今後って？」

結衣も立ち上がって尋ねる。

ランシュは結衣の前を素通りして、リビングを横切りながら答えた。

「だって、オレと一緒に住むのイヤでしょ？」

「出て行くの？ カードが使えないのに、困るでしょう？」

結衣は咄嗟に、ランシュの腕を掴んだ。立ち止まったランシュは、皮肉な笑みを浮かべる。

「カードがなくてもオレは簡単に死なないんだ。さっきので分かったんじゃない？ オレには元々、人を好きになる資格なんてないんだよ」

ランシュは結衣の腕をほどき、先ほど血のついた手の平を見せて笑った。

「よく出来てるでしょ？」

言葉もなく見つめる結衣に背を向けて、ランシュはリビングを出て行った。

D o W h i l e (9)

ハツとして目覚めると、結衣はベッドの上にいた。隣ではロイドが、結衣を抱えるようにして静かに寝息を立てている。

外はまだ暗い。

結衣はロイドの腕の中から這い出して、枕元の時計を取った。時刻は三時半を少し回っている。いつも起きる時間よりは、少し早い。ゆうべロイドの帰りを待って、リビングで本を読みながら、ウトウトしたのは覚えていいる。そのまま眠ってしまったのを、ロイドが運んでくれたのだろう。

ランシュはあれから、夕食もいらないうって、部屋にこもったまま一度も出て来ない。

結衣がイヤだろうからと、ランシュは家を出ていくつもりでいるらしい。

結衣自身はイヤではない。想いに応える事は出来ないが、ランシュの事は弟や友達のような意味で好きだ。こんな風に気まずいまま、別れたくはない。

なにより、身を隠さなければならぬランシュが、行く当てもない上に、カードも使えない状態で出て行って、この先どうするつもりなのか、それが心配だった。

ふと不安に駆られて、結衣はベッドを抜け出した。

自分やロイドが寝静まった後、ランシュがコッソリ家を出ていったのではないかと気になったのだ。

結衣は寝室を出ると、足音を忍ばせて、ランシュの部屋へ向かった。

そつと扉を開けて、中の様子を窺う。ベッドの上にランシュの姿を認めて、結衣はホツと息をついた。再びそつと扉を閉じる。

結衣はランシュがずっといてくれても一向にかまわないが、ランシュ本人は気持ちの整理がつくまでは辛いかもしれない。

ロイドと仲違いしている理由も分かった。やはり一刻も早く、ロイドに相談するべきだろう。

ランシュの想いは伏せておくとして、出て行くにしても、ロイドとの和解や、この先の生活について、なんの糸口も見えないままで、彼が出て行くのは心配でならない。

たとえランシュが簡単に死ぬ事がないとしても、彼には結衣と同じ心があるのだから。

少なくとも結衣にはそう見える。

人は、食べて、呼吸して、それだけで生きているわけではないから。

今から二度寝したら、絶対寝過ごしてしまう。結衣は自室に入り、身支度を整えて階下へ下りた。

いつもより早く起きてしまったのに、今日は休みなので店に並べるケーキを作らなくていい。

味噌汁に入れる野菜を花の形に切ってみたり、余計な手間をかけながら、ゆっくりと朝食の支度をしていると、空が白み始めた。

すっかり夜も明けた頃、結衣がのんびりと朝食の支度をしているキッチンに、ランシュがやってきた。

いつもと変わりなく挨拶をして、手伝う事はないかと尋ねる。

「休みなのに早く目が覚めちゃって、もう終わったの。座ってて。お茶淹れるから」

結衣がそう言うと、ランシュはクスリと笑った。

「ユイは変わらないね。オレが飲んだり食べたりする必要ないって分かってるのに、お茶淹れてくれるんだ。ゆうべも夕食の心配して、ケガの手当をしようとするし。もっと怖がったり戸惑ったり

するかと思っただ」

「だってランシュは変わってないもの。元々怖くないのに、怖がりようがないわよ」

「ふーん」

ランシュは少し間を置いて、意地悪な笑みを浮かべた。

「でもオレの能力の限界値を知ったら、怖くなるかもしれないよ。分かってるだろうけど、オレには絶対命令がないしね」

「無駄よ。私を怖がらせて、出て行っって言わせようとしてるでしょ。絶対命令なんかなくなっただって、ランシュが人を傷つける事はないって知ってるもの」

「どうして、そう言いきれなの？」

「ランシュには心があるから」

結衣がキツパリと言い切ると、ランシュは一瞬目を見開き、そして悲しそうな笑顔を見せた。

「あるのかな。オレにもよく分からない」

ランシュは今の自分の心や気持ちだが、本当に自分のものなのか分からないと漏らした事があった。

かつてロイドが言っていた事を思い出す。

『こちらのアクションに対して、いくら表情豊かに反応を返しても、それは内蔵プログラムと人工知能が計算によって導き出した結果でしかない』

ロイドは現存するヒューマノイド・ロボットには、感情がないと言っていた。

今のランシュの身体は、本人も認めている通り、彼が設計製造したヒューマノイド・ロボットなのだろう。

おそらく過去の記憶は、人だった頃のランシュのものだ。その記

憶を元に、内蔵プログラムと人工知能が、今のランシュの感情を作り出している。理屈はそうだったところだろう。

結衣は人だった頃のランシュを知らない。

けれど今のランシュの複雑な表情、感情の動き、結衣を好きだと言った恋心、これが全て作り物だとは、どうしても思えない。

人だろうとロボットだろうと、ランシュはランシュなのだ。

今のランシュに感情があるなら、過去の記憶にとらわれることなく、ロイドとの和解の道を見いだす事が、きっと出来るはず。

結衣はランシュの手を取り、両手で包んだ。

「お願い、ランシュ。勝手に出て行ったりしないで。私と一緒に住むのは、あなたの方が辛いかもしれないけど、ロイドとちゃんと話し合ってみて。私は局の事には口出しできないから、ランシュが自分で話して。二人で考えれば、あなたが身を隠さなくてもいい方法が見つかるかもしれないし。今のまま出て行かれたら心配なの。私の自分勝手なわがままだとは思うけど」

自分の手を握る結衣の手を見つめて、ランシュがためらいがちに小さく頷いた。

「……ユイがイヤじゃないなら、出て行かないよ」

ランシュの言葉を聞いて、自然に笑顔がこぼれる。そんな結衣を見て、ランシュもつられたように少し笑った。

「じゃあ、お茶淹れるから座ってて」

「うん。ありがとう」

そう言ってランシュは、キッチンを出て行った。

湧いたばかりの熱い湯で、お茶を淹れカップに注ぐ。残りをポットに入れて盆に乗せると、結衣はキッチンを出た。

ランシュは食卓について待っていた。

結衣がランシュの前にカップを置き、テーブルの上にポットを置こうとした時、ロイドが部屋に入ってきた。

いつもは呼ぶまで、二階から下りて来ないのに珍しい。

ロイドは部屋に入るなり、結衣に詫びた。

「ユイ、ゆうべは悪かった」

一瞬何の事か分からず、結衣はキョトンとする。しかしすぐに思い出した。

昨日はいろんな事がありすぎてすっかり忘れていたが、ロイドが早く帰ると言ったのに帰れなかったのだ。それを謝っているのだろう。結衣は笑って答える。

「もう。仕事なんだから気にしないでって言ったじゃない。今日早く帰ってきたら帳消しにするわ。それでいいでしょう?」

「ああ。そうしよう」

ロイドは笑って頷いた。

「すぐごはんにするから、ちょっと待ってて。少し早いけど、ランシュも食べるでしょ?」

「うん」

ポットをテーブルに置いて、結衣はキッチンへ向かおうとした。

その時、結衣の指先がポットの注ぎ口に引っかかった。ポットは倒れ、中に入った熱いお茶が、テーブルの上に流れる。

「ユイ、危ない!」

ランシュが手を伸ばし、結衣を突き飛ばした。その腕の上に、テーブルから流れ落ちた、熱いお茶がかかる。

「あつつつ……!」

ランシュは腕を押さえて、背中を丸める。

「ランシュ!」

結衣とロイドは同時に叫んだ。

お茶をかぶったランシュの手が、みるみる赤くなる。

俯いて痛そうに歪められた、ランシュの表情。

これが本当にロボット?

結衣が動けないでいると、ロイドがランシュに駆け寄った。

「すぐに水で冷やせ」

抱きかかえるようにしてランシュを立たせると、ロイドは結衣に早口で尋ねる。

「おまえは？」

呆然とランシュを見つめていた結衣は、ハッとして我に返った。

「わ、私は大丈夫」

「そうか」

ロイドはランシュを連れて、小走りにキッチンへ入っていった。

水道の水が勢いよく流れる音を聞きながら、初めて気付いた事実
に、結衣は再び呆然と立ち尽くす。

ロイドは知らない——？

先ほどの焦りようからして、ロイドはランシュがロボットだとい
う事を知らないようだ。

最初ランシュを紹介した時、ロイドはランシュが身を隠さなけれ
ばならないと言った。その時理由は語らなかつたけれど、結衣はラ
ンシュと接している内に気付いた。

ランシュが違法なロボットだから、なのだと思った。

ロイドが知らないのだとすると、身を隠す理由は別にある。それ
が何かは分からないけれど、科学技術局から身を隠しているのだろ
う。

もしもロイドが知らないまま、ランシュが科学技術局に戻る事に
なったら、ランシュが違法なロボットである事を、科学技術局に知
られてしまうかもしれない。

そうなれば、違法な機械であるランシュの身体は、処分されてし
まう恐れがある。

ランシュの行く末を二人で話し合ってもらうには、ランシュが
ロボットである事をロイドは知っている必要がある。

「ランシュはロボットだ」と直接言えれば楽だが、それはできない。
ランシュが結衣に研究内容をしゃべった事がロイドに知られると、
二人の確執が益々深まりかねないからだ。

なんとかして、それとなくロイドに知らせなければ。

何かいい方法はないものかと焦りながら、結衣は意味もなく部屋
の中をキョロキョロ眺め回す。

ふとりビングのテーブルに置かれた、小鳥に目が止まった。昨日の事を思い出し、名案を思い付いた。ロイドなら気付いてくれるはずだ。

結衣は小鳥に歩み寄り、手に取った。

「ロイド、ごめんね。後でちょっとだけ協力して」

小鳥に話しかけ再びテーブルに戻した時、キッチンからロイドが呼んだ。

「ユイ、薬と包帯を持ってきてくれ」

ランシュの腕を取りタオルで押さえながら、ロイドがリビングにやってきた。結衣は言われた通り、戸棚から救急箱を取り出してロイドに渡す。

ランシュをソファに座らせ、ロイドもその横に座った。ロイドは濡れたシャツの袖をはさみで切り裂いて、薬を塗ったガーゼを赤く染めたランシュの腕に乗せる。

「痛むか？」

「少し……」

包帯を巻きながら、ロイドはいたわるように語りかける。結衣は側に立って、その様子を黙って見つめていた。

やはりロイドは、ランシュの正体を疑ってもない。

「おまえ、病院には行けないんだろう？ 口の堅い医者呼んでやるから、後でちゃんと診てもらえ」

「分かりました」

ロイドが包帯を巻き終わると、ランシュは立ち上がった。

「着替えてきます」

そう言ってランシュは、リビングを出て行った。

ロイドはホッと息をつき、結衣の方へ顔を向ける。

「ユイ、ローザンに連絡しておくから、ランシュを診てもらってくれ」

「うん」

ランシュがいない今の内に、ロイドに伝えなければ。

結衣はテーブルの上の小鳥を手に取り、ロイドに差し出した。

「ロイド、時間がある時でいいから、この子をみてあげて」

ロイドは小鳥を受け取り、不思議そうに尋ねる。

「どうかしたのか？」

「うん。昨日ね、私が転びそうになった時、ランシュが支えてくれたんだけど、その時ちよつと腕を強く掴まれて、私思わず痛いって言っちゃったの。そうしたら、この子が勘違いしたのか、ランシュをつついたのよ」

「何？」

ロイドの目が、驚愕に見開かれた。どうやら気付いたようだ。

「つついた……ランシュを攻撃したのか？」

もう一押ししておこう。

「うん。人間を攻撃しちゃいけないのよね？ だから、どこか調子が悪いのかと思って」

ロイドは何も言わずに立ち上がると、小鳥を結衣に押しつけるようにして、早足でリビングを出て行った。

小鳥を目の前まで掲げて、結衣は頭を下げる。

「ごめんね、ロイド。あなたはどこもおかしくないのに」

電源の入っていない小鳥は、無機質な瞳で、じつと結衣を見つめていた。

リビングを出たロイドは急いで二階へ上がり、真っ直ぐランシュの部屋へ向かう。

小鳥の絶対命令が狂う事はない。絶対命令はその名の通り絶対だ。センサ類が故障して、相手が人間かどうか判断できない時は攻撃しない。攻撃行動は、相手が人間ではないと断定できる場合にのみ有効なのだ。

小鳥がランシュを攻撃したという事は、ランシュは人間ではない。

ロイドはノックも忘れ、部屋の扉をいきなり開いた。
濡れた服を脱いで上半身裸のランシュが、驚いたように振り向いた。

ロイドの様子に何かを察したのか、口元に薄い笑みを浮かべ、ゆつくりと身体をこちらに向ける。その華奢な身体を見つめて、ロイドは口を開いた。

「ランシュ、おまえ、ロボットなのか？」

ランシュは目を細め、黙ったまま腕に巻かれた包帯を、スルスルとほどいていく。包帯がハラリと床に落ち、ガーゼをはぎ取ると、露わになった無傷の白い腕をロイドに見せつけた。

嘲るような笑みを湛えて、ランシュが言う。

「気付くのに随分かかりましたね。先生」

（第2話 完）

Resume Next (1)

科学技術局の局長室でロイドは、朝から何度目か分からない、大きなため息を吐き出した。

机に両肘をついて、項垂れた頭を両手で支えながら、腕の間に置かれた書類を見るともなしにぼんやりと眺め続ける。

突然目の前に書類の束が差し出され、ギクリとして顔を上げると、冷ややかに見下ろす副局長フェティと目が合った。

彼女は表情を崩すことなく、書類を机の上に置いた。

「先ほどから何度も声はかけました。今日上がってきた申請書類です」

「ああ、すまない」

ロイドは気のない返事をして、書類を受け取る。ペンを取り書類に目を通そうとして、ふと顔を上げると、てっきり立ち去ったものと思ったフェティが、まだ見下ろしていた。

「どうした？」

「いえ。体調を崩していらっしやるのかと思って」

「いや、大丈夫だ」

「顔色が優れません。あなたに倒れられると皆が困ります。急ぎの仕事は、ほぼ片がついていますので、今日は早めに上がってください」

いつも今日の仕事は今日中に片付けるとうるさいフェティが、早く帰れというのが珍しくて、ロイドは思わず彼女を見つめた。

いや、元々フェティは、いざという時は、いつもロイドを気遣ってくれる。

ランシュが違法なロボットを作ろうとしていた時もそうだ。

止めようとしないうランシュを、ロイドは最後まで説得に当たろうとしていた。それを知ったフェティは、ロイドの立場まで危うくな

ると判断し、ランシュの免職を促したのだ。

設計図は完成しようとしていた。それだけで、充分違法なのだ。説得しようとしていたとしても、他の者に知られれば、知っていながら見逃した事になってしまっただろう。

フェティが早期に判断してくれたおかげで、ロイドは職を追われる事を免れた。

そのせいでフェティは、ロイド以上にランシュの恨みを買っ事になったのだが――。

ロイドはフェティを見上げて、少し笑みを浮かべた。

「わかった。そうする。すまない、フェティ。恩に着る」

「そう思われるのでしたら、体調管理には気をつけてください」

涼しい顔でそう告げて、フェティは局長室を出て行った。

書類に視線を落としたものの、今朝のランシュとのやり取りを思い出し、再び気が重くなる。

ロイドの気が塞いでいるのは、体調不良のせいではない。確かに疲れは溜まっているが、倒れるほどのものでもない。

これから自分が下さなければならぬ決断を思うと、気が重くなるのだ。

今朝、ランシュがロボットである事が発覚した。

熱湯をかぶって火傷を負ったはずのランシュの腕は、何事もなかったかのように、元通りになっていた。

「おまえは、何なんだ？」

すっかり動揺して尋ねるロイドに、ランシュは薄い笑みを浮かべて、静かに答える。

「ランシュ＝バージュです。正確には、ランシュ＝バージュの記憶をコピーした、ヒューマノイド・ロボットです」

その言葉に、ロイドは目の前が真っ暗になったような気がした。

このロボットは、ランシュ本人が設計製造したものだろう。そして自分の記憶をコピーしたのだ。

人の記憶を他の人やロボットなどに、コピーする事は法律で禁じられている。

記憶には本人しか知り得ない情報が多く含まれる。それを他人が知っているのは、個人の特定が出来なくなるからだ。

ロイドは思わず、ランシュの両肩を強く掴んだ。

「それは違法だって、分かっているだろう！」

「乱暴しないでください」

ランシュはロイドの腕を掴んで肩から外し、ゆっくりと捻り上げた。

「ツツ！」

あまりの力に、ロイドが声を漏らすと、ランシュは腕を掴んだ手を離れた。そして片手で、ロイドの首を素早く掴む。

「オレにはダメージセンサが搭載されているんです。あなたと同じように、強く掴まれれば痛いし、お湯をかぶれば熱いんですよ。傷つけば血も出ます。だって、ケガしても痛くも痒くもないし血も出ない、なんて人間はいませんよね」

首を掴んだランシュの手が、じわじわと締め付けてくる。両手でその手を外そうとするが、以前のランシュからは考えられないほどの力でビクともしない。

「オレの身体は人間そっくりに作られてるんですよ。当然ながら絶対命令なんてインプットされていません。だから気をつけてください。痛い事されたら、うつかりあなたを傷つけてしまうかもしれませんよ。今のオレは二年前と違って、あなたの首を片手でへし折る事だって出来るんですから」

息が苦しくなり、ロイドは顔を歪める。その様子を見て、ランシュはフツと目を細め、手を離れた。

ロイドは首を押さえ、激しく咳き込む。しばらく咳き込んだ後、ロイドはランシュに尋ねた。

「おまえ、まさか…… オレの家に来るために、邪魔になったベル・グラীবを手にかけてたんじゃないだろうな？」

ランシュが家にやってきた事と、ベル・グラীবが亡くなった事が、あまりにタイミングよすぎて、ふと不安に駆られた。

ランシュは薄笑いを浮かべたまま、含みのある言い方をする。

「さあ、どうでしょう？ 非力な老人の息の根を止める事くらい、オレにとっては造作もない事ですけどね」

真偽のほどは定かではない。ランシュの表情から、それは読み取れない。

ロボットのランシュは、相手に悟られないように感情を殺す事など、それこそ造作もない事だろう。

逆にこちらの心の動揺は、丸見えに違いない。

ダメージセンサの他にも、高性能なセンサ類を搭載しているであろうランシュは、心拍数、呼吸数、体温、発汗、瞳の動きなどから相手の心理状態がある程度把握できる。

おそらく聴覚、視覚も人並み以上だ。それでこの二年間、誰にも見つからず、身を隠す事が出来たのだろう。

ロイドはひと息ついて、もう一つ気になっていた事を尋ねた。

「ランシュはどうなった？」

「肉体の事ですか？ それなら二年前に滅びました。もっともオレには死んだという意識はありませんけどね。目が覚めたら、身体がロボットになって、数ヶ月経ってたって感覚です」

「おまえはランシュじゃない。ランシュの亡霊だ」

ロイドが冷たく言い放つと、ランシュは少し悲しそうに笑った。「命は肉体に宿るものだと、あなたは考えているんですね。でもオレは、心に宿るものだと思います」

そう言ってランシュは、胸の上で両手を重ね、目を伏せた。

「オレの心はここにあるって、ユイが教えてくれました。だからオレの命もここにありません。オレは身体を乗り継いで、生き続けているんです」

幸せそうに微笑むランシュを見ながら、ロイドは最後に耳にした彼の言葉を思い出す。

—— 先生…… オレ、死にたくない……死ぬのが怖いよ…… ——

その思いが、このロボットを作り上げた。

ランシュが二つの法を犯してまでも、このロボットに執着したのは、科学者としての純粋な探求心ではなく、ましてやロイドに対する反抗心でもない。

ただ単純に、命を長らえたかっただけ。

皮肉な事にロボットのランシュは、無表情でどこか冷めていた人間のランシュより、感情も豊かでよっぽど人間らしい。

ランシュがその才能を、存分に発揮する姿を見てみたいと思っていた。それを彼の死後、こんな形で目にする事になるうとは――。

ロイドは力が抜けたように、床にひざをついて頭垂れた。目頭が熱くなり、メガネを外して手で覆う。

頭の上から、ランシュが静かに問いかけた。

「どうして泣くんですか？ オレは生きているのに」

ロイドは力なく反論する。

「おまえは、ランシュじゃない……」

「オレはランシュです」

このロボットは数ヶ月間の記憶を、受け継いでいないと言った。だから、知らない。

死に直面したランシュの、激しい恐怖と焦りを。

ランシュにそっくりなその顔で、幸せそうに微笑んだロボットが、哀れでならなかった。

Resume Next (2)

大した火傷じゃなかったからローザンは呼ばないと言い残して、ロイドは仕事に向かった。

おそらくランシュの腕は、実際に損傷してはいないのだろう。ロイドはランシュがロボットである事を確認したのだ。

二人でいったい、どんな話をしたのか、結衣には分からない。けれど二人の関係が、あまりいい方向に進んだわけではない事は、なんとなく分かった。

服を着替えてリビングに戻ってきたランシュが、少し塞いでいるからだ。

「ランシュ、火傷は本当に大丈夫なの？」

ソファに座ってぼんやりするランシュの隣に腰掛けて、結衣は尋ねる。ランシュはこちらを向いて、クスリと笑った。

「相変わらず心配性だね、ユイは。全然平気だよ。二百度くらいは耐えられるから、この皮膚」

「だって、すごく熱そうだったし」

「うん。熱かったよ。センサがついてるから感じるんだ」

「そうなの？」

「だって人間なら、そんなの当たり前でしょ？ ロボットだってバレたらやばいしね。ほら、オレって違法だから」

「そうね……」

思っていた以上にランシュの身体は、見た目だけでなく中身も精巧に作られているらしい。

これでは、ランシュと少し距離を置いていたロイドが、気付かないのも無理はない。

再びぼんやりと中空を見つめたランシュに、結衣は単刀直入に問

いかけた。

「ねえ、ロイドと何かあったの？」

ランシュは少し悲しそうに苦笑して答えた。

「……先生は、オレをランシュだとは認めてくれなかった」

「え……」

「オレはあくまで、ランシュの記憶を持つロボットに過ぎなくて、ランシュの命は二年前に消えたんだって」

結衣の知らない、人間だった頃のランシュを、ロイドは知っている。そんなに今と違っていろいろのだろうか。それにしては、今まで気付かなかったのも不思議だ。

「そんなに今のランシュは、昔と違うの？」

「違うなと思うけどな。だって記憶は同じだし。ただ、オレには肉体が滅ぶ前の、約五ヶ月間の記憶がないんだ。死ぬ前に何を考えていたのかは分からない。もうすぐ死ぬんだっていう覚悟はあったんだけど。だからどうして、この身体を作ったのか不思議なんだ。免職になって作る事を中断されて、絶望してた。研究室に出入りできなくなったから、実質上部屋に軟禁状態で、どうせもうすぐ死ぬんだしって、自暴自棄になってたはずなんだけどね」

「え？ ランシュって科学技術局の中に住んでたの？」

結衣が問いかけると、ランシュは気まずそうに頭をかいた。

「あ、また余計な事しゃべっちゃったかな」

そして開き直ったように、ニツコリ笑う。

「ま、いいか。オレ、もう局員じゃないし。ユイはすでに色々知ってるしね。オレ、科学技術局の中で生まれた体細胞クローンだったんだよ」

あまりにあっさりと重大告白をされ、結衣は言葉を失う。

ようするにランシュは、科学技術局所有の、実験体のようなものだったのだ。

「でも人のクローンって禁止されてるんじゃないの？」

「うん。局内で違法に作られたんだ。人間だった時も、オレの身体

は違法だったんだよ」

そしてランシュは、出生の経緯と二年前に寿命が尽きた理由を、教えてくれた。

ランシュは健康管理の名目で、毎月身体の検査を受けていたという。局に戻ってそんな事をされたら、あっさりロボットだとばれてしまうのではないかと思ったが、ロボット故に、それについては、ごまかす方法があるらしい。

だが免職になったランシュは、局に戻ってもする事がない。おそらく以前のように、部屋に軟禁状態になるのだろう。

ランシュがポツリとつぶやいた。

「何が違うんだろう。昔のオレの方が、よっぽどロボットみたいだったのにな」

「え？ そうなの？」

「そうだと思うよ。人付き合い悪かったし、どうせ長く生きられないからって冷めてたし」

「私には想像できない」

今のランシュはよく笑う。優しくて親切で、色々と気遣ってくれる。それは今のランシュに心があって、人の気持ちが分かるから、そういう心遣いが出るのだと思う。

ロイドはヒューマノイド・ロボットに、感情がないと言っていた。今のランシュと深く付き合っていないロイドには、ランシュが昔のランシュの記憶を頼りに、真似ているだけのように思っているのかもしれない。

ランシュはまた俯いて、寂しげに言う。

「ユイはオレの心がここにあるって言ったけど、実際のところ、オレにはよく分からないんだ。オレは身体を乗り換えて、生き続けているつもりなんだけど、ロボットに心や命があると思うのは、間違ってるのかな」

「そんな事ないわよ。ランシュには確かに心があるもの。ロイドは今日知ったばかりだから、きつと混乱しているのよ。お互いにもっ

と話をして、ランシュの事よく見たら、ロイドにも絶対分かるはずよ。あなたたち会話がなさ過ぎるのよ」

そう言って結衣が背中を叩くと、ランシュは面食らったように目をしばたいた。

「うん。まあ、確かに会話はあまりないね」

「でしょ？ 昔のしがらみは捨てて話してみれば？ それこそ今のランシュが昔のランシュの真似をしているわけじゃないって事の証明になるんじゃないの？」

ランシュは一瞬絶句して、目を見開いた。

「そっか」

そして、いつもの屈託のない笑顔を見せる。

「前と違っててもいいんだ。ユイって賢いね」

ランシュに笑顔が戻り、結衣はホッとして席を立った。

「早起きし過ぎちゃったからケーキ作ったの。食べる？」

「うん。ありがとう」

二人で食卓に移動して、チョコチップ入りのシフォンケーキを食べ始める。

おいしそうにケーキを頬張るランシュを見ながら、結衣の中にふと疑問が湧いてきた。

ロボットのランシュは、飲んだり食べたりする必要はない、と言っていたが――。

あまりに不躰に凝視していたからか、ランシュが気付き手を休めて問いかけた。

「どうかした？」

「あ、うん。ちょっと気になって……」

まるで障害のある人に障害の事について尋ねるような後ろめたさを感じて、結衣は曖昧に言葉を濁す。

するとランシュは、察したようにニッコリ笑って答えた。

「オレの身体の事？ いいよ。何でも訊いて。自慢の身体だから」
そして照れくさそうに付け加える。

「あ、でも、見た目は先生には遠く及ばないから、あんまり自慢できないけど」

結衣は思わずクスリと笑う。

確かにランシュは、女の子のように華奢な体つきをしている。やっぱり男の子は、たくましい身体に憧れるものなのだろうか。

「じゃあ、どうして自慢できる体つきにしまったの？ 顔だつて、身を隠すなら昔と一緒にじゃない方がよかったんじゃない？」

「身体に関しては、サンプルになるのが自分の身体しかなかったんだ。裸になって隅々まで念入りに見せてくれる人っていないよね。リアルにこだわってたから、データだけで作ったら絶対ウソっぽくなると思うて」

「そんなにリアルなの？」

「かなりね。産毛の一本一本から指紋まで。全部見せてあげられないのが残念なくらい」

そう言つてランシュは、イタズラっぽく笑つた。

「顔の方はサンプルデータは取つたけど、オレの知ってる限りじゃ決めてなかったんだ。だから憶測だけど、目が覚めた時、別人になつてたらビックリするから一緒にしたんじゃないかな。実際、オレも目覚めた時、しばらく頭が働かなかつたし、身体をつまぐ動かせなくて混乱した」

「うーん。確かに、別人になつてたら混乱するわね」

結衣は先ほど気になつていた事を尋ねた。

「ねえ、食べたものはどうなってるの？」

「分解してエネルギーに変換してる。人間と一緒にだよ。排泄はしないけどね」

言われてみれば、ランシュがトイレに行くところを見た事がない。「全部分解してるの？ 味も分かるのよね？」

「うん。味覚センサを切つたら、何でも食べられるよ。生ゴミ処理機にもなれる。けど、昔の記憶があるからさ、やっぱり人が食べられないものは遠慮したい」

ランシユは通常、食物の口腔摂取により、エネルギーを補充している。それが出来ない場合は、充電によって賄うらしい。

いざとなったら何でも食べられるので、そう簡単には死なないと言ったのは、そういう理由なのだ。

排泄もしないし、汗もかかない。人間のように新陳代謝で、皮膚表面が汚れる事はないので、本来なら、泥や埃をかぶったりして物理的に汚れない限り、お風呂に入る必要もないらしい。

結衣は感心したようにつぶやく。

「すごいわね、ランシユの身体って。ほとんど人間と変わらないじゃない。っていうか、人間より便利ね」

「うん。だけど、人間ならみんな出来るのに、オレにはどうしても出来ない事が、一つだけあるんだ」

「何？」

結衣が首を傾げると、ランシユは悲しそうな表情で微笑んだ。

「眠って夢を見る事」

「夢を見ないの？」

「うん。ていうより、オレは眠らないから。夜は省電力モードでスタンバイしてる」

「え？　じゃあ、今朝私が部屋を覗いたの、知ってた？」

「うん。晩ご飯食べてなかったから、充電中で動けなかっただけ」

ランシユは俯いて、ポツリと吐露する。

「せめて夢の中で、ユイと恋人同士になれたらなあ、って何度も思った」

そして顔を上げると、慌てて取り繕った。

「ごめんね。もう、そんな事考えないから」

「ううん。気にしないで」

昨日の今日では、ランシユの気持ちだが、まだ吹っ切れていないのも頷ける。気持ちを簡単に切り替えられるわけではない。

結衣もロイドに「好きになるな」と言われた時、どうしても気持ちを变える事は出来なかった。

ランシュの感情が、完全に機械によって作り出されたものなら、報われない想いなどすぐに切り捨ててしまえるのではないだろうか。それが出来ないという事は、ランシュに心がある事の証明に他ならない。

ロボットのランシュは、完璧で高性能な身体を持ちながら、心は不完全で不安定な人間そのもののなのだ。

それをロイドに分かって欲しい。

ランシュの切ない気持ちを思うと、胸が締め付けられるような気がした。

Resume Next (3)

夕闇の迫るラフルールの街を、ロイドは重い足取りで家路を辿る。せつかく副局長が早く帰れと言ってくれたので、素直にいう事を聞いて、いつもよりかなり早い時間に科学技術局を出た。

家に連絡すると、ユイは心底驚いていた。

昨日、反故にしてしまったユイとの約束が果たせるのは嬉しいが、ランシュに告げなければならぬ事を考えると、気が重い。

ランシュが家にやってきて、一月近く経過している。彼の復讐でユイに危害が及ぶのを警戒し、しばらく様子を見る事にしたが、そろそろ決断を下さなければならぬ。

いつまでも局に、隠しておくわけにはいかないのだ。ランシュが二年前に死亡したという事実を。

一番の問題は、ランシュにそっくりな違法ロボットの存在だ。人間そっくりでありながら、人間以上の能力を持ち、絶対命令を持たないロボットを野放しにするのは危険だ。

局に引き渡せば、間違いなく機能停止処分になるだろう。

あれはランシュではなく、そっくりなロボットだと、頭では理解している。けれど心の中では、ランシュが元気になって戻って来たという思いを、ロイドは捨てきれずにいた。

それが決断を下す事に、気を重くさせる。

この一月近くの間、ランシュは復讐らしい事を何もしていない。ロイドの神経を逆なでしたり、揺さぶりをかけたりはしたが、からかわれていただけのような気がする。

そもそもロボットのランシュが、本当に復讐する気があるのかは、甚だ疑問だ。

ロイドに復讐を宣言したのは、失踪する一ヶ月前のランシュだ。つまりロボットのランシュは、その記憶を受け継いでいない。

免職にされた記憶があるので、ロイドに恨みは抱いていただろう。

だが二年の間に、忘れていたと言っていた。

意識的に記憶データを削除しない限り、ロボットが記憶した事を忘れる事はない。実際に忘れたわけではないだろうが、忘れたと言えるほど、ロイドに対する恨みは優先度の低い記憶だったのではないだろうか。

高性能の人工知能と思考エンジンを搭載しているランシュは、ロイドの言動や心理状態を即座に判断し、怪しまれない最良の対応をしている。

ランシュの真意が復讐ではないとすると、一体何なのか。駆け引きなしで、一度腹を割って話してみようと、ロイドは思った。

そしてランシュの作り上げた最高傑作の性能を、この目にしっかりと焼き付けておきたかった。

玄関の扉を開けると、ユイが笑顔で出迎えてくれた。意外な事に、ランシュも平然と笑顔で挨拶をする。

ユイがいるからかもしれない。

久しぶりに三人で夕食を摂る。当たり前のように食事をするロボットが、なんだか不思議だ。

人間そっくりに作られていると言っていたので、当然なのだが。

食事をしながらユイと雑談をするランシュに、ロイドは唐突に声をかけた。

「ランシュ、食事の後、話がある」

「はい」

ランシュは少し驚いたような表情で返事をした後、お伺いを立てるようにユイの方を向いた。

ユイは笑って頷く。

「大丈夫よ。後片付けは私がするから」

「ごめんね」

どうやら、いつもはランシュが、後片付けを手伝っているらしい。食事を終え、ランシュと共に部屋を移動しようとすると、ユイが茶を乗せたトレーを差し出した。

「私は邪魔しない方がいいんでしょう？　だから先に渡しておくわ」

ロイドはトレーを受け取り、礼を言う。

「ああ、すまない。おまえの話を聞くのは、後でもいいか？」

本当はユイの方が先約だった。申し訳なく思いながら問いかけると、ユイはなぜかニコニコしながら答える。

「うん。かまわないわ。私は後片付けの後、明日の準備があるし。気にしないでランシュとゆっくり話して」

「じゃあ、後でな」

そう言ってロイドは、ランシュと共に二階へ上がった。

自室に入って、作業机の前の椅子に座り、ランシュには予備の椅子を出して座らせた。

椅子に座ったランシュは、黙ったまま探るように見つめている。

ロイドの生体反応から、心理状態を探っているのだろう。

ロイドは静かに口を開いた。

「腹を割って話さないか？　オレは本音で話すから、おまえもそうして欲しい。どうせオレがウソをついても、おまえには分かるんだろう？」

「そうですね。今のあなたは落ち着いています。少し脈拍が早いようですが、異常な発汗は見受けられません。脳内ベータエンドルフィンの値が上昇しています。緊張しているというより、少し心が高揚していますか？」

ランシュの性能の一端に触れ、ロイドの心は少しどころか益々高揚する。

「その通りだ。おまえの性能を確認できる事に、ワクワクしている」
無表情だったランシュが、クスリと笑った。

「オレの思考能力のテストってわけですね」

「それだけじゃない。色々聞きたい事があるんだ」

「わかりました。あなたがウソをつかない限り、オレも本音で話します」

ランシュにはロイドの心理状態は筒抜けでも、ロイドにはランシュのウソは見抜けない。

だが今は、ランシュの言葉を信じる事にした。

Resume Next (4)

「おまえ、ベルⅡグラヴを手にかけてはいないんだろ？」

ユイの淹れてくれた茶をひとつ、ランシュに差し出しながら、口イドは問いかけた。

今朝のランシュの含みの言い方が気になったので、仕事の合間に調べてみたのだ。

ベルⅡグラヴの死因は肺炎だった。

ランシュは受け取った茶を、ひざの上に乗せた。両手でカップを包み、俯いてそれを見つめる。

「直接手を下してはないけど、オレが見殺しにしたようなものです」
ベルⅡグラヴは、亡くなる二週間ほど前に風邪をひいた。最初
は軽い咳と微熱だけだったという。かなりな高齢なので、ランシュ
は病院に行く事を勧めたらしい。

だがベルは、薬を飲んで少し休めば治るから、と断った。ところが
三日経っても熱は下がらず、咳も益々酷くなる。

それでもベルは、頑なに病院に行く事を拒んだ。

「今思えば、おばあちゃんはオレを守ろうとしてくれてたんでしょ
う。オレが病院や役所に近付かないようにしていたのを知ってたか
ら」

歩行が困難なベルを気遣って、ランシュはいつも、ベルが外出する
時には付き添っていた。

けれど病院や役所に行く時だけ、いつも理由を付けて途中までし
かついて行かなかったらしい。

日に日に衰弱していったベルは、風邪から肺炎を誘発し、死に至
った。

「おばあちゃんはオレの主でした。オレに絶対命令がない事を知ら
ないから」命令だ”って言われれば、従うしかありません。そう自
分に言い聞かせて、保身のために”少し休めば治る”という言葉に

甘えただけです。オレに絶対命令があつたなら、自分の身よりも、命令よりも、おばあちゃんの命の方が、優先順位は高いはずなのに」
一層俯いたランシュの目から、水滴がこぼれ落ち、カップを握る手の甲を濡らした。

ロイドは少し目を見張る。

「驚いたな。おまえは涙も流すのか」

ランシュは俯いたままつぶやく。

「そんなの当たり前でしょう。悲しい時に泣けないなんて、余計に悲しくなるじゃないですか」

ベルはランシュがロボットである事を、始めから知っていた。ランシュはベルに、主に捨てられたセクサロイドだと告げていたらしい。

人でないなら、カードが使えない事の言い訳が立つからだ。

ベルのカードを勝手に使ったのは、ユイの店に来た時だけだという。カードに細工をしたのではなく、無線通信で認証装置のプロگرامに干渉し、ごまかしていたようだ。

高熱で思考力の低下していたベルは、ランシュが毎日ユイのお菓子を持って来ても、大して疑問に思っていなかったらしい。

涙が止まり、ランシュは一口茶を含む。

落ち着いたところを見計らって、ロイドは一番知りたかった事を尋ねた。

「おまえは復讐なんか考えてないだろう？ オレに復讐してやると言ったのは、死亡する一ヶ月前のランシュだ。おまえにはあの頃のランシュの記憶はないだろう」

ランシュは少し小首を傾げ、口元に笑みを浮かべる。

「バレましたか。あなたが復讐しに来たのかと訊いたから、利用させてもらいました」

「なぜ、そんな事を……」

「オレは、ユイと家族のように一緒に暮らしたかったんです」

ロイドは愕然とする。

このロボットには、科学技術局で暮らしていたランシュの記憶しかない。生まれた時から局内で生活し、外出許可が下りてからも、パーツ屋か本屋にしか行かなかったランシュは、家族がどんなものか知らない。

街で家族の姿を、目にする事はあつたかもしれない。だが常に監視のついていたランシュは、それに憧れるほどの接触はしていないはずだ。

元々無表情で何を考えているかは分からなかったが、一番長く一緒にいたロイドには、そんな様子は微塵も見せていなかった。

家族に対する憧れは、このロボット独自の感情だ。

ロイドの動揺を感じたのか、ランシュはクスリと笑う。

「ウソじゃありませんよ。推測ですが、オレが復讐を宣言したのは、あなたに生涯をかけた研究を途中で奪われたからでしょう？ けれどそれは、こうして実現しているわけですし、今さら無意味なものです」

ランシュは自分の手を見つめ、遠い目をした。

「意外に思つかもしれませんが、オレの死に顔は、幸せそうに笑ってたんですよ。この手をしっかりと握って。夢を実現できたから満足してたんだと思います」

ランシュはこのロボットに、メモを残して絶命していた。

自分の遺体を処分し、誰にも見つからないように局を出る事。そして病院と官庁街には近付かない事。

ランシュの記憶を持つロボットは、局内の施設やセキュリティは熟知している。

ロボットの能力でセキュリティをかいぐり、局内にある実験動物の処理施設で遺体を処分し、難なく科学技術局を抜け出した。

そして街角にうずくまっているところを、ベルグラーヴに拾われたらしい。

「一番やりたかった事は、知らない間に実現してしまってるし、オレは目標を見失っていました。他にもやりたい事は色々あつたはず

なんです、もう明日死ぬかもしれないってわけじゃなし、って思ったら、どうでもいい事のように思えました」

ランシュはひと息ついて、茶を一口すすり、再び口を開く。

「オレは最初、おばあちゃんを”マスター”って呼んでたんですけど”おばあちゃん”って呼んでくれて言われました。”あんたはあたしの孫だから”って。おばあちゃんはオレをロボットだと知りながら、本当の孫のように扱ってくれたんです。必死になって研究に没頭しなくても、おばあちゃんと一緒に普通に生活しているだけで毎日楽しかった。そんな家族との普通の生活が一番楽しくて幸せな事だって、おばあちゃんがオレに教えてくれたんです。だからおばあちゃんを失った後、もう一度家族が欲しくなったんです」

このロボットが起動してから二年間の内に、経験した事や考えた事も記憶データとして蓄積される。それも合わせて感情が作られているとしても、経験のないランシュ自身が、家族との生活を楽しいとか幸せだとか感じるかどうか、計算するのは難しいような気がする。

にわかに信じ難い事だが、このロボットには生前のランシュとは違う、独自の感情が芽生えているのかもしれない。

言い換えれば、それは”心”だ。

心があるという事は、生きているという事。今朝ランシュが言っていた事を、ロイドも否定はしない。

けれどそれを、科学技術局の幹部局員たちに、どうやって納得させればいいのか、ロイドには分からなかった。

黙り込んだロイドに、ランシュは静かに声をかけた。

「先生、話はこれで終わりじゃないんでしょう？」

「ああ」

力なく頷いた後、ロイドは意を決して、ランシュを真っ直ぐ見つめた。

「オレはランシュの安否を知っている以上、局に通知する義務がある。同時にランシュの作った違法なロボットがここにあるという事

もだ。局に引き渡せば、おまえは間違いなく、機能停止処分になる。最悪、解体されるだろう」

ランシュはフツと笑い、目を伏せた。

「あなたはやはり冷酷な人だ。オレに……ランシュに、改めてもう一度死ねと言うんですね」

ロイドは感情を押し殺し、ランシュに最後通牒さいごつうだくを突きつける。

「ランシュの作ったロボットが、超高性能な事は周知の事実だ。だからどんなに嚴重に閉じ込めておいても、オレが寝ている隙にうまく逃げ出してしまう事は充分考えられる。誰も不審に思わないだろう。オレは明日の朝、局に連絡する。おまえはそれまで好きにしろ」
「わかりました」

無表情で返事をして、ランシュは席を立った。ロイドがカップを受け取ると、ランシュは黙って部屋を出て行った。

すっかり冷め切った茶を一気に飲み干し、ロイドは廊下に出た。ランシュの姿はすでない。

トレーを持って一階に下りると、そこにもランシュはいなかった。部屋に戻ったのだろう。

ランシュが出て行くとしても、皆が寝静まった真夜中だろう。

ロイドはキッチンへ向かう。

明日の準備を終えたばかりのユイが、笑顔で振り向いた。

「話、終わったの？」

「ああ」

トレーを受け取りながら、ユイはニコニコ笑う。

「風呂を済ませたら、おまえの話を聞こう」

ロイドがそう言つと、手早くカップを洗い終えたユイは、笑いながら告げた。

「私の話は、もう終わったようなものよ」

「は？」

「ランシュと話をして欲しかったの。なんかケンカしてるみたいに見えたから」

「そうだったのか」

ロイドは苦笑しながら、ユイの頭を撫でる。するとユイは、興味深そうに上目遣いで見上げた。

「で、仲直りできた？」

「ああ」

「よかった」

ユイはホッとしたように笑った。

明日になれば、ランシュはもういないかもしれない。そして二度と会えないのかもしれない。

嬉しそうな笑顔に胸が痛くなり、ロイドはおもむろにユイを抱きしめた。

「ユイ、もしもオレが間違った選択をしたとしても、おまえだけは見捨てないでいてくれるか？」

ユイはロイドの背中に腕を回し、強く抱きしめ返す。

「当たり前じゃない。世界中の人が、あなたを非難しても、私はずっとあなたの味方よ」

ユイの優しさと温もりに胸が熱くなり、ロイドはしばらくの間、ユイをきつく抱きしめた。

Resume Next (5)

ケーキを焼きながら朝食の支度をしていると、いつもよりかなり早い時間にランシュがキッチンにやってきた。

結衣は驚いて声をかける。

「どうしたの？ 今日は早いよね。眠れなかった？」

何気なく発した言葉に、ランシュはクスクス笑う。

「うん。毎日眠れないよ」

「あ……そうだったわね。つい……」

結衣が苦笑すると、ランシュは少し気まずそうに言った。

「今日はちよつと先生に話があるんだ。それで手伝う事が出来ないから、ごめんね」

「そんなの気にしなくていいのに。ロイドはまだ眠ってると思うわ。私の代わりに叩き起こしてかまわないから」

「それは後が怖いな」

二人で顔を見合わせて、同時にプツと吹き出す。少しの間笑った後、ランシュは握った手を結衣に差し出した。

「ユイ、これ受け取って」

「何？」

結衣の手の平にランシュが乗せたものは、小さくて四角いロボットだった。底面には小さな車輪が三つ付いていて、頭には触覚のようなものが二本生えている。

「プレゼント。ゆうべ突貫で作ったから、こんなものしかできなくて。前に話した脳のないロボットだよ」

「へえ。この子、何が出来るの？」

「迷路探査。この触覚は立体迷路用のセンサで、底にあるセンサは濃い色の付いた線を辿るように出来てる。紙に線を描いて辿らせる

とおもしろいよ」

「うん。後でやってみる」

「ちゃんと見張っててね。時々、あさっての方に走っていくと思うから」

「わかった。ありがとう」

結衣が笑って頷くと、ランシュは満足したように微笑んだ。その達観したような穏やかな笑顔が、結衣の漠然とした不安をかき立てる。

ランシュとロイドは、ゆうべ話し合って仲直りをしたと聞いた。これからも一緒に暮らしていく上での障害はなくなったものだと思う、結衣は安心しきっていた。

わざわざ突貫で作ったロボットを、プレゼントしてくれる理由も気になるので尋ねた。

「どうして突然プレゼントをくれるの？」

ランシュは言いにくそうに言葉を濁す。

「えーと……。オレのプレゼントはなんでもうれしいって言ってくれたから、ユイには色々お世話になってるし……」

嫌な予感がして、結衣はランシュの腕を両手で掴んだ。

「もしかして、出て行こうとしてるの？」

黙って目を逸らすランシュに、結衣は詰め寄る。

「どうして？ ロイドとは仲直りしたんでしょ？ 私というのは、そんなに辛いのか？」

「違うよ。ユイと一緒にいるのは辛くない」

ランシュはこちらを向いて、即座に否定した。

「そうじゃなくて、オレ、科学技術局に戻らなきゃならないんだ」
「え？」

自分の不安が取り越し苦労だったと気付き、結衣は拍子抜けする。少し恥ずかしくて、乾いた笑いを漏らした。

「ははっ。なんだ、そうだったの。早く言ってよ」

「ごめんね。言い出せなくて。短い間だったけど、ユイに出会えて、

一緒に暮らせて、楽しかったよ。ありがとう」

ロボットである事はごまかせると、ランシュは言っていた。科学技術局に戻れば、すぐに復帰は無理でも、ロイドが付いていれば、何とか計らってもらえるだろう。

ゆづべ、そんな話し合いをしたのかもしれない。

ユイは差し出されたランシュの手を握り返す。けれどまだ、不安は消えずにいた。

名残惜しむかのように、結衣をじつと見つめて、ランシュは握った手を緩く振りながら離そうとしない。

「たまには遊びに来てね」

ランシュは一瞬ためらった後、満面の笑顔で頷いた。

「うん。必ず」

キッパリと言い切って、ランシュは手を離れた。ウソだと直感した。

ランシュは職場復帰するために、科学技術局に戻るわけじゃない。違法なロボットとして、処分されるために戻るのが。

そう気付いた途端、結衣の目から涙が溢れ出した。

「い……や……」

「どうしたの？ ユイ」

ランシュが慌てて、心配そうに顔を覗き込む。涙で滲んだランシュの姿が、今にも消えてしまいそうな気がして、結衣は彼の首に腕を回し抱きしめた。

「ランシュがいなくなるなんてイヤ」

ランシュはうろたえた様子で、結衣の腕をほどこうとする。それを阻止するため、結衣は益々しがみついた。

諦めたランシュは、静かに言う。

「落ち着いて、ユイ。局に戻るだけだよ」

「戻ったら、身体を処分されるんでしょう？」

固まっていた身体の力を抜いて、ランシュはクスリと笑った。

「かなわないなあ、ユイには。どうしてバレたんだろう」

「私を騙そうなんて、百万年早いのよ」

「じゃあ、ユイが生きている間、オレはユイにウソはつけないね」

ランシュは益々おもしろそうに、クスクス笑う。

「そうよ。もつとずっと生きていて。ロイドに頼んであげるから」

「それでも先生は、義務を果たすよ。そういう人だって、ユイも知ってるでしょう?」

「だってイヤよ。ランシュは生きているのに」

たとえ身体が違法なロボットでも、ランシュには人と同じ心があるって、生きている。心の器である機械の身体を、処分するという事は、彼の死を意味する。

ランシュは結衣を、そっと抱きしめ返した。

「時々、不安で堪らなかった。おばあちゃんといった時もそうだけど、ユイと一緒にいると、もつと不安は大きくなった。オレは眠らないから、本当は長い夢をずっと見続けているんじゃないかって。こんな時に不謹慎かもしれないけど、オレ、今すごく幸せだよ。ユイに抱きしめてもらえるなんて。これが夢なら、ホント、覚めないで欲しい」

「夢じゃないわ。私もランシュも、ちゃんとここにいる」

「うん。そうだと信じたい。だからユイ、オレを覚えていて。ずっとじゃなくていいから。時々思い出して。オレがここに生きていたっていう証に」

一際強く抱きしめて、ランシュは腕をほどいた。

止められない。そう悟った結衣も、仕方なく腕をほどく。

ランシュは結衣の頬に手を添え、流れる涙を親指の腹で拭いた。けれど拭う端から、涙は止めどなく溢れ出す。

困ったように苦笑して、ランシュは見つめた。

「もう泣かないで。ユイを泣かせた事が知れたら、オレが先生に怒られちゃうよ」

「そしたら私がロイドを怒ってやるわ。だって元々ロイドのせいだもの」

ロイドの立場上、仕方のない事だとしても、ついつい恨み言が口をついて出た。

「先生を悪く思わないであげて。あの人は精一杯譲歩してくれたんだ。自分が寝ている間にオレが逃げ出したなら仕方ないって。オレに一晩の猶予をくれたんだよ」

頑固なロイドが、ランシュのために譲歩したのが意外で、結衣は思わず目を見張る。故意に逃がした事が知れば、自分もただでは済まないはずだ。

だが、すぐに納得した。

職務に忠実で頑固なロイドが、ルールに背く時は、自分が全責任を負おうとする。

そしてそれは、誰かを守るため。

かつて、王命に背いてまでも、結衣を守ろうとしていた。

ゆうべロイドは、ランシュをランシュだと認めたのだ。

ゆうべ縋るようにして、見捨てないでくれと言ったのは、この事だったのだと分かった。

一番辛いのは、結衣でも、処分されるランシュでもなく、その決断を下さなければならぬロイドなのに。

少しでも彼を非難しようとした事が情けなくて、余計に涙が溢れ出した。

「分かってる。ロイドはそういう人よ。私は何があっても、あの人の味方だって約束したから。でも、どうしてランシュは逃げ出さなかったの？」

「逃げ出しても行く当てはないし、もう、ここには近付けない。二度とユイに会えないなら、オレにとっては同じ事だから。先生に迷惑をかけるより、素直に従う方がいいと思ったんだ」

ランシュは元気づけるように、結衣の肩をポンと叩いた。

「ほら、もう泣かないで。最後は笑って送り出してよ。オレはやつと眠れるんだ。ユイの笑顔を思い浮かべながら眠りにつきたいから」
「う……ん……」

頷きながらも、結衣の涙は止まらない。

「ユイ、大好きだったよ」

囁くようにそう言っ、ランシュは頬に、優しいさよならのキスを送る。

そしてそのまま背を向けて、振り返ることなく、キッチンを出て行った。

Resume Next (6)

ユイが起きてしばらく経った頃、寝室の扉がノックされ、ロイドは目を開いた。

ゆうべは、ほとんど眠れなかった。ランシュがコッソリ出て行く事を期待して、ウトウトしては目を覚ます事を繰り返した。だがそれも徒労に終わったようだ。

扉の外から、耳慣れた声が聞こえる。

「先生、起きてますか？」

ロイドは大きいため息をついて、身体を起こす。ベッドを出て答えた。

「起きている。入れ」

扉が開き、薄暗い室内にランシュが入ってきた。

それにチラリと視線を送り、ロイドは窓辺に寄って、カーテンを勢いよく開く。

ロイドの心とは対照的に、雲ひとつない青空と眩しい朝日が、寝不足の目の奥に刺すような痛みを与えた。

ベッドの縁に腰掛けメガネをかけると、ランシュが目の前まで歩み寄って来た。

朝日を浴びた穏やかな表情を見据えて、ロイドは憤るままに冷たい声をかける。

「どうして、ここにいる？」

「逃げるのがイヤになりました」

こちらがどんな思いで、一晩の猶予を与えたのか、分かっているのだろうか。

あつさりと言い放つランシュに、ロイドの憤りは益々募る。思わず声を荒げた。

「おまえは、自分がどうなるか分かっている、ここにいいのか?!」

「はい」

「命と引き替えにしてまで、逃げるのがイヤな理由とは何だ？」

ランシュは口をつぐみ、俯いて視線を逸らす。

やはりそうか、と納得して、ロイドはひとつ嘆息した。

「ユイか」

「え……」

顔を上げたランシュの瞳が、困惑に揺れる。ロボットである事を忘れさせる、その複雑な表情に半ば感心しながら、ロイドは言葉を続けた。

「ユイと家族になりたかったと、おまえは言った。ユイに対して特別な想いがあるから、そう思ったんだろう？」

ユイを見つめるランシュの視線に、ロイドはいつも心を乱されていた。それは復讐の標的を見定める目ではなく、慈しむような優しい眼差しだった。

ユイを安心して油断させるために、そんな表情を作っているのだと思っていた。だから全く警戒していない、無防備なユイに不安になった。

けれどゆづべ、話してみても確信した。あれは恋する少年の目だったのだ。

ランシュは俯いて、気まずそうにつぶやいた。

「あなたにだけは、最後まで知られなくなかったな」

「そんなの見てりゃわかる。おまえは昔より表情が豊かになってるし」

「ユイには、はっきり言うまで気付いてもらえませんでしたけど、二年前の自分を思い出して、ロイドはため息を漏らす。

「あいつは激ニブだからな」

しかし、ハタと気付いて、声を上げた。

「……って、はっきり言ったのか？」

全く悪びれた様子もなく、ランシュは照れくさそうに笑う。

「安心して下さい。ふられました」

「当たり前だ。あいつはオレの妻だ」

少し腰を浮かせて額を叩くと、ランシュはおどけたように首をすくめた。

その無邪気な表情は、かつてロイドを慕い、好奇心に満ちあふれていた、幼い頃のランシュを思い出させる。

晩年のランシュは、子供の頃のように、ロイドを慕う事はなかった。大人になったのだから、当たり前と言えば当たり前だが、なんでも自分で解決しようとして、頼るところか意見を聞く事も稀だった。

今思えば、残り少ない人生への焦りが、他人の意見に耳を傾ける余裕を失わせていたのだろう。

昔のランシュを垣間見たような気がして、ロイドの頬は思わず緩む。

「おまえと、こんな話をするのは初めてだな」

「そうですね」

「おまえ、女に興味がないのかと思ってたぞ」

「女っていうか、人に興味を持たないようにしていました」

「そうか」

あの無表情で冷めた態度の裏では、長くは生きられない運命さためと知り、感情を押し殺して、多くの事を諦めてきたのだろう。

やっと死の恐怖から解放され、自由と可能性を手に入れたランシュの人生を、ここで終わらせるのは忍びない。

ロイドはもう一度、ランシュの意思を確認した。

「おまえ、逃げたかったら、今からでも逃げていいぞ」

ランシュはゆっくりと首を振った。

「いいえ。もう充分です。オレの今の人生は、ロスタイムのようなものだから」

「ロスタイム？」

「ソータに教えてもらったサッカーゲームの話です」

首を傾げるロイドに、ランシュは笑って説明してくれた。

そのゲームは、元々人が大勢集まってやる、スポーツだという。試合時間は決まっているが、試合中に反則や選手のケガなどで中断されると、中断された時間だけ試合時間が延長される。

その延長された時間を、ロスタイムというらしい。

「オレの時間は、本当なら二年前に終わっていました。けれど記憶は五ヶ月間欠落しています。それを埋めるために、神様がくれたロスタイムだったんですよ。二年ももらったから、多すぎるくらいです」

満足そうに微笑んだ後、ランシュは遠くを見るような目で再び語り始めた。

「ずっと不思議でした。オレがどうして、この身体を作ったのか。この身体で目覚める前の最後の記憶は、あなたに免職を言い渡されて、絶望していた時のものです。あの時のオレは、何もかもやる気をなくして、生きる気力すら失っていました」

確かにそうだ。免職後のランシュは、数日間食事も摂らず、部屋に閉じこもっていたと聞いた。

だが元々病弱だったランシュは、すぐに倒れたので、結局閉じこもりも長続きはしなかったらしい。

快復してからは、普通に生活するようになったと聞いている。

「一度は諦めようとしていた事を、どうして諦められなかったのか、今になって分かりました」

ランシュはこちらを、真っ直ぐ見つめて言った。

「オレは死ぬのが怖かったんです。もっと生きていたくて、この身体を作ったんです」

それはロイドが導き出した結論と同じだった。ランシュは結論に至った経緯を語る。

「ゆづべ、あなたに機能停止を告げられて、オレはそれまで無縁になったと思っていた死と、初めて正面から向き合いました。この身体がなくなったら、オレの心はどこへ行ってしまっただろう。人知れず滅びたオレの肉体と同じように、オレの存在も忘れ去られ、消

えてしまっただろうかと、そんな事を色々考えていると、無性に怖くなったんです。そして気付きました。二年前のオレも、同じように怖かったんだろうと。それまで覚悟していたつもりでいたけど、必死で何かに打ち込んで、目を逸らしていたんです。けれど、いざやる事を取り上げられて、それしか向き合うものがなくなった途端、怖くて堪らなくなったんだと思います。怖さを紛らわせるため、そして命を長らえさせる可能性を手に入れるために、この身体を作ったんです。オレの死に顔が幸せそうに笑っていたのは、夢を実現したからじゃない。もう一度人生の続きを歩む事が出来るからだだったんです」

「おまえは、今も怖いんだろう？」

ロイドが静かに問いかけると、ランシュは俯いた。

「怖いんです。けれど逃げたら、ユイにもあなたにも二度と会えないし、この先もずっと逃げ続けなければならぬ。この世に誰ひとりオレを知っている人がいなくなっても、オレは完全に死ぬ事はできない。それも辛いな、と思いました」

ロボットはエネルギーが切れれば停止するが、充電すればまた動き出す。完全に機能停止させるのは、そう容易な事ではないのだ。

ロイドは立ち上がり、ランシュの頭を撫でた。

「冷酷なオレを、恨んでもいいぞ」

ランシュはロイドを見上げて、クスリと笑った。

「恨んだ事もありましたが、今は恨んでいません。ずっとあなたを尊敬していました。あなたに追いつきたくて、あなたに褒めてもらいたくて、オレは高みを目指したんです。オレの生涯をかけた、最高の研究成果をあなたに捧げます。この身体を受け取って下さい」
そう言っただけでランシュは、一枚のメモリカードをロイドに差し出した。

ロイドは受け取ったカードを眺めながら、ランシュに問いかける。
「何だ？」

「違法なロボットでなければ、機能停止にはならないんでしょう？」

それには絶対命令と人格形成プログラムが入っています。この身体にインプットすれば、違法ではなくなります」

「おまえが作ったのか？」

ロイドが尋ねると、ランシュは苦笑しながら答えた。

「記憶にないオレが作りました。メモと一緒に握らされていたんです」

「これをインプットしたらどうなる？」

それには答えず、ランシュはインプットの手順を説明する。

「メモリ領域全体を書き換えるので、主電源を落としてから、基盤に焼き付けて下さい。起動と同時にオレの記憶は保護領域に移動され、表面には現れなくなります。つまりただのデータになります。それを元に人格形成プログラムが新たな人格を作ります」

ようするに今のランシュはいなくなり、全く別の人格を持つ新しいヒューマノイド・ロボットが誕生するという事らしい。

「まあ、オレの記憶を元にするので、多少似たところはあるかと思いますが……。そのプログラムを使うか、単純に機能停止にするかは、あなたの判断に委ねる事にします」

ランシュの記憶が表に出て来ないのなら、記憶がコピーされている事を他人に知られる事はない。絶対命令も共に焼き付ければ、このロボットは表面上、違法ではなくなる。

ロイドはメモリカードを握りしめて頷いた。

心は決まった。

だが今一度、ランシュの意思を確認したかった。

「分かった。だが判断するのはオレじゃない」

「え？」

不安と困惑が入り交じった目で見つめるランシュに、ロイドは二つの選択肢を提示する。

「おまえの進むべき道は二つある。おまえ自身が判断して選べ」

Resume Next (7)

身支度を整えて、ランシユと共に階下へ降りる。ダイニングへの扉を開くと、ユイがわざとらしいほどの笑顔で挨拶をした。

ユイには科学技術局へ戻る事を告げたと、ランシユが言っていた。この表情は、何かを察しているのかも知れない。

ロイドは素知らぬフリをして、挨拶を返し食卓に着く。ランシユも席に着くと、ユイが作った朝食を囲んで、いつも通りの食事風景が展開された。

だがいつもはユイとランシユが他愛もない雑談をしているのに、今日は誰ひとりとして言葉を発する者がいない。

重苦しい空気の中、それぞれが黙々と食事をする。

皆が食事を終えるのを見計らって、ロイドは席を立った。ランシユも続いて席を立つ。

いつもはユイと一緒に後片付けを手伝う彼も、リビングに向かうロイドの後に黙ってついて来た。

いつもと違うランシユの行動に、ユイは何も言わず、食卓上の食器をまとめてトレーに乗せると、キッチンへ姿を消した。

それを見届けてロイドは、リビングの壁際に置かれた電話の前に立つ。

副局長のフエティは家が近いのもあって、いつも早く出勤している。今頃の時間は、すでに自分の研究室にいるはずだ。

科学技術局への発信ボタンを押そうとした時、ふと視線の端に人影がよぎった。

見ると、てつきり洗い物をしていると思っていたユイが、リビングの隅に立っていた。

これからのやり取りをユイに聞かれて、邪魔をされては面倒だ。

ロイドは手を止め、ユイに言う。

「ユイ、悪いが……」

「邪魔しないから」

席を外してもらおうと思ったら、話し終わる前にユイが拒否した。一歩も退かないという強い意志を孕んだ目で、ロイドを真っ直ぐに見つめる。

「見届けたいの」

「何を……」

科学技術局の事情を、部外者のユイに知られるのはマズイ。ロイドがあくまで、とぼけていると、思いも寄らない事をユイは口にした。

「私、知ってるの。ランシュがロボットだって事」

思わず横にいたランシュを睨む。ランシュが口を開きかけた時、それを遮るようにユイは言葉を続けた。

「ランシュから聞いたんじゃないわ。私が自分で気付いたの。ランシュは否定しなかっただけよ」

ユイは色恋沙汰には激ニブだが、他の事には驚くほど鋭い。

小鳥がランシュを攻撃した事で、気付いたのかも知れない。

——という事は、昨日の朝、小鳥の調子がおかしいと言ったのは、ランシュから聞いたと思わせないように、ロイドに気付かせようとしたのだろう。

まんまと誘導されたという事か。

「それについては後で聞く」

「お願い。ここにいさせて」

縋るような目で見つめられ、ロイドはひとつ息をつく。

「わかった」

気を取り直して、ランシュに忠告する。

「おまえは余計な事をしゃべるなよ」

「わかりました」

ランシュが頷くのを確認して、ユイにも忠告する。

「ユイ、おまえもだ」

「うん」

ロイドのいう事を聞かない二人だが、今回ばかりは聞いてもらわないと困る。二人に念を押し、ロイドは改めて発信ボタンを押した。数回のコールの後、科学技術局に繋がった。フェティに繋いでもらい、程なく画面に彼女の顔が映し出された。

フェティは挨拶と共に、ロイドに尋ねる。

「おはようございます。本日はお休みになりますか？」

昨日、体調不良で早めに帰ったので、休みの連絡だと思ったらしい。

「いや、体調はもう回復した。報告したい事があるんだ」

「何でしょう？」

「ランシュ・バージユが見つかった」

フェティの表情が少し曇る。伏し目がちに問いかけた。

「そうですか。今は警察に？」

遺体が発見されたと思ったのだろう。ランシュを知る者は、彼が今も生きているとは思えないからだ。

「いや、ここにいる」

「え？」

呆然とするフェティの前に、ロイドと入れ替わりにランシュが立った。ランシュの横から眺めていると、フェティの目が益々見開かれる。

「本当に、ランシュなの？」

ランシュはフワリと微笑んで挨拶をした。

「はい。お久しぶりです、副局長」

「いったい、どうやって……」

フェティもロイドと同じ疑問を持ったらしい。

「えーと、それは……」

ランシュは困ったように口ごもりながら、ロイドを見つめた。

ロイドは横から顔を出し、フェティに説明する。

「詳細は不明だが、モグリの医者かバイオ科学者に、遺伝子治療を

受けたらしい」

「そんなこと……」

眉をひそめるフェティに、ロイドはピシヤリと断言する。

「それしか考えられない。だが本人は当時の記憶が欠落している。瀕死の状態で、意識が混濁していたんだろう。誰に助けられたのかは不明だ」

「そうですか……」

フェティは一応、納得したようだ。チラリと部屋の隅に視線を送ると、ユイが目も口も大きく開けて、間抜けな顔でこちらを見ている。

ここで騒がれては元も子もないので「黙ってる」と目で制する。

ユイは両手で口を押さえて、コクコクと頷いた。

ロイドは再びフェティに視線を戻して、指示を出す。

「後で連れて行く。幹部たちに知らせておいてくれ。詳しい事はその時話す。医療チェックの手配も頼む」

「わかりました」

機械的に返事をした後、フェティの視線はランシュに注がれる。

ガラス玉のように澄んだ青い瞳に、みるみる涙が滲む。

フェティは片手で口元を覆いながらつぶやいた。

「よかった……。よく無事で……」

ランシュは静かに答える。

「後でお伺いします」

「ええ、待ってるわ」

互いに頷きあつて、二人は電話を切った。

電話を終えたランシュが、もの言いたげにロイドを見上げた。その時、部屋の隅からユイが声を上げた。

「ランシュ！」

ユイは目に涙を浮かべながら、笑顔で駆け寄ってきた。そして隣にいるロイドを無視して、思い切りランシュに抱きつく。

「え……ちょっと、ユイ……」

うつたえながらランシュは、顔色を窺うようにロイドを見上げた。
ロイドは少し眉を寄せて、顔を背ける。そしてボソリとつぶやいた。

「……今だけは、許す」

ランシュに抱きついたまま、ユイは涙声でつぶやいた。

「よかった。ランシュがいなくならなくて」

「心配かけてごめんね。先生のおかげだよ」

「うん」

ユイはランシュから離れて涙を拭くと、ロイドに小さい笑顔を見た。
けた。

「ロイド、ありがとう」

ロイドは腕を組んでそっぽを向いたまま、ぶっきらぼうに答える。
「別に。ランシュが選んだ道だ」

Resume Next (8)

先ほど寝室にやってきたランシュに、ロイドは二つの道を示し、本人に選ばせた。

ひとつはロボットとして生きる道。もうひとつは人として生きる道だ。

ロボットとして生きるなら、身体の機能は今のまま、一切手を加えない。そのかわりランシュの作った人格形成プログラムと、絶対命令をインプットする事が条件だ。

これにより実質的に今までのランシュは消滅し、ランシュと同じ姿形をした全く別のロボットとして生きる事になる。

そして人として生きるなら、人格形成プログラムと絶対命令はインプットしない。

かわりに視力、聴力、筋力等の身体機能を、人間並みにデチューンする。そして寿命を設定し、数年に一度人工皮膚の老化メンテを行う。

ロボットの身体にランシュの記憶と心を持って、それを他人に知られないようにしながら、人と同じように生きる事になる。制限はロボットとして生きるよりも、かなり厳しい。

話を聞いてランシュは、恐る恐るロイドに問いかけた。

「オレは、人として生きていてもいいんですか？」

「ああ」

「絶対命令がないの？」

「そんなものは必要ない。生きる事に焦がれ、誰よりも死を恐れたおまえなら、過ちを犯す事はないと確信している」

絶対命令の中で、一番優先度が高く重要視されているのは、人に危害を加えてはならないというものだ。

絶対命令が、なぜ義務づけられているのか。それは心のないロボットには、人の痛みや命の重みが理解できないからだ。

心を持ち、死を恐れたランシュには、それは充分に分かっている。ランシュは人として生きる道を選んだ。

ロイド自身も腹を括らなければならぬ。

これからの方が大変だという事は分かっていたが、ロイドはなぜかホツとして、心の霧が晴れたような気がした。

未だに涙ぐむユイを気にしながら、ランシュがロイドに問いかけた。

「本当にこれでよかったんですか？」

「今さら何を言っている。おまえが選んだ道だろう」

「でも……」

ロイドはニヤリと笑い、ランシュの顔を覗き込む。

「なんだ、医療チェックが心配なのか？ 医療機器を欺くくらい朝飯前だろう？ それとも、そんなことも出来ないようなポンコツなのか？」

「それは心配していません。オレはあなたが心配なんです。もしもオレのことがバレたら、あなたもタダでは済みませんよ」

不安そうな目で見つめるランシュに、ロイドはフツと笑みを浮かべて頭を撫でた。

「そんな事は承知の上だ。もしもその時は、共に墜ちてやる」

「先生……」

ランシュの目に涙が滲む。それにつられたのか、ユイも再び涙を浮かべた。

「ロイド……」

「あーっ、もう！ いちいち泣くな。どいつもこいつも！」

ロイドは二人の額を、次々に叩く。そしてランシュの額をもうひとつ叩いた。

「おまえ、さつきもオレのところで泣いただろう？ 体内の水分タンクが空になるぞ」

「食事の時補充したから大丈夫です」

「ったく」

指先で涙を拭いながら減らず口をたたくランシュを一瞥し、ロイドはユイを問い質した。

「そういえばユイ、どうしてこいつがロボットだと気付いた？ 小鳥が攻撃したからか？」

ユイはエプロンの裾で涙を拭い、鼻をすすりながら答えた。

「確信したのはその時だけど、もっと前から知ってたわ。だってランシュって、鼓動が聞こえないし、息してないんだもの」

鼓動は、抱きしめられた時に気付いたのだらう。だが呼吸はどうやって気付いたのか、見当も付かない。それを尋ねると、ユイはクスクス笑いながら答えた。

「あなたたちって色々似てるところがあるのよね。ほら、あなたがよくやる耳元でコソコソ話すの、ランシュも時々やるのよ」

ユイは耳元でコソコソ話されると、背筋がゾクゾクするから苦手だという。だがランシュの時には、なぜかゾクゾクしない。

ロイドに限らず、他の人でもゾクゾクするのに、どうしてランシュの時には平気なのか、不思議に思い原因を考えた。

そして、ロイドの時には耳や首筋に息がかかるのに、ランシュの時には声だけ聞こえて息がかからないことに気付いたらしい。

試しに自分の手を口元に寄せてしゃべって見たが、どうやっても息をかけずにしゃべることは出来なかったという。それで、ランシュが呼吸をしていないことに気付いたのだ。

ロイドはランシュを睨み、額を叩いた。

「呼吸を忘れる人間があるか！」

ランシュは額を押さえながら反論する。

「だってオレには必要ないし、あなただって意識して呼吸してないでしょう？」

「それはそうだが、大丈夫なのか？ 肺活量の検査もあるぞ」

「フリをするくらいは出来るし、機器の方はごまかせますから」

ヘラリと笑って、ランシュは事も無げに言う。

「まあ、今日の検査はいいとして、改良の必要はあるな。おまえ、しばらく人と至近距離での会話は控えろ」

「え？ ユイとも？」

ロイドは思い切り顔をしかめて、ランシュを睨んだ。

「ユイとは今後一切禁止だ」

「ええ?!」

不満そうな声を漏らすランシュを引っ張って、ロイドは玄関に向かう。

「さっさと行くぞ。遅刻する」

「行つてらっしゃい」

背後でユイが、クスクス笑いながら送り出した。

終章

夜になり、ロイドはいつもより早めに家に帰った。ランシュが戻って来たことで、科学技術局内は大騒ぎになり、ロイド自身もそれに追われていたが、他の局員たちも仕事の手に着かず、局内の仕事に停滞してしまったのだ。

明日になれば副局長に尻を叩かれて、仕事は回り始めるだろうが、騒ぎそのものはしばらく収まりそうにない。

玄関の扉を開けると、ユイがいつものように笑顔で出迎えた。挨拶のキスを交わした後、ロイドが一人な事に気付いて、不安そうに尋ねる。

「ランシュは？」

「検査が長引いてる。先に帰ってくれと言われた」

「変なところでも見つかったの？」

「いや、その前に事情説明や問診が長引いたんだ。検査の方は、あいつなら大丈夫だろう」

「よかった。じゃあ、帰ってくるのね」

「ああ」

ロイドが頷くと、ユイはホッとしたように微笑んだ。

ランシュとはこの二年間の経緯について、口裏を合わせてある。今後のことを考えると、ユイにも話しておいた方がいいだろう。

科学技術局に戻ることを知って心配していたところを見ると、ランシュが違法なロボットであることは知っているようだ。

いう事を聞かないランシュが、黙っていたかどうかは疑問なので尋ねた。

「おまえ、どこまで知っている？」

ユイは気まずそうに、上目遣いで見つめて白状する。

「えーと……ランシュの事なら、大体……」

そして慌てて補足した。

「ランシュを怒らないでね。私が、つつい色々訊いちゃったから」
「そんな事はしないし、する資格もない。オレはすでに犯罪者だ」
ランシュが違法なロボットだと知りながら容認し、虚偽の報告を行っている。科学技術局に知られれば、間違いなく裁かれ、重い罰が科せられるだろう。

ロイドはユイを抱き寄せ、髪をなでた。

「おまえを共犯者にしてしまったな」

「平気よ。私もあなたと一緒になら、どこまでも共に墜ちるから」

につこりと微笑むユイを促して、リビングのソファに移動する。

ロイドはランシュと口裏を合わせた、二年間の経緯をユイに話した。

ランシュは二年前、意識が朦朧とした状態で、誰かに拾われ遺伝子治療を受けた。

その者がなぜ、そんな事をしたのか不明だが、大方自分の研究成果を実証してみたかったのだろう。科学者なら、よくある動機だ。ランシュは好都合な実験体だったのだ。

術後目覚めたランシュは、病室に閉じ込められ、食事も小さな窓から差し入れられるだけで、誰とも顔を合わせていない。時々、医療ロボットがやって来て、検査が行われた。

そして充分快復した頃、視界を塞がれたまま連れ出され、ベルⅡグラীবに引き取られた。ランシュはそのまま、二年間をベルと共に暮らす。

ベルはランシュを治療した者の知人だと言うだけで、詳しくは教えてくれなかった。

ベルが亡くなった後、その病院に連れ戻されるのを恐れたランシュは、家を逃げ出した。そしてベルが生前よく通っていたお菓子屋に、救いを求めて訪れ、そこが偶然ロイドの家だったのだ。

だが成功したと思われる実験結果を、なぜすぐに公表しなかったのか。

それは違法と思われる技術を用いて行われた実験で、もしもラン

シユの容態が急変した場合、自分の身が危ないからだろう。ベルに監視させていたところ、公表に踏み切る前に、ランシユが逃げ出したのだ。

「よくできたシナリオだろう?」

ランシユが世話になった故人に、片棒を担がせるのは申し訳ないが、死人に口なしだ。ベルが追及されて、ボロが出る心配はない。

「おばあちゃんもランシユのためなら許してくれるわよ。でもどうして二年間も科学技術局に連絡しなかったのかって言われなかった?」

「言われた。だが、あいつは免職になってるからな。戻ったら監禁されるだけだから、それがイヤで連絡しなかった事にした」

ユイは途端に表情を曇らせる。

「やっぱり、局に戻っちゃうの?」

「いや、ここから通うことになる」

ランシユはもう分別のない子供ではないし、いつ命が尽きるかわからない実験体でもない。

それを局内に閉じ込めるのは、人道上問題がある。そこを諭してしばらくはロイドの監視下に置き、問題がなければ復職させる事になった。

「局としても、あいつの頭脳が民間にさらわれるのは痛いからな。満場一致で承認されたぞ」

「よかった。でもまた昼間は私ひとりになっちゃうのね」

ホツとしたように微笑みながら、ユイはフツと寂しそうな表情を見せた。それがロイドにとっては、少しおもしろくない。

ランシユは告白してふられたと言っていたが、気になったので尋ねてみた。

「おい、あいつが好きなのか?」

「え?」

面喰らったように目をしばたいたユイは、すぐにイタズラっぽく笑って答えた。

「好きよ。先生と違って、ランシュは優しくて親切で、よく気が利くし」

その表情は明らかにロイドをからかっている。ロイドはユイを抱き寄せ、ニヤリと笑った。

「聞き捨てならないな。罰として今度こそ気絶させてやるから覚悟しろよ」

てつきりいつものように真っ赤になってうろたえろと思ったら、

ユイはペロリと舌を出した。

「残念でした。しばらくお預けよ」

「なぜだ？」

首を傾げるロイドに、はにかんだような表情でユイは告げた。

「おなかに赤ちゃんがいるの」

ロイドは思わず眉をひそめる。ユイは以前、食べ過ぎの胸焼けを妊娠と勘違いして、ロイドをぬか喜びさせた事があるのだ。

「今度は本当なのか？」

「うん。ずっと生理が止まってて気になってたんだけど、ランシュやソータが来てごたごたしてたから、今日やっと病院に行って調べてもらったの」

「そうか」

ロイドはユイをギュッと抱きしめる。ユイも同じように抱きしめ返した。

耳元でユイが嬉しそうに囁く。

「あなた、来年にはお父さんになるのよ」

「ああ。なんか不思議な感じだな。家族が増えるって」

ユイが勘違いした時に夢見た、家族との情景が脳裏に蘇り、嬉しさがこみ上げてくる。ただ以前と違うのは、そこに子供たちと一緒に笑う、ランシュの姿がある事だ。

自然に頬が緩み、ロイドはユイの耳元で囁き返した。

「そついう事なら仕方ない。そのかわり毎日、思う存分キスしてやるからな」

ユイはくすぐったそうに首をすくめ、クスクスと笑う。

「二年前もお預けになった時、同じ事言ったわね」

「余計な事を思い出すな」

一度顔を上げて、ユイの額を叩く。視線が交わり、少しの間真顔で見つめ合った。

「あの頃とは違うぞ。二年前よりも、もっとおまえを愛してる」
「うん」

ゆっくりと顔を近付けると、ユイは少し上向いて目を閉じた。

「だからオレ以外の男を好きだと言っな」

一瞬クスリと笑ったユイの唇に、ロイドは口づける。そして宣言通りに思っ存分口づけた後、身体を離れた。

「もうひとり家族が増えるぞ」

唐突に宣言すると、ユイは目を輝かせた。

「それって、もしかして……」

「ああ。ランシュをオレの養子にする」

「きゃあ。もう、あなたって最高の犯罪者ね！」

ユイは飛び上がって喜び、ロイドの首に抱きついた。

自分が最高呼ばわりされるのは嬉しいが、犯罪者として最高という意味なら、なんだか複雑な気分だ。

ランシュは一応カードを持っているが、結婚前のユイと同じように特別に発行されたカードで、住民情報も名前と年齢、連絡先だけという曖昧なものだ。

そのため住民としての権利も、色々と制限されている。ロイドの養子になる事で、初めて人としての全ての権利を得る事が出来るのだ。

「じゃあ、ランシュは来年お兄ちゃんになるのね」

「あいつには、ママに対して変な気を起こさないように、しっかり躾けないとな」

二人して顔を見合わせて笑った。

ランシュが憧れて欲した、家族の居場所がここになる。

ロイドが、ユイと結婚するまで知らなかった小さな幸せ。

家に帰れば、家族が温かく出迎えてくれる。そんな何気ない幸せの瞬間を、今後ランシュにも味わってもらいたいとロイドは思った。その時、玄関が開き、ランシュが帰ってきた。

ロイドはユイと共に、笑顔を向けて出迎える。

「おかえり」

ランシュは少しの間戸惑ったようにロイドとユイを見つめたが、やがて嬉しそうに笑って答えた。

「ただいま」

（完）

終章（後書き）

最後まで読んで頂いて、ありがとうございました。

クランベールシリーズはこれで、全編完結です。

章のタイトル（サブタイトル）になっている英語は、コンピュータのコマンドや命令語です。言葉としての英語とは、微妙に意味が違います。

意味は以下の通りです。

S e t u p 〃 プログラムをコンピュータにインストールし動作環境を整える、命令群。

R u n 〃 プログラムを実行するコマンド。

D O W h i l e 〃 繰り返し命令。

R e s u m e N e x t 〃 エラーから復帰後、次のステップへという命令。

番外編 ランシュ改造計画（前書き）

男たちのちよいエロコメディ。

今回、ほとんど甘くありません。

「バイナリー・ハート」未読の方には、ネタバレとなりますのでご注意ください。

番外編 ランシュ改造計画

「とりあえず、全部脱げ」

「え？　ここで？」

少し眉をひそめてロイドを一瞥した後、ランシュは視線を巡らせた。

午後の日射しが、リビングの室内を明るく照らしている。室内中央では、ソファに座って身を乗り出すようにしながら、メモを取り、料理番組を見ているユイがいた。

当然のようにブラーヌは遺跡の調査に出かけたままだったが、他の面々は珍しく全員休みで家にいた。

ロイドはビデオカメラを片手に、ランシュの今の状態を撮影するため、リビングに呼び出したのだ。

ランシュの身体の改造は大がかりになるので、一度に全部は難しい。そもそも内蔵プログラムの改造以外は、科学技術局の研究室で行うのは困難なのだ。

研究室をあまり長時間立入禁止にすると、特に副局長からクレームが付きかねない。

設計図と仕様は、ランシュの記憶の中にしかない。免職になった時、強制的に処分させられたからだ。

そのデータ量も膨大なので、一度に取り出すのは時間がかかる。小出しにしてもらっているため、ロイドも全ての機能を把握していなかった。

今のところ、視力、聴力、筋力のデチューンと寿命の設定は終わっている。後は、皮膚の老化メンテのために、シミュレーションデータを作らなければならない。

一気に老けたらマズイので、緻密なデータ処理が必要になってくる。そのためには今の状態も、できるだけ細密でなければならないのだ。服を着たままでは、正確なデータが取得できない。

「この部屋が、うちの中じゃ一番明るいんだ」

「だって、ユイがいるのに……」

「ロボットが恥ずかしがるな」

「都合のいい時だけロボット扱いしないでください」

仕方なくロイドは、ユイに声をかけた。

「ユイ、その番組は録画して後で見てくださいか？」

ユイはこちらに目もくれず拒否する。

「やあよ。もうすぐ終わるのに、邪魔しないで」

にべもなく断られ、ロイドは嘆息した。

ユイは元々気が強い奴だったが、腹に子を宿してから、輪をかけてたくましくなったような気がする。頑固にも拍車がかかって、余計にいう事を聞かなくなった。これはおそらく、てこでも動かない

ユイを動かす事は諦めて、ロイドはランシュを説得する事にした。

「見ての通り、ユイはこちらに目もくれてない。気兼ねなく脱げ」

「気兼ねします。だいたい撮影するだけなら、局の研究室の方が、照明とかも都合がいいじゃないですか」

「人に見られたら困るだろう」

「そうですけど、別にオレの正体がバレる心配はないし……」

ユイに負けず劣らず、いう事を聞かないランシュは、しつこく食いつ下がる。

見られて困るのは、ランシュではなくロイドの方なのだ。

「裸のおまえを撮影してるんだぞ。オレに変な趣味があると思われたら困るじゃないか」

「ああ、なるほど」

やっと理解したランシュは大きく頷いた。そして、おもしろそうに笑いながら言う。

「確かに。ヘタすりゃ局長職の進退に関わりますよね」

「納得したなら、さっさと脱げ」

ロイドがそう言つと、ランシュは真顔に戻り、キッパリと言い切った。

「今、ここではイヤです」

「命令だ」

「オレにその言葉は通用しません」

こんな時、ランシュに絶対命令がインプットされていない事を厄介だと思う。

通常、人工知能搭載のロボットは、人に”命令”されれば、絶対命令が働いて、人に危害を加える事と、法に反する事以外は、従う事になっている。

しばらく睨み合った後、ロイドは苛々したようにランシュに尋ねた。

「どこでなら脱ぐんだ？」

ランシュは無邪気な笑みを、満面に湛えて答えた。

「女性と二人きりのベッドルームでなら」

ロイドは顔をしかめて、すかさず額を叩く。

「ふざけるな。女を抱いた事もないくせに」

額を押さえながらランシュは、ムツとしたように反論する。

「決めつけないでください」

「じゃあ、あるというのか？」

「ナイシヨです」

ほとんど局内に引きこもっていた上に、人に興味を示していなかったランシュに、そんな経験があるとは思えない。

「見栄を張るな」

「だから決めつけないでください。オレにはあなたの知らない二年間があるんですよ」

言われてみれば、ベルググラーヴと暮らしていた二年間の事を、ロイドはほとんど知らない。

だがその時、ランシュの身体は、すでにロボットだった。

素朴な疑問が湧いてきて、ロイドは尋ねた。

「おまえ、男としての機能はあるのか？」

ランシュは当然とばかりに、しれっと答える。

「ありますよ。生殖能力はありませんけどね」

生殖能力を追加する事は可能だったが、ランシュの遺伝子には欠陥がある。かといって他人の生殖細胞をもらっても虚しいので、断念したらしい。

機能的には可能だという事は分かった。だが、身を隠していたランシュに、そこまで深い付き合いのあった女がいたとは信じ難い。とりあえず機能を確認したくて、咄嗟に股間に手を伸ばし、わしづかみにする。ランシュは声を上げてロイドの手を払い除け、飛び退いた。

「何するんですか、いきなり！」

「ふーん。そんなところにもダメージセンサは働くのか」

「当たり前です。男の急所ですから」

という事は、感じるという事か。

腕を組み、むくれた表情で見上げながら、ランシュはロイドを警戒している。

「そのサイズじゃ、ものの役に立たないだろう」

「サイズは変わりますよ。普段からフルサイズだったら恥ずかしいじゃないですか」

「ほお、よくできてるな。脱いだついでに見せてみる」

目を見張りながら一歩踏み出すと、ランシュはものすごい勢いで射程圏内から遠ざかった。

「絶対イヤです。それってセクハラですよ」

「なんだって？」

耳慣れない言葉に問い返す。ランシュは更に下がって説明した。

「セクハラです。ユイから聞きました。性的嫌がらせの事です。あなたはセクハラエロ学者だと言っていました」

「ユイ！ 妙な事を吹き込むな。こいつは一度覚えた事は忘れないんだぞ！」

ロイドは思わず声を荒げて抗議する。すると料理番組は終わっていたらしく、いつの間にかこちらの様子を窺っていたユイが、平然

として答えた。

「だって事実じゃない。でも今のは、どっちかっていうとパワハラね」

「なんだそれは？」

「上司や目上の人が権力を背景にして、部下や目下の人に無理難題を突きつけたりする嫌がらせの事よ」

「オレは嫌がらせをしているわけじゃない。メンテをする上で、こいつの機能を知っておく必要があるんだ」

「そんなの書類で確認する事だって出来るでしょ？ ランシュが嫌がつてるんだから、立派な嫌がらせよ」

ユイは分かっている。書類だけではなく、実物を見て触って、確認したいと思うのは、科学者なら当然の事なのだ。

なにしろランシュの身体は、おそらく現在最高水準のヒューマノイド・ロボットだ。機械工学の科学者である自分が、その性能を全て知りたいと思うのは当たり前じゃないかと思う。

思うが、ランシュを完全に人間扱いしているユイには、分かってもらえそうにない。

ロイドにしても、中身がランシュである事は認めている。だが器がロボットである事を、決して忘れてはならないのだ。

言い訳するのを諦めて、ロイドは軽く息をついた。

中途半端に話を聞いていたユイは、ニコニコ笑いながら、とんちんかんな事を言う。

「でもランシュって、ホント人間と変わらないのね。子供も作れるなんて」

それを聞いてロイドは益々ため息を漏らし、ランシュは顔を引きつらせながら否定した。

「い、いや……子供は作れないから。男性機能があるっただけで……」

ロイドはここぞとばかりに反撃する。自分だけエロ学者呼ばわりされるのは不愉快だ。

「そうだ。子供も作れないのに、そんな機能だけ付けたこいつも、充分工口学者だぞ」

「オレは男の生理機能を忠実に再現して、実装しただけです。この身体は男なんだから当然です」

ロイドを睨みながら即座に反論したランシュは、一呼吸置いて顔を背けた。そして言いにくそうに小声で漏らす。

「それに、いつか恋人が出来た時、彼女の想いに応えられないとしたら辛いじゃないですか。そりゃあ、それだけが愛情表現じゃないとは思いますが……」

やはりそうかと納得し、ロイドは不敵の笑みを浮かべた。

「語るに落ちたな。」いつか”って事は、おまえその機能を使った事がないだろう」

「え、そ、それは……」

いつもは、ああ言えばこう言うランシュが、珍しく言い淀む。激しい心の動揺が、人工知能に混乱を引き起こし、言葉が出て来ないようだ。

その、うるたえぶりから確信を得たロイドは、笑いながらランシュの頭をクシャクシャと撫でた。

「そうかそうか。まあ、おまえの人生はこれからの方が長いんだ。

”いつか”おまえの事を理解して受け入れてくれる、いい女が現れるさ」

「勝手に納得して完結しないでください」

ロイドの手を払い除け、乱れた髪を整えながら、ランシュは不愉快そうに顔を歪める。向こうからユイが、ニコニコしながら嬉しそうに声をかけた。

「ランシュ、初めての恋人は、私にも紹介してね」

「……うん」

ユイにまで断言され、ランシュは力なく肩を落とした。

少ししてランシュは、ロイドに問いかけた。

「そういえば聞いてませんでしたけど、オレの寿命って何年あるん

ですか？」

「わからない」

「へ？」

ロイドの答えに、ランシュは目を丸くする。

「三日後に尽きるかもしれないし、五十年後かもしれない」

「どういう事ですか？」

訝しげに眉を寄せるランシュに、ロイドは説明した。

ランシュの寿命は、ロイドの生体反応に連携する形に設定してある。つまり、ロイドの寿命が尽きれば、その三日後にランシュも機能を停止するのだ。

同時に死亡したら、ユイが残されていた場合、事後処理等が大変になる。ロイドが死亡した後、ランシュのメンテナンスを行う人間もいなくなるので、その方が都合がいいのだ。

話を聞いてランシュが、不満そうに訴えた。

「どうせなら、ユイと一緒にの方がよかったな」

「ユイにおまえのメンテは出来ないぞ。それに、おまえとユイを二人きりにしてオレが先に死んだら、死んでも死にきれない」

「なるほど、そういう裏があつたんですか」

「そのために、おまえに殺されたら、たまらないしな」

「ああ！ その手があつたか」

突然ランシュは、名案を思い付いたように手を打った。そして、ニツコリ笑いながら物語を語る。

「夫に先立たれて悲しみに暮れる未亡人を、密かに想い続けていた青年が親身になって慰める。その優しさにいつしか未亡人の悲しみは和らぎ、次第に青年に心を開いていく。やがて二人は悲しみを乗り越えて、堅い愛情で結ばれハッピーエンド。ってよくあるラブロマンスですよ」

「実は横恋慕していた青年が、未亡人を手に入れるために、夫を死に追いやった張本人だったというオチか？」

「サスペンスホラーにしないでください」

そう言った後ランシュは、意味ありげに目を細めて続けた。

「オレにはせつかく絶対命令がないんだから、寿命を設定する前に気付けばよかったな」

背筋に冷たいものを感じて、ロイドは息を飲む。

「本気か？」

短く尋ねると、ランシュは邪気のない笑顔で答えた。

「冗談に決まってるじゃないですか」

ロボットの言う冗談など、冗談に聞こえない。

話を逸らすために、ロイドは精一杯明るい声でランシュを誘った。

「よし。おまえ、とりあえずセクサロイドで筆おろししとけ」

「はあ？」

呆氣にとられて目を見開くランシュの肩を抱いて、ロイドは玄関に誘導する。

「いや、オレは別に……」

「心配するな。相手は百戦錬磨だ。手取り足取り教えてくれる」

ユイの前を素通りし、玄関の扉に手をかけた時、背後で陰しい声が響いた。

「ちよつと、そのエロ学者たち！」

「え？ オレも？」

情けない声を漏らすランシュと共に振り返ると、両手を腰に当てて仁王立ちしたユイが、こちらを睨んでいた。

眉をつり上げて口元に笑みを浮かべ、低い声で静かにユイが問いかける。

「どこへ行くつもり？」

ロイドは瞬きも忘れて、ランシュと互いに身を寄せ合い、二人して硬直した。

背筋どころか、全身が凍り付いたような気がした。

(完)

番外編 二人きりの記念日（前書き）

臨月のユイとロイドの初プレゼント。

「バイナリー・ハート」未読の方には、ネタバレとなります。

番外編 二人きりの記念日

終業時間を知らせる合図が、科学技術局内に鳴り響く。もつとも、この合図を聞いて、帰り支度を始める者は、ほとんどいない。

皆、夕方の休憩時間を知らせる合図くらいに思っているようだ。科学者たちは、熱中すると時間を忘れる者が多い。時々現実世界に引き戻すために、合図を鳴らしているらしい。

一時期は目が回るほど忙しかった局内も、今はすっかり落ち着いている。ランシュが正式にロイドの助手として職場復帰してから、ロイド自身の仕事も随分と楽になった。

いつもはもう少し遅くまで残っているのだが、今日は早く帰らなければならぬ。出がけにユイが、なるべく早く帰ってきてと言ったからだ。

理由は教えてくれなかったが、減多にわがままを言わないユイが、そういう事を言うからには、何か大事な事に違いない。

それを踏まえて、今日片付けなければならない仕事は、定時まで片付けた。残っているのは、明日でもかまわないものだけだ。

副局長がいたら文句を言われるかもしれないが、彼女はこのところ自分の研究が佳境に入っていて、ロイドの尻を叩きに来る回数がいつもより減っている。

見つかる前に部屋を出ようと、定時の合図と共にロイドは席を立ち、白衣を脱いだ。

ランシュも共に帰ってくるように言われていたので、研究室に迎えに行こうとすると、本人が局長室にやってきた。白衣を羽織ったままで、全く帰り支度をしていない。

ロイドが抗議するように、少し眉を寄せて見つめると、ランシュは申し訳なさそうに苦笑した。

「先生、オレ、今夜泊まりになりました」

「は？」

ランシュが言うには、副局長に補佐を頼まれ、一晩付き合わなくてはならないらしい。だが、副局長の専門はバイオだ。機械工学専門のランシュに、補佐など出来るのか疑問だ。

「おまえに手伝える事なんてあるのか？」

「研究の方は手伝えないんですけど、遠心分離器の調子が怪しいらしくて……」

今修理に出して何日も使えないのは困るし、かといって途中で壊れたらもつと困るので、その場合、応急処置を頼みたいという事らしい。

ロイドは大きくため息をついた。

「ユイには知らせたのか？」

「はい。そういう事情なら仕方ないって言っていました」

どうやらユイの用事は、二人揃ってなければならぬわけではないようだ。

「久しぶりに二人きりの時間を楽しんで下さい」

笑顔で送り出すランシュに、忘れず夕食を摂る事を言い残して、

ロイドは一人で科学技術局を出た。

人間なら一食や二食抜いたところで、身体が動かなくなる事はないが、ランシュはきっちり三食摂らないと、充電が必要になる。精巧な身体は、案外エネルギー消費量も大きいらしい。

充電は家庭用の電源で簡単に行えるが、そんなところを他人に見せるわけにはいかないのだ。

日暮れ前のラフルール商店街は、いつもロイドが帰る頃より開いている店が多い。人通りも多く、賑やかだ。

毎日前を通るのに、そこが何の店か初めて知った店もある。そんな店の一つ花屋の店先で、黄色い実を付けた鉢植えがロイドの目を引いた。近寄ってみると木苺のようだ。

ユイが庭に植えた木苺は、赤と青と黒だ。黄色は珍しい気がする。形は小さい粒が密集した、赤い木苺と同じような形だ。まだ熟れきっていないだけで、その内赤くなるのかと店員に尋ねたら、元々こんな色だという。

珍しい木苺をユイに見せてやりたくて、ロイドはその鉢植えを購入入して家路についた。

玄関を入ると、ユイが大きな腹を抱えて、笑顔で出迎えた。

以前は抱くたびに小骨が当たってしょうがなかったが、体つきも少し丸みを帯びている。本人以上に頑固で全く成長しなかったささやかな胸も、我が子のために見違えるほど成長していた。

ユイのように大きな腹を抱えた妊婦は、克蘭ベールでは珍しい。自然分娩は母子共に様々なリスクを伴うので、安定期に入ったら皆人工子宮に胎児を移してしまうからだ。

ロイドもそうするように勧めたが、ユイは「ニッポンのお母さんは、みんな自分のお腹で赤ちゃんを育てて産むのよ」と言って拒否した。

ブラー又は相変わらず、遺跡を点々としていて家にいない。ランシュもロイドと共に、科学技術局に通うようになった。彼はなるべく早く帰らせるようにしているが、昼間一人になるユイに、何かあったとはとロイドは心配だった。

だがロイドの心配をよそに、胎児は何事もなく順調に育っているようだ。

ユイは来月、検診の結果問題がなければ、出産に備えてニッポンに帰る。

医学的には克蘭ベールの方が進んでいるが、自然分娩に対応できる医師や看護師が、圧倒的に少ないのだ。

色々と病院を当たってみたが、皆一様に人工子宮に移す事を勧め

た。自然分娩にこだわる意味が分からないと。

ロイドにしても意味は分からないが、頑固なユイの意思を曲げさせる方が困難なのだ。

ラフルールから遠く離れた田舎町には、対応できる病院があったが、あまりにも遠すぎる。

局長のロイドが、私事で何日も局を留守にするわけにもいかないかといって、克蘭ベールの勝手が分からないユイの両親やソータに付き添いを頼んでも不安なので、ユイの提案で実家に帰る事になった。

ニッポンの産婦人科医院は、どこでも対応できるらしい。人工子宮などないという。

挨拶のキスを終えると、ユイは目ざとくロイドの持った鉢植えに興味を示した。

「黄色い木苺だ。珍しいだろう」

そう言って差し出すと、ユイは目を輝かせて受け取った木苺を見つめた。

「ホント。かわいい。これ、私にくれるの？」

「ああ」

「ありがとう。明日、庭に植えるわね」

ユイはラッピングされた鉢植えを抱いて、嬉しそうに笑った。想像以上の好反応に、ロイドもすっかり気をよくする。

一旦二階に上がり、荷物を置いて再び一階に戻って来ると、食卓の上にはいつもより豪華な料理が並んでいた。そして食卓の中央には、赤いソースで”2”と書かれた、巨大なケーキが鎮座していた。それを目にしたロイドは、その時初めて、ユイが早く帰ってきてと言った理由を悟った。

今日はユイが定めた結婚記念日だった。

ラフルールの役所に届けを出して、正式に結婚したのはランシユがやって来た頃だが、ユイはニッポンで結婚式を挙げた日を結婚記念日だと決めている。

数ヶ月のズレがあるので、去年はすっかり忘れていて、不機嫌にさせてしまった。

今年もあやうく、不機嫌にさせてしまふところだった事は黙っておこう。

先ほど木苺の鉢植えに想像以上の好反応を示したのは、記念日の贈り物だと思ったからだろう。

たまたま目について買ってきた事も、黙っておく事にする。

ロイドが席に着くと、ユイは照明を暗くして、ケーキに二本の細いローソクを立てた。ロイドがそれに火を点ける。二人の周りを、オレンジ色の柔らかい光が包んだ。

ローソクの炎の向こうで、ユイが微笑みながらグラスを掲げた。

「二人の結婚記念日に乾杯。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそよろしく」

互いに笑みを交わして、グラスを傾ける。

そしてそれぞれ一本ずつ、ローソクの炎を吹き消した。

照明を元に戻し、いつものように食事を始める。

「ランシュがいなくてもよかったのか？」

ロイドが尋ねると、ユイは少し気まずそうに苦笑した。

「うん。本当はいて欲しかったんだけど、もしかしたら気を遣わせちゃったのになって……」

ランシュは今日が結婚記念日だと知っていたらしい。

数日前からユイが少し浮かれ気味で、やたらとロイドの仕事の状態を尋ねたりしていたからだ。ロイドにはユイが浮かれている事は分からなかったが、ランシュはセンサで心理状態を察知しただろう。どうして浮かれているのか訊かれたので答えたという。

「夕方に連絡があった時、オレの事は気にしないで久しぶりに二人きりの時間を楽しんでねって言ってたの」

ロイドも帰り際に同じ事を言われた。案外、副局長に補佐を頼まれたというのも、方便だったのかも知れない。

思わず頬が緩む。二人とも騙されたフリをしていようと、示し合

わせた。

食事を終え、二人で後片付けを済ませ、リビングに移動する。ソファに座ると、ユイは鉢植えの木苺を観察し始めた。

黄色い実は、まだ一つしか実っていない。他は花びらを落としたばかりの青い実か、白い花ばかりだった。

「たくさん花が咲いてるから、いっぱい実が付くといいわね。どんな味をするんだろう」

「食ってみればいいだろう」

「え？　だって一つしかないし。半分こする？」

「そんな小さいものの半分にしたら味が分からなくなるぞ。オレはいから、おまえが食え」

「うん。じゃあ、食べてみる」

ユイは慎重に木苺の実を枝から外し、嬉しそうに口に放り込んだ。「あ、甘酸っぱい。でもラズベリーみたいに独特な風味がなくて、私、こっちの方が好きかも」

益々嬉しそうに笑うユイを見て、ロイドも少し興味が湧いてきた。「オレにも味見させろ」

ユイを抱き寄せ口づける。口の中に少しだけ、甘酸っぱい木苺の味が広がった。

ユイが身重なので、キスだけというのは物足りない気もするが、せつかくランシュがくれた時間だ。

彼の厚意に甘えて、今夜は新婚の時のように、二人きりの時間を存分に楽しもうとロイドは思った。

（完）

番外編 真意 (1) (前書き)

本編終了から3日後の話です。
当然ながら、本編のネタバレを含みます。

番外編 真意 (1)

結衣の耳元に顔を近付け、かすれた声でランシュが囁く。

「ねえ、ユイ。感じる？」

「ふふっ」

耳と首筋にかかる吐息がくすぐったくて、結衣は笑いながら首をすくめた。

「先生と比べて、どう？」

「同じよ。何も変わらないわ」

「じゃあ、こっちは？」

ランシュは結衣の手を取り、自分の身体に当てる。手の平に伝わる、温もりと鼓動。

「一緒よ」

「これで、バレないね」

そう言ってランシュは、ニッコリ笑った。

結衣はランシュの身体に手を当てたまま尋ねる。

「ねえ、ランシュ。少しドキドキしてる？」

「そりゃあ、ユイに触れてるから。オレの感情や運動量に連動するようになってるんだ」

「へえ」

結衣が感心して目を見開いた時、ランシュの後ろからぬつと手が伸びてきて、彼を結衣から引き剥がした。

「いつまでくつついている。ユイと至近距離での会話は禁止しただろっ」

ランシュの首に腕を巻き付けながら、ロイドが不機嫌そうにわめく。

「離してください」

ロイドの腕をすり抜けて、ランシュはムツとした表情でロイドを

睨んだ。

「あなたが何も感じないって言うから、敏感なユイに確かめてもらってたんじゃないですか」

「男に囁かれて感じるわけないだろう」

当然だとばかりに言い切るロイドに、ランシュは肩を落としてため息を漏らした。

「そういう意味じゃありませんよ。何のテストだと思ってるんですか」

ランシュがロイドの監督の下、職場復帰を果たして三日が経った。精巧なヒューマノイド・ロボットであるランシュは、見た目も言動も人間と変わらない。

ただ二点だけ、結衣に気付かれた違いがあった。ひとつは鼓動が聞こえない事。もうひとつは呼吸をしていない事だ。

どちらも、よほど近付かない限り気付かれる事はないし、ランシュが意識していれば問題はない。

たとえば医療機器で脈拍を測定されたとしても、ランシュが機器のプログラムに干渉して、ごまかす事は可能なのだ。

ロイドが言うには、人を騙すより機械を騙す方が簡単らしい。

人に近付かないように気をつけていれば済む事だが、それではランシュの交友関係が閉じられたままになる。

人と変わりにくく生活するために、他の改造に先駆けて、ロイドが改良を施した。

ランシュが結衣に恋心を抱いていた事を、ロイドは本人から聞いたらしい。だからなのか、ランシュが少しでも結衣に近付くと不機嫌になる。

ランシュ本人はというと、家族となつてからはある程度吹っ切れたようで、以前のような思い詰めた様子はない。

むしろ元々ヤキモチ焼きのロイドをからかうために、わざと結衣に近付いて楽しんでいるようだ。

それはロイドにも分かっているようで、だから余計に不愉快なだろう。

過去のわだかまりも解消し、二人の間に妙な緊張感もなく、会話も以前より増えてきた。

ランシュが免職になるまでの二人は、本来こんな感じだったのかもしれないと結衣は思った。

未だに睨み合っている二人に、結衣は苦笑して声をかける。

「親子ゲンカもほどほどにして、みんなでお茶にしましょう」

「……え……」

ロイドとランシュは同時に声を発して結衣を見た。そして二人とも同じように眉をひそめ、さも嫌そうに互いを見つめ合う。

親子だと言われたのが気に入らないのだと結衣も悟った。

結衣はため息と共に二人を諭す。

「だって住民情報の上では親子でしょ？」

結衣の言葉に、二人はすかさず反論した。

「確かにデータの上ではそうだが、こんな母親に色目を使う口の減らない息子なんて願ひ下げた」

「オレだって、ちょっとでも母親に近付いただけでヤキモチを焼く父親なんて嫌ですよ」

二人とも結衣を母親呼ばわりしている時点で、互いを親子だと認めているようなものだと思付いていないのだろうか。結衣は思わずクスリと笑う。

「やつぱり、よく似てるわね。あなたたち」

ロイドは益々顔をしかめ、ランシュはキョトンと首を傾げた。

三人で食卓に移動し、結衣の作ったケーキを囲んでお茶を飲む。

ロイドもランシュも甘いものは大好きなので、先ほどまでの不機嫌はどこかに飛んで行ったようだ。結衣には分からない機械の話で時々言葉を交わしながら笑ったりしている。

ほんの少し前まで殺伐としていた家庭が、まるでウソだったかのようになり、ゆったりと流れる午後の穏やかな一時に、結衣は幸せをか

みしめていた。

ランシュが家族になって、本当によかったと思う。それと同時に、結衣にはひとつの気がかりがあった。

人だった頃のランシュには、本当の母親がいたのだ。そしてロイドの話によると、その人は今も健在だという。

結衣は思いきってランシュに尋ねてみた。

「ねえ、ランシュ。うちの子になった事をお母さんにはちゃんと報告したの？」

ケーキをつつきながらロイドと談笑していたランシュが、心底怪訝な表情で問い返した。

「オレのお母さんは、ユイでしょ？」

ユイは少し眉をひそめてランシュを見つめた。

誰の事を言っているのか、ランシュには分かっていなかった。

一瞬、副局長の顔が脳内でピックアップされる。続いて、知っている限りの女性の顔が、めまぐるしくフラッシュバックした。けれど母と呼べる人は、ユイの他に見つからない。

ランシュは促すように、首を傾げてユイを見つめる。

ユイは硬い表情のまま、ランシュに教えてくれた。

「ランシュを産んだ人がお母さんでしょ？」

「オレを産んだのは科学技術局の人工子宮だよ。今の身体はオレ自身だし」

ランシュの答に、ユイは少し苛々した調子で言う。

「何言ってるの。実際に産んだのは人工子宮でも、作ったのはお母さんでしょ？」

検索に引っかからないはずだ。あの人の顔をランシュは一度も見た事がない。自分の生い立ちの一部として、話に聞いたただけだ。

「ああ、あの人の事」

やっと納得してつぶやくと、ユイは非難するようにテーブルの端を軽く叩いた。

「そんな言い方しないの。どんな生まれ方をしたとしても、お母さんがいなければ、ランシュはこの世にいなかったのよ」

確かにその通りだが、ランシュはあの人と血の繋がりが無い。体細胞クローンとして生まれたランシュは、遺伝子の全てをあの人の夫から受け継いだ。

血の繋がりは、今の家族であるユイやロイド先生ともないが、あの人は一緒に暮らした事はおるか、顔を見た事も口をきいた事もない。

禁忌とされる体細胞クローンを作った事で、ランシュが生まれて間もなく、あの人は刑に服した。そして今も服役中で、一生牢から出る事はないという。

ランシュは彼女を母だと思った事がない。だから会いたいと思っただ事もない。

子どもの頃は局から出る事を禁じられていたし、わざわざ会う機会もなかった。彼女もランシュの事など忘れているのではないだろうか。

バイオ科学者である彼女には分かっていたはずだ。あの頃の技術では、作られた体細胞クローンが長生きできないという事を。

あれから二十年経った今、ランシュが生きているとは思っていないだろう。

ランシュの末路を分かっているながら、犯罪に手を染めてまで、彼女がランシュを作った理由は明白だ。

「あの人は、事故で亡くなった夫を蘇らせたかったただだよ」

ランシュが吐き捨てるように言うと、ユイは意外そうに目を見開いた。

「そんな風に思ってたの？」

「リスクが大きすぎるのに、人が愚かな行動に出るのは、激しい感情に支配された時だもの」

彼女は夫の死を受け入れられなかった。だから、なかった事にしなかったのだ。

ユイは優しい笑みを浮かべ、なぜか慈しむようにランシュを見つめる。

「お母さんがお父さんを愛していた事は、ランシュにも分かっているのね」

「わかるよ。オレも激しい感情に支配されて、法を犯した事があるからね」

刻々と迫り来る死が怖くて、命を長らえるために、ランシュは今の身体を作った。

その時の感情は記憶にない。けれどそうでなければ、二つの法を犯してまで、違法なヒューマノイド・ロボットを作った理由に説明がつかない。

正しい判断を狂わせる激しい感情。

それがあの人にとって、夫への愛情とその対象を失った失意や絶望である事は、ランシュにも分かる。

だがユイは、まだ他に何かあるとでも言うように、意味ありげな笑みを浮かべている。

ユイは感情の変化が、すぐ顔に出る。それを証明するように脳内で分泌される物質も、めまぐるしく変化する。

先ほどは怒りや不快を表すノルアドレナリン値が上昇した。今はセロトニンが上昇している。怒りを鎮めるためだけではないようだ。微かにベータエンドルフィンやドーパミンも上昇している。ランシュの答に、何かを期待しているのだろうか。

「お父さんへの愛から来るお母さんの行動の意味、ランシュには分からない？」

あの人の違法な行動が、愛する夫を蘇らせる事以外に、何かあるというのだろうか。

反応を窺うように、ユイがランシュを見つめる。微かに脈拍が上昇。答を期待されているのが分かる。けれどランシュには、正解が分からなかった。あの人のデータが少なすぎる。

答える事が出来ず黙り込むランシュに、それでもユイは納得したように笑った。

「分からないのは、ランシュが男の子だからかな」

男には分からない事？ ランシュは咄嗟に、隣にいるロイド先生に尋ねた。

「先生は分かりますか？」

「ノーコメント。オレは知っているからな。教えたらユイに怒られる」

ランシュがユイと話している間に、黙々とケーキを食べ続けてい

た先生は、ワンホール最後の一切れを口に放り込みながら、涼しい顔でそう言った。

先生はユイを溺愛している。元々は強引なくせに、仕事が忙しいとかやむを得ない事情を除いては、決してユイの機嫌を損ねる事はない。追及しても教えてはくれないだろう。

何食わぬ顔で、ユイとランシュに切り分けられた残りのケーキを引き寄せる先生を横目に見ながら、ランシュは途方に暮れる。

一人置いてきぼりを食らったランシュの様子に、ユイはプツと吹き出しながら提案した。

「気になるなら、お母さんに直接訊いてみれば？」

「え……いいのかな」

相手は科学に関する法を犯した犯罪者だ。一度は法に触れて免職になった自分が、会いに行ってもいいのだろうか。おまけにあの人は、ランシュと繋がりのある人だ。

黙って局長である先生を見つめると、あっさり了承された。

「かまわないだろう。刑務所だし、どうせ二人きりで話す事は出来ないんだ。明日、一応局に訊いてみる」

許可が下りれば次の休みに、ユイがランシュの母だと言う、あの人に会う事になった。

ユイは再び優しく微笑んでランシュに言う。

「ランシュ、今まで一度も会った事ないんでしょ？ 一度でもいいから、お母さんに会ってあげて」

会いたくないと思うほど、あの人の事を恨んだり憎んだりはいない。ただ記憶の片隅に埋もれてしまうほど、興味がないだけだった。

けれどユイの言った、男には分からない理由がなんなのか知りたかった。

あつさり許可は下りた。先生が言った通り、二人きりで話す事は出来ないかららしい。五日後にあの人に会う事が決まった。

特に感慨もない。相変わらずあの人本人には興味がない。母だと言われてもピンと来ない。

ただ、ユイの言った事だけが気になっていた。

あの人のデータを集めようと、記憶の奥底を探ってみる。けれど元々新生児の記憶など、ないに等しい。

やわらかな温もりに包まれて安心している記憶だけ、かろうじて探り出す事が出来た。

人工子宮を満たした羊水の記憶なのだろうか。

いくら探っても、あの人の顔は出て来ない。

男には分からない理由を、あの人のデータ以外から探り出す事は、ランシュにとって困難を極めた。

なにしろランシュは、女を知らない。ユイ以外でプライベートな会話を交わした女性すら、片手で数えるほどしかないのだ。女の考える事など、見当もつかない。

「女心って、分からないなあ」

うつかりつぶやいたところを、すかさず先生に突っ込まれた。

「なんだ、いきなり」

ランシュはハツとして、思考回路を一本化する。今は科学技術局で仕事だった。

コンピュータに向かい、ロイド先生から任された制御用プログラムを作成している真つ最中だったのだ。

作業内容は仕様書を確認しつつ、その通りにプログラムを作成するという、ランシュにとっては単純作業だ。人工知能をフル稼働さ

せるほどの事でもない。

思考と動作制御を分割し、マルチタスクで動いていたのだ。片方では仕事を行い、もう一方でユイの出した課題に取り組んでいた。

ロイド先生が嬉々とした表情でランシュに尋ねる。

「好きな女でも出来たのか？」

何を期待しているのか、センサに頼るまでもなく丸わかりだ。ランシュの関心が他の女に移れば、自分が安心できるからだろう。

ユイを好きな気持ちは変わらない。けれど想いは、恋愛感情から家族に対するそれへと変化してきている。

なにしろこのラブラブ夫婦の間には、毛筋ほども割り込む余地はない。

一度はユイを先生から奪ってやろうと思った事もあった。

全くそんな気はなかったが、復讐をしに来た事になっていたし、愛する人を奪われるなんて、これ以上ない復讐ではないかと考えたからだ。

けれどこの先も一緒に暮らしていく事になるし、データの上では息子になってしまったわけだし、このまま想い続けても不毛だと悟った。

なによりユイが、そんな事は望まないだろう。

こんなところは、合理性を重視する人工知能の計算結果なのかな、と思わなくもない。生身の人間だったら、不毛だと分かっているても想い続けるものなのだろうか。

ユイの他に恋愛経験のないランシュには、これも難解な命題だった。

ランシュは気を取り直して、先生の期待を裏切る。

「違います。ユイの言った事が分からないからです」

「なんだ、まだ考えていたのか。どうせ次の休みには分かる事じゃないか」

途端にどうでもよくなったのか、先生は投げやりに言う。

「そうですけど、気になるんですよ」

「おまえ、今まで彼女の事を気にかけて事はなかっただろう」

「会った事もないし、記憶にもありませんね。奥まで探っても本当に見つからないんですよ。彼女のデータ」

「だろうな。生まれて三日じゃ」

「え？」

先生がサラリと口にした言葉が、ランシユの心に引かかった。自分が生まれてすぐに、あの人は収監されたのだと思っていた。

「三日？ その三日間、オレはあの人に育てられたんですか？」

「詳しい事はオレも知らない。その頃はまだ部外者だったからな。彼女が逮捕されたのはおまえが生まれた三日後だと聞いている」

ランシユは生まれてから十六年間、科学技術局から出た事がない。当然ながらその三日間も局内にいたのだろう。

ヒトを培養していたのだ。生まれるまでもバレないように気を遣っていたはずだ。泣くのが仕事のような新生児を、局内に隠しておくのは難しい。

元々ランシユは、あの人の夫の身代わりとして作られた。普通に考えれば、急速成長用の培養槽に、すぐにでも移し替えるのが妥当だろう。だが、そうした記録が残っていない。

だから生まれてすぐに、泣き声でバレて彼女が捕まったのだと思っていた。

三日もの間、どうやって赤ん坊を隠し通せたのだろう。彼女に対する疑問が、またひとつ増えた。

考え込むランシユに、先生が渋い顔で忠告した。

「おまえの事だから造作もないだろうが、ホストを探るのはほどほどにしとけよ。足が付いたらヤバイ」

「分かってます」

実のところ、局のホストコンピュータなら、すでに探った後だ。開局からこれまでの研究成果や事件記事、局員の個人情報まで、局内の情報は全てここに収められている。

あの人が起こした事件は、世間を騒がせた大事件だ。記録が残っ

ていないわけがない。ランシュも真つ先に調べた。

もちろん、下っ端局員のランシュにはアクセス権限すらないので、勝手に侵入したのだが。

リスクを冒した割に、ランシュが知っている以上の大した情報は得られなかった。

「女心なら女に訊けばいい。ヒントくらいは得られるかもしれないぞ。フェティにでも訊いてみたらどうだ？」

「副局長に？」

先生はニヤニヤ笑いながら席を立つた。何か企んでいる。出入口に向かいながら更に続ける。

「オレはこれからあいつの小言を聞きに行ってくる。おまえもくだらない事を訊くなと一緒に怒られたらどうだ」

どうやらこれから局長の仕事をするために、局長室に向かうようだ。企んでいる事が、あまりに子供じみていて呆れる。

「それはあなたの仕事ですから。オレは遠慮しておきます」

「遠慮するな。なんならオレの分までくれてやってもいいぞ」

行くのを渋っているのか、立ち止まって食い下がる先生に、ちょっと意地悪を試みたくなった。

「オレは副局長に怒られた事ってほとんどありませんよ。ひどく怒られたのは、免職になった時くらいです。副局長って昔から生真面目で厳しい人ですけど、プライベートでは優しくて可愛い人ですよ」

「ちよつと待て。なんでおまえがあいつのプライベートを知っている？」

先生が素の副局長を知らない事は承知している。案の定、おもしろいほど動揺した。

先生は仕事の上でしか副局長と接した事がない。けれど局員になる前のランシュは、仕事以外で接する事が多かったのだ。

子どもが相手だからか、副局長も今のよう堅い印象はなかった。先生は眉をひそめて、恐る恐る尋ねる。

「もしかして、あいつも笑う事があるのか？」

「よく笑いますよ。当たり前じゃないですか」

あえて過去形では言わずにおく。

「信じられない！」

とうとう先生は頭を抱えた。

そこへ研究室の扉を勢いよく開け放つて、噂の副局長が怒鳴り込んできた。

「局長！　いつまで放置なさるつもりですか！　昨日の分もまだ片付いてないでしょう」

「フェティ！　おまえは、そんなきれいな顔で、どうしてオレには怒ってばかりなんだ！」

動揺したまま脈絡のない抗議をする先生に、副局長は涼しい顔で返した。

「あなたが怒らせるからです。さっさと仕事を片付けてください」

先生は一瞬絶句して、ブツブツ言いながら、副局長と共に研究室を出て行った。

二人を見送ったランシュは、ひとりクスリと笑う。そして再び思考を分割すると、仕事をしながらあの人の事を考え始めた。

朝からユイの方が、なぜかソワソワしている。

今日はあの人に会いに行く。いらないうのに、わざわざ差し入れのお菓子まで焼いてくれた。

ユイは定休日だが、先生は仕事に出かけてしまった。久しぶりにユイと二人きりの昼間だ。

結局いくら考えても、あの人の謎は解けなかった。

家を出る時、ユイに釘を刺された。

「お母さんによろしくね。色々思うところはあるかもしれないけど、ちゃんと挨拶はするのよ」

「うん」

苦笑するランシュの背中をポンと叩いて、ユイは笑顔で送り出した。

相変わらず心配性だ。自分から会いに行っておきながら、口も聞かないほど、そこまで子どもじゃない。

お腹に子どもがいるからか、ユイはどんどんお母さんっぽくなっていく。ランシュのポジションは以前のような友人や弟から、すっかり息子に変わってしまったようだ。

そう思うと、ちょっと寂しい気もする。

けれど、おばあちゃんと暮らしたあの穏やかな日々、そして再び研究が続けられる未来と、同時に戻って来たのだから、これ以上贅沢は言えない。

いつかユイ以上に、大切に思える女性と巡り会えるのかな——そんな事を考えながら、ランシュはラフルールの商店街を抜け、官庁街の方へ向かった。

刑務所は官庁街の外れにあった。広大な敷地が高い塀で囲まれ、

頑丈な鋼鉄製の扉に閉ざされている。見た目は科学技術局と大差ないが、来る者を拒む独特の雰囲気があった。

少しの間外から様子を眺め、建物に張り巡らされたセキュリティをチェックする。さすがに一般企業や他の官庁舎に比べて厳しいが、コンピュータ制御の電子機器を欺く事はランシュにとっては容易い。センサの感度を上げて気合いを入れると、ランシュは入口横の守衛所に向かった。

守衛に用向きを伝えると、大きな鉄の扉の横で、人用の小さな扉がスライドした。中に入ってすぐの小部屋で、手荷物と別々にセキュリティチェックを受ける。

何も問題はなく、すぐに面会室へ案内してもらった。当然だ。こんなくだらない事で、ヘマはしない。

刑務所は内部も、どことなく科学技術局に似ていた。明るく真っ白な廊下を、案内の刑務官に続いて黙々と歩く。廊下の両脇は壁で、外は見えない。一見殺風景だが、いたる所に監視カメラや赤外線センサが設置され、見えない監視の目を光らせていた。

突き当たりを左に曲がり、少し行ったところにある扉を開くと、案内人はランシュを中に通した。

真っ白い壁に囲まれたその部屋は、十歩も歩けば正面の壁に突き当たるほどの狭さだ。左手にはそれぞれの角に一人ずつ刑務官が立っている。ここも監視カメラと赤外線センサが、刑務官と共に睨みをきかせていた。

右手は上半分が強化ガラスで出来た壁で、その前にカウンタがあり、丸い椅子が数脚置かれている。ガラスの向こうにも同じようにカウンタがあり、その向こうの白い壁には重そうな鉄の扉があった。ランシュは促され、カウンタの前に立つ。程なくガラスの向こうの扉が開き、刑務官が入ってきた。その後ろにチラリと見えた頭の先に、ランシュは一瞬ギョツとした。

想像していた姿と、全く違っていたのだ。

刑務官が壁際に移動し、後ろから姿を現した初老の女性は、燃え

るように鮮やかな赤い髪をしていた。

伴った刑務官に会釈をしてこちらを向いた彼女は、ランシュの姿を認めて少し目を見張り、そして穏やかに微笑んだ。

意志の強そうな鳶色の瞳に太い眉。健康的な褐色の肌。色素の薄いランシュとは似ても似つかない。

自分とはあまりにも違いすぎる彼女の容姿が、この人の遺伝子を一切受け継いでいない事を如実に物語っていた。

なんと言って声をかけよう。「はじめまして」でもないし、記憶にないのだから「お久しぶり」も変だ。言葉を探してランシュがためらっている隙に、彼女が口を開いた。

「こんにちは。大きくなっただね」

穏やかな笑みを湛えてランシュを見つめるその顔は、ユイと同じ母の表情だ。

「こんにちは。これ、ユイから。よろしくって」

ランシュも微笑んで、ガラスの壁に穿たれた小窓から、ユイのお菓子を差し出した。

彼女が礼を言っ受取り、互いにガラスの壁を挟んで向かい合わせに腰掛ける。

彼女はランシュの顔をしげしげと眺め、懐かしそうに目を細めた。「本当に、あの人とよく似てるわ」

そして「当たり前だったわね」と付け加えて苦笑する。

ランシュの姿を通して、法を犯してまで夢見た夫との再会を喜んでいるのだろうか。先ほど見せた母の表情は、ランシュの無意識な希望から来る、判断の誤りだったのか。

彼女の生理的数値の変化から、それを特定する事は出来なかった。ただ、ランシュに会えた事を喜んでいるのは確かだ。

感慨深げな彼女とは裏腹に、相変わらずランシュの中に、そういった感情が湧いてこない。

感動の再会を期待させるのも、気の毒な気がする。ここは正直に伝えよう。

静かな笑みを湛え、努めて冷静に淡々と、ランシュは彼女に告げた。

「ユイに言われてきました。オレの上司である科学技術局局長の家族に加えてもらった事を、あなたに報告するために」

彼女は一層笑みを深くして、静かに頷いた。

「ユイさんて、いいお母さんね。あなたには恨まれているだろうと思っていたから、こうやってわざわざ来てくれただけでも嬉しいわ」
恨んではない。だが忘れてしまうほど無関心だったのだから、それより酷いかもしれない。ここに来たのも、会うのが目的ではない。

ランシュの思惑を知ってか知らずか、彼女は静かに語り始めた。

「ずっとあなたに会いたかったの。どうしてもあなたに会いたくて、私は罪を犯したの」

それほどまでに夫の死を受け入れられなかったのだろうか。遠くを見るような彼女の目が、自分を透かしてその向こうに夫を見ているような気がしてならない。

だがそれだけではないと、ユイは言っていた。それを知るためにここに来たのだ。

ランシユは単刀直入に尋ねた。

「あなたは、どうしてオレを作ったんですか？」

「あなたに会いたかったからよ」

につこり微笑んで同じ事を繰り返す彼女に、少し苛つく。

「そんなに夫の死を認めなくなかったんですか？」

「そうね。認めなくなかったわ。でもそれ以上に悔しかったの」「悔しい？」

何か糸口のようなものが見えた気がして、ランシユは先を促す。

「ええ。私たち、結婚して十日も経ってなかったのよ」

彼女の夫は貿易関係の仕事をしていた。世界中を飛び回っている彼と、科学技術局の科学者で変則的な勤務をしている彼女は、なかなか予定が合わず、結婚までも随分時間を費やした。

彼が飛空艇に乗るのはいつもの事だった。その日もいつもと変わりになく、彼女は笑顔で彼を送り出し、三日後に帰ってくるはずだった彼は、二度と帰ってこなかった。

彼の乗った飛空艇は事故で海に墜落し、乗員乗客全員が死亡。機体は深海に沈んだため、遺体の上がらなかった者も多い。彼もその一人だった。

その事故はランシュも知っている。かつて世話になったおばあちゃんの子孫が事故の犠牲者だったからだ。ひとりでおばあちゃんのところ遊びに来た帰り、事故に遭ったらしい。

飛空艇の事故自体珍しく、これまでに数えるほどしか起きていない。そのため彼女の事を調べていて、すぐにだどりついた。

彼女が悔しいのは、滅多に起きない事故がよりにもよってという事だろうか。おばあちゃんはそう言っていた。

だが彼の場合は毎日のように乗っているのも、よりにもよってというわけでもない。確かに偶然に見舞われた不運としては、誰でも同じなのだろうが、おばあちゃんの子孫より彼の方が、事故に遭う確率は元々高かった。

他にも悔やまれるような事があったのだろうか。前日にケンカでもしていたとか、何か約束があったとか。

ランシュが考え込んでいると、彼女が見透かしたようにクスリと笑った。

「別にケンカ別れしたわけじゃないの。ただ私たち、二人でいられる事が少なかったから、どうしても二人の時間を大切にできなかったのかと悔しかった」

なんだそんな事かとランシュがガツカリしかけた時「そしてね」と彼女は続けた。

「子どもを作るのを後回しにした事を後悔したの」

彼女も彼も、当時大きな仕事を抱えていた。互いに目が回るほど忙しく、他の事にかまけている余裕はなかった。

合意の上で、子どもを作るのももう少し先にしようと決めていたのだ。そしてそのまま永遠に先送りとなってしまった。

彼女は少し自嘲気味に笑う。

「二人ともまだ若いし、いつだって子どもを持つ事は出来るから、焦らなくてもいいって思ってたのに、手に入らないと分かった途端、どうしても欲しくなるのは不思議ね」

ドクリと鼓動が脈打って、ランシュは自分が作られた理由を悟っ

た。心の高揚を察知して鼓動が早くなる。次の瞬間、視界が赤い幕に覆われた。

一度に溢れ出した様々な感情や言葉になる前の思考が、瞬時に処理できる情報の許容量を超え、人工知能が警告を発したのだ。

視界の片隅にランシュにしか見えないメッセージが表示されている。感度を上げたセンサも徒になったようだ。

ランシュはいくつかの思考回路を停止させ、人工知能を安定させる。今ここで身体ごと緊急停止して、正体をばらすわけにはいかない。

やがて視界が元の色彩を取り戻した時、目の前で心配そうに見つめる彼女と目が合った。

「どうしたの、ランシュ。泣いてるの？」

「え？」

言われて頬に手をやると、知らぬ間に涙が流れていた。

彼女はランシュの顔に向かって手を伸ばす。けれどその手はガラスの壁に阻まれて止まった。手の平をガラスにつけたまま、彼女がすまなそうに言う。

「ごめんね、ランシュ。あなたを辛い目に遭わせる事は分かった。あの頃の技術じゃ生まれても長くは生きられないって知ってたのに、それでもあの人が生きた証、私とあの人の絆の証、赤ちゃんがどうしても欲しかったの」

彼女の言葉に、知らずに流れていた涙の意味を知った。嬉しかったのだ。

ずっと誤解していた。自分の存在は、夫を失い狂気に囚われた女の、愚行が生み出した身代わりだと思っていた。

愛されているのも、求められたのも、自分自身ではなく彼女の夫なのだ。

身代わりではなく自分自身が、彼女を犯罪に走らせるほどに、望まれて生まれてきた。その事実が、いつも死の影に追い立てられていた、あの薄暗い十八年間に光を与える。

そして、これからも――。

ランシュはガラス越しに、彼女の手に手の平を重ねた。カウンタに置かれたもう片方の手は、彼女を求めるように小窓に伸びていく。その手を彼女がそつと握った。

伝わる温もりに再び涙が溢れ出し、ランシュは俯く。

「ごめんなさい。オレはユイに言われるまで、ずっとあなたの事を忘れていました。今までほとんど気に留めた事もなかったんです。ごめんなさい」

こんなにも愛されていたのに、知りもせず、知ろうともせずに。彼女はランシュの手をギュツと握る。

「いいのよ、それで。私の事を思い出してもあなたは辛いだけだもの。あなたが幸せでいてくれる事が、私の何よりの願いなんだから安心したわ。話には聞いていたけど、あなたが元気になってくれて」
ランシュが面会に来るといふ情報と共に、遺伝子治療を受けて完全回復したという話も伝わったのだらう。

それはロイド先生と口裏を合わせた方便だ。ランシュが今後も人として生きていくために。

今のランシュの身体は、彼女が作ったものではない。彼女が感じているこの手の温もりも作られたものだ。

どうして生身のうちに彼女に会いに来なかったのか、それだけが今になって悔やまれる。

未だに涙をこぼし続けるランシュの手を、彼女が軽く揺すった。

「ほら、ランシュ。もう泣かないで。男の子が簡単に泣くものじゃないわ」

「え？」

彼女の言葉がなんとなく引つかかって、ランシュは顔を上げる。

彼女は微笑んで少し首を傾げた。

「覚えてる？――わけないわね。ぐずりかけたあなたにこう言ったら、不思議と泣き止んだのよ」

ああ、そうか。これで全て謎が解けた。

ランシュは涙を拭いて、クスリと笑った。

「現金だね、オレ」

記憶の奥底に眠っていた、あの柔らかな温もりは、この人の腕の中だったのだ。

改めてその記憶を反芻すると、心の中まで温かさに包まれているような気になった。多分彼女と過ごした日々は、あの十八年の中で、一番幸せな三日間だったのだろう。

「時間です」

後ろから刑務官が、面会時間の終了を告げた。

ランシュも彼女も、手を退いて席を立つ。

「また会いに来ます」

「ええ。ありがとう」

彼女は笑って頷くと、刑務官に連れられて扉の向こうに消えて行った。

ラフルールの街が夕日に染まる。二階のバルコニーで洗濯物を取り込んでいた結衣は、ランシュが帰ってくる姿を見つけて階下へ降りた。

玄関を入ってくるランシュに声をかけると、いつものように笑って挨拶を返した。あまりにいつもと変わらない様子なので、余計に気になる。一体母親とどんなやり取りを交わしたのだろう。

結衣がうずうずしている様子を察したのか、ランシュがクスリと笑って口を開いた。

「母さんがユイの事、いいお母さんだって言ってたよ」

「あの人」が「母さん」に変わっている。明らかなランシュの変化に、思わず頬が緩む。

「大先輩にそう言ってもらえるなんて光栄ね。私なんてお母さんになっただけなのに」

何気なくお腹に手を当てると、ランシュがその上に手を重ねた。

「ユイの言っていた事わかったよ。オレもこの子と一緒にだったんだ。いた場所はお腹の中じゃなくて人工子宮の中だったけど。確かにあの感情、男には分らないかもしれないね。だけど、それほど強い愛情を注がれる事がとても幸せなことだっていうのは、男のオレにも分かるよ」

どうやら母親と、いい時間を過ごしてきたようだ。結衣のお腹を愛おしげに見つめるランシュの横顔からも、それは窺える。

実のところ結衣にも、確信があったわけではない。ロイドから聞いた話を総合して、ランシュの母は子どもが欲しかったのではないかと推測したのだ。

以前ロイドから聞いた国王陛下のクローンは、生まれてすぐに急

速成長させられたらしい。そういう技術は、ランシュが生まれる前からあったということだ。

ところがランシュは赤ちゃんのまま、成長させられてはいないという。純粹に夫のクローンが欲しかったのなら、迷わず成長させているだろう。

生まれてから発覚するまで三日あったのだ。それだけあれば少しくらい成長していてもおかしくない。

人間だった頃のランシュを、結衣は知らない。今のランシュは、十八歳当時の姿そのままだという。

病弱だったランシュは、成長も遅れ気味だったのではないだろうか。体つきも中性的で実年齢よりも若干幼く見える。弟の蒼太が十八歳の時には、もう充分むさくるしかった。

結衣には技術的なことは分からない。だが人間は身体の機能が不完全な状態で生まれてくると聞いた。

動物の赤ちゃんは生まれてすぐに立ち上がったたり、数ヶ月で親と変わらないものを食べたり出来るのに、人間は一年くらい経たないと、立つことも食べることもできない。

もしもランシュが少しでも急速成長させられていたら、筋力や内臓の機能が普通の子ども並みには強化されて、もう少し丈夫になったのではないだろうか。

本当のところはロイドにもよく分からないらしいが、急速成長させられた国王陛下のクローンは、オリジナルの国王よりも丈夫だったらしい。

それに比べ不妊治療の一環として、普通に生まれ育ったクローンたちは、皆ランシュ同様病弱で、中には十歳に満たない若さで亡くなった者もいるという。

身体を成長させるための細胞分裂を繰り返す度に、元々短い寿命をすり減らすからだろうとロイドは言う。

培養槽での急速成長は、内臓などの機能を一切使うことなく直接細胞に栄養を与えるので、臓器や体機能への負担が少ないらしい。

皮肉にも母の愛が、かえってランシュの寿命を縮めていたということなのだろう。

それでもランシュにとって、それは救いになったに違いない。実験動物や身代わりではなく自分自身が、母に望まれて生まれてきたのだ。

ランシュは結衣の手を取り、穏やかに微笑んだ。

「ユイが会いに行くように言ってくれたおかげで、オレが生まれてきた理由がわかった。ありがとう、ユイ」

少し力を加えてキュツと手を握った後、ランシュは結衣の頬に軽くキスをした。

「どういたしまして」

誤解が解けてよかったと結衣がホッと微笑んでいると、ランシュの後ろからぬつと腕が伸びてきた。

「こら」

「わっ」

後ろに引つ張られて、ランシュがよろめく。いつの間に帰ってきたのか、不機嫌そうなロイドが、結衣から引き剥がしたランシュの額をペシッと叩いた。

「ったく。油断も隙もあつたもんじゃない、このエロ息子」

「変な言い方しないで下さい。感謝のキスじゃないですか」

ムツとして反論するランシュの額を、ロイドはもう一度叩く。

「黙れ。ユイの国じゃ、親兄弟とキスはしないんだ。おまえもソータから聞いただろう」

「ここは克蘭ベールで、オレは克蘭ベール人です。あなただつてオレにキスしたことあるでしょう?」

「ええ?!」

ランシュの言わんとすることは分かっていたが、結衣はわざと派手に驚いて見せた。案の定ロイドは、おもしろいほどうろたえて即座に言い訳をする。

「勘違いするな。こいつが子どもの頃の話だ」

あまりに予想通りの反応に、結衣はクスリと笑う。

ランシュは呆れたように大きくため息をついた。

「オレのキスなんて人形のキスと変わらないんだから、そんなに目くじら立てなくても……」

「都合のいい時だけロボットになるな。道具が相手と変わらないとか言つて、それ以上の行為に及んだら許さないからな」

「……え……」

結衣とランシュは同時に声を発して、次の瞬間絶句する。咄嗟に顔を見合わせた後、ランシュが気恥ずかしそうに目を逸らした。

そして困ったように横目でロイドを睨む。

「そんな事考えてもいませんでしたよ。変な想像しないで下さい。こっちが恥ずかしいです」

また余計な事に気付いてしまった。ランシュは恥ずかしくても赤面したり出来ないようだ。

ロイドは涼しい顔で、ランシュの額を叩く。

「今想像しただろう。エロ息子」

「やめて下さい。ユイはオレのお母さんで、あなたはお父さんなんですよ。データの上では。なんならお父さんと呼びましょうか」

「やめろ」

言い争っているながらも、以前のような険悪な雰囲気がないせいか、どこことなく微笑ましい。

結衣は二人に背を向けて台所へ向かった。

「ユイ、どこへ行く」

気付いたロイドが声をかけた。結衣は振り返り、笑いながら言う。

「晩ご飯の支度しないと。あなたたちは仲良くケンカしてていいわ」
そしてそのまま台所へ向かった。

「あ、オレ手伝うよ」

「行かなくていい」

後ろから二人の声が聞こえたが、結局ロイドに引き止められたように、ランシュは台所へは来なかった。

唯一気になっていたランシュと母親の懸案が解決し、本当に幸せな日常が戻って来た。

まだほとんど実感の湧かないお腹を、結衣はそつと撫でる。

この子が生まれてきたら、二人は奪い合って争いそうな気がする。なんとなくそんな光景が目に見えた。それはそれで益々賑やかで楽しそうだ。

ランシュが憧れた温かい家庭。ロイドが約束してくれた幸せな家庭。そんな何気ない日常がずっと続けばいいと結衣は密かに願った。

（完）

番外編 大志を抱け（前書き）

ランシュと副局長の出会いの話です。
ランシュがまだ子どもの頃です。

番外編 大志を抱け

優しくて可愛らしい、笑顔の副局長。ランシュは本当に、そんなフェティを知っている。

あれはまだ、ランシュが子どもで、フェティが副局長ではなく入局して間もない新人局員だった頃の事だ。

病弱であり騒ぐ事もなく、お行儀よくて聞き分けのいいランシュは、局内の女性たちに可愛がられていた。

ちようどそういう年頃だったのかもしれない。優しくされたり、かまわれたりするのがランシュには少しうつつとうしかった。

長くは生きられないという、自分の運命はすでに知っていた。彼女たちの優しさが、かわいそうな子どもに対する憐れみのような気がして、なおさら心は冷めてしまう。

表には出さなかったが、ランシュは内心かわい気のない子どもだった。

ランシュの部屋は研究室の並ぶ一角にあった。部屋の外をうろついていると、必ずと言っていいほど、女性研究者にかまわれる。

今日も局内の図書室で、若い女性局員にお気に入りの本をお薦めされた。

礼を言つて薦められた本を手取る。

彼女が子どもの頃に夢中になったというその本は、弱虫だった少年が不思議な縁と運命に導かれ、やがては世界を救う勇者へと成長していくという、冒険ファンタジーだった。

ランシュはその場でパラパラとページをめくり、お薦めした彼女がいない事を確認して、本を棚に戻した。

興味ない。こんな子供騙しな絵空事。現実から目を背け、夢の世界に遊べとも言っのか。

フンと鼻を鳴らして本棚に背を向けた時、背後でクスリと笑い声が聞こえた。

「いい性格してるのね、あなた」

振り返ると、ブロンドの美女がいた。

口元に微かな笑みを湛え、ガラス玉のように澄んだブルーの瞳がランシュの心の奥を見透かしたかのように、真っ直ぐこちらを見据えている。

白衣を羽織っているという事は、研究者なのだろう。

やたらと女性にかまわれるし、あまり数もないので、ほとんどの女性局員の顔は把握しているつもりだった。けれど彼女には見覚えがない。

彼女は側まで来ると、ランシュが戻した本を手に取り、表紙を眺めてすぐ棚に戻した。

「冒険物語には興味ないの？」

「そういう作り話には興味ない。オレにとっては現実の方がよっぽど作り話みたいだもの」

「ふーん。冷めてるのね。普段の人当たりがいい、いい子ちゃんは演技だったの？」

「別に……。反抗したりするの、面倒なだけ」

人付き合いに限らず、ランシュは何もかもが面倒だと思っていた。彼女の方はランシュの事を知っているようだ。それも当然と言えば当然だろう。一般人が立ち入れない領域を、うろついている子どもなど、目立ってしょうがない。

誰なのか尋ねると、彼女は今年入局したバイオ科学者で、フェティ・クリネと名乗った。

局内をうろついている子どもが珍しくて、ずっとランシュを観察していたらしい。バイオ科学者なら、なおさらランシュの事は興味深かっただろう。

ランシュはニヤリと笑い、フェティに尋ねた。

「何かおもしろい発見でもあった？」

「なんの事？」

彼女は訝しげに眉をひそめる。

「だってオレは、この世でたったひとりしかない体細胞クローンの生きたサンプルだよ。何か訊きたいから声をかけたんじゃないの？」

フェティの目が少し見開かれ、形のいい眉が一瞬ピクリとつり上がった。てつきり怒り出すものと思ったら、彼女はフツと笑った。

「そうね。あなたは確かに興味深いわ。だから一言言ってやりたかったの」

フェティはランシュの鼻先に、ビシリと人差し指を突きつけた。

「子どものくせに覇氣がない」

「ええ？」

思いも寄らない事を言われ、ランシュは空気が漏れたような声を上げた。覇氣なんかどうやってたら持てるのか、こちらが聞きたいくらいだ。

「おとなしくて人当たりがよくて、いう事をよく聞くいい子だけど、あなた誰にも、何にも興味持っていないでしょ。食べる事すらどうでもよさそうなもの」

なるほど、よく観察している。さすがは研究者と言うべきか。

「あなた、自分のいる環境を理解しているの？」

「してるよ」

ここは研究施設で、自分は出来そこないの実験サンプルだ。

「だったら、どうしてそんなに無氣力なのよ。私なんて毎日ワクワクしてしかたないのに」

「へ？」

どこにそんなテンションの上がる要素があるのか、ランシュには理解できなかった。

フェティは目を輝かせて、興奮したようにまくし立てる。

「ここはそう簡単に入る事の出来ない場所なのよ。そこに二十四時間いられるあなたは恵まれているわ。周りは超一流の科学者ばかり

で、学べる事はたくさんあるでしょ？」

確かにフェティにとってはそうだろう。科学技術局の入局試験は超難関だと聞いている。知識や技術以外に、人格や素行も評価の対象になるらしい。

その難関を突破して入ってきたばかりの彼女が、やる気に溢れているのは納得できる。

だが自分は――。

「学んでもオレにはそれを活かせないよ。二十歳まで生きられるかどうか分からないって言われてる。あと十年もないんだよ」

俯くランシュの頭を、フェティがサラリと撫でた。顔を上げると、見下ろす優しい眼差しと視線がぶつかった。

フワリと花のような笑みを浮かべ、けれどキツパリとした口調でフェティは言う。

「だったら、やっぱり学びなさい。失うのが惜しいと思われるような、一角の人物になってやりなさいよ。あなたが学んで得た知識や残した功績は、あなた自身に活かす事が出来なかったとしても、ここにいる超優秀な科学者たちが存分に活かしてくれるわ」

どちらにせよ、とにかく学べと言うフェティがおかしくて、ランシュは声を上げて笑った。

彼女の言葉に憐れみは感じられない。純粹な励ましが嬉しくて、かつて経験した事がないほど気持ち昂ぶり笑いが止まらない。

「そんな風に笑うとこ初めて見たわ。何がおかしいの？」

呆れたようにつぶやくフェティに、ようやく笑いの収まったランシュは告げた。

「オレ、機械が好きなんだ。機械の事、もっと色々知りたい」
「そう」

フェティは満足げに目を細めた。

「ありがとう。フェティ」

腕を伸ばしてフェティの首に回し、思い切り背伸びをして、ランシュは彼女の頬にキスをした。

少し驚いたように目をしばたいた後、フェティは「どういたしまして」と言いながら、照れくさそうに笑った。
少し頬を染めた少女のような愛らしい笑顔が、ランシュの胸に焼き付いた。

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6050p/>

バイナリー・ハート

2011年10月4日23時41分発行